

福井県埋蔵文化財調査報告 第156集

小野遺跡 小野平等遺跡

— 日野川総合開発事業吉野瀬川ダムに伴う調査 —

2015

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第156集

小野遺跡 小野平等遺跡

— 日野川総合開発事業吉野瀬川ダムに伴う調査 —

2015

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、日野川総合開発事業吉野瀬川ダム建設に伴って、越前市小野町地係において平成22・23年度に発掘調査を実施しました小野遺跡、小野平等遺跡の調査成果がまとまり、報告書を刊行することとなりました。

両遺跡が位置する小野町は、ダム建設に伴い移転をした二つの集落の内の一つです。ダム建設にあたり、事前に分布調査を実施し、遺物を採集したことにより調査を実施することとなりました。その結果、小野遺跡は旧集落跡地であったため、遺構・遺物の残存状況は良好ではありませんでしたが、古代に国府が置かれ、越前の政治、経済の中心であった府中(旧武生市)と、府中の港である河野浦を結ぶ中間に位置しており、中継地点の側面を持っていたと考えられます。小野平等遺跡は、五輪塔・宝篋印塔などの石塔が出土し、墓域であったことが判明しました。

今後、この調査の成果が広く公開、活用され、埋蔵文化財に対する理解をより一層深めていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご配慮を頂きましたことを、深く感謝申し上げます。

平成27年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 畠 中 清 隆

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが日野川総合開発事業吉野瀬川ダムに伴い、平成22年度から23年度にかけて実施した小野遺跡と、平成23年度に実施した小野平等遺跡(ともに福井県越前市小野町所在)の発掘調査報告書である。
- 2 小野遺跡、小野平等遺跡の発掘調査は、吉野瀬川ダム建設事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、野路昌嗣、杉山大晋が担当した。
- 3 発掘調査は、平成22年度は5月6日から同年12月24日まで実施した。平成23年度は、小野遺跡を平成23年4月1日から9月30日まで、小野平等遺跡を同年10月3日から11月24日まで実施した。小野遺跡、小野平等遺跡の遺物整理作業は、平成23年4月1日から平成27年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は野路があたり、中島啓太、野路が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下の通りである。中島担当の原稿については、野路が加筆を行って編集しており、その文責は野路に帰する。野路 第1章～第5章 中島 第3章第3節3、7、9
- 5 遺構、遺物の図化と図版作成は杉田曜、木村茉莉、杉山、中島、野路が行った。遺構、遺物の写真撮影と図版作成は野路が行なった。
- 6 小野遺跡、小野平等遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 7 本書に掲載した遺構図は、株式会社帝国コンサルタント、株式会社キミコンに委託し作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は、航空測量時に上記各社が撮影したものである。
- 8 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は世界測地系第VI系に基づく。
- 9 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 10 本書で用いた遺構の略記号は、次のとおりである。
建物：SB、土坑：SK、溝：SD、井戸：SE、柱穴・小穴：SP、不明遺構：SX
- 11 本書で扱う近世とは、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011『福井城跡(泉橋地点)』に準拠し、慶長6年(1601)の結城秀康の越前国入国と福井城築城を以て近世の始まりとする。
- 12 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々および機関のご協力やご助言を頂いた(順不同、敬称略)。
網谷克彦、岩田隆、河村健史、長栄山本行寺、越前市広瀬町町内会、越前市広瀬町新小野地区町内会、吉野瀬川ダム建設事務所
- 13 発掘調査には、地元の方々の参加、ご協力を得た。遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があつた。

目 次

第1章	調査に至る経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	2
第2章	遺跡の地理的・歴史的環境	7
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	8
第3章	小野遺跡の調査	13
第1節	遺跡の概要	13
第2節	遺構	25
第3節	遺物	50
第4章	小野平等遺跡の調査	91
第1節	遺跡の概要	91
第2節	遺構	92
第3節	遺物	95
第5章	まとめ	101
第1節	小野遺跡について	101
第2節	小野平等遺跡について	104

写真図版目次

- 図版第1 小野遺跡 遺跡
(1) 遺跡全景
(2) 平成22年度調査区中央部
(3) 平成22年度調査区中央部
(4) 平成22年度調査区東側
(5) 平成22年度調査区西側
- 図版第2 小野遺跡 遺跡・遺構
(1) 平成23年度調査区東側
(2) 平成23年度調査区西側
(3) K・L 9・10区遺構
(4) E・F 13・14区遺構
(5) SB18
(6) SB09・10
(7) SB23
- 図版第3 小野遺跡 遺構
(1) SK02
(2) SK03
(3) SK05
(4) SK05遺物出土状況
(5) SK21
(6) SK23
(7) SK25
(8) SK40・42
- 図版第4 小野遺跡 遺構
(1) SK52
(2) SK60
(3) SK78
(4) SK80・87
(5) SK81
(6) SK82・83・84
(7) SK107・SP582
(8) SK105
- 図版第5 小野遺跡 遺構
(1) SD03
(2) SD03遺物出土状況
(3) SD45
(4) SD42遺物出土状況
(5) SE01
- (6) SE03
(7) SE03断面
- 図版第6 小野遺跡 遺構
(1) SE04
(2) SE04断面
(3) SE04底面
(4) SE05
(5) SE05断面
(6) SP332
(7) SP343
(8) SP565
- 図版第7 小野遺跡 遺物 陶磁器
- 図版第8 小野遺跡 遺物 陶磁器・瓦質土器
- 図版第9 小野遺跡 遺物 越前焼
- 図版第10 小野遺跡 遺物 越前焼・常滑焼
・土師質皿
- 図版第11 小野遺跡 遺物 石製品
- 図版第12 小野遺跡 遺物
(1) 砥石
(2) 硯
(3) 漆器・木製品
- 図版第13 小野遺跡 遺物
(1) 金属製品・貨幣
(2) 須恵器・縄文土器
- 図版第14 小野平等遺跡 遺跡・遺構
(1) 調査前全景
(2) 平坦面調査前
(3) SX1・2調査前
(4) SX1調査前近景
(5) SX2調査前近景
(6) SX1畔断面
(7) SX2畔断面
(8) SX1掘削後
- 図版第15 小野平等遺跡 遺構
(1) SX2掘削後
(2) 石塔露出状況
(3) SX4
(4) 石塔出土状況

- (5) SX4火輪出土状況
 (6) 空風輪出土状況
 (7) SX3

- (8) 平坦面掘削後
 図版第16 小野平等遺跡 遺物
 石塔・須恵器・陶磁器

挿 図 目 次

第1図	事業の概略図	1	第32図	土師質皿分類図	52
第2図	遺跡位置図	3	第33図	遺構出土土器・陶磁器実測図1	54
第3図	小野遺跡・小野平等遺跡グリッド 配置図	4	第34図	遺構出土土器・陶磁器実測図2	55
第4図	遺跡周辺の地形図	7	第35図	遺構出土土器・陶磁器実測図3	56
第5図	周辺の遺跡分布図	10	第36図	遺構出土土器・陶磁器実測図4	57
第6図	現在の題目岩	12	第37図	遺構出土土器・陶磁器実測図5	58
第7図	土層模式図	14	第38図	遺構出土土器・陶磁器実測図6	59
第8図	遺構全体図	15・16	第39図	遺構出土土器・陶磁器実測図7	60
第9図	遺構図1	17	第40図	遺構出土土器・陶磁器実測図8	61
第10図	遺構図2	18	第41図	遺構外出土土器・陶磁器実測図1	62
第11図	遺構図3	19	第42図	遺構外出土土器・陶磁器実測図2	63
第12図	遺構図4	20	第43図	遺構外出土土器・陶磁器実測図3	64
第13図	遺構図5	21	第44図	行火実測図	68
第14図	遺構図6	22	第45図	石臼実測図1	69
第15図	遺構図7	23	第46図	石臼実測図2・その他の石製品実測図	70
第16図	遺構図8	24	第47図	砥石・硯実測図	71
第17図	建物(SB01~06)実測図	35	第48図	漆器・木製品実測図	72
第18図	建物(SB07~11)実測図	36	第49図	金属製品実測図	73
第19図	建物(SB12~16)実測図	37	第50図	銭貨・貨幣拓影	73
第20図	建物(SB17~20)実測図	38	第51図	須恵器・土師器実測図	74
第21図	建物(SB21~23)実測図	39	第52図	縄文土器実測図	74
第22図	建物(SB23~24)実測図	40	第53図	小野平等遺跡全体図	92
第23図	土坑実測図1	41	第54図	SX1・2平面図	93
第24図	土坑実測図2	42	第55図	SX1・2土層図	94
第25図	土坑実測図3	43	第56図	北側斜面土層図	95
第26図	土坑実測図4	44	第57図	SX3平面図・土層図	96
第27図	土坑実測図5	45	第58図	SX4石塔出土状況図	96
第28図	土坑実測図6	46	第59図	小野平等遺跡掘削後平面図	97
第29図	土坑実測図7	47	第60図	石塔実測図	98
第30図	溝断面実測図	48	第61図	水輪拓影	98
第31図	井戸実測図	49	第62図	土器・陶磁器実測図、銭貨拓影	99
			第63図	府中と日本海を結ぶ主な街道	104

表 目 次

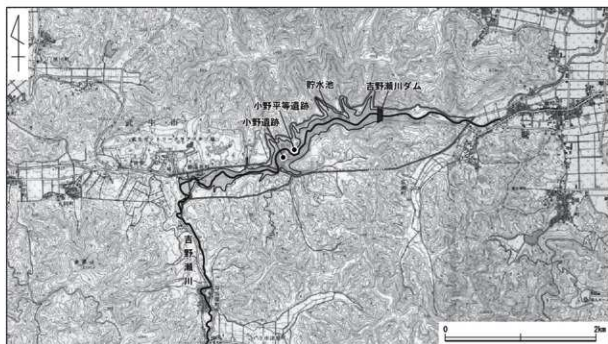
第1表	周辺の遺跡分布図一覧表……………11	第9表	金属製品観察表……………87
第2表	土器・陶磁器観察表……………75	第10表	銭貨・貨幣観察表……………87
第3表	行火観察表……………85	第11表	古代の遺物観察表……………89
第4表	石臼観察表……………85	第12表	縄文土器観察表……………90
第5表	砥石・硯観察表……………86	第13表	石塔観察表……………100
第6表	その他の石製品観察表……………86	第14表	土器・陶磁器観察表……………100
第7表	漆器観察表……………86	第15表	銭貨観察表……………100
第8表	木製品観察表……………87		

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

越前市南西部の矢良集岳(標高472m)を源流とする吉野瀬川は丹生山地・南条山地間を西流し、越前市広瀬町内で北東に流れを変え、鯖江市熊田町と鳥井町の境付近で、北流する日野川と合流する流域面積59.0km²、流路延長18.3kmの一級河川である。吉野瀬川の流域は、以前から大雨のたびに中・下流域の町が浸水するなど、洪水被害の多い地域であった。そのため、平成3年(1991)に福井県南土木事務所および福井県土木部河川課は、概ね30年に1度の確率で発生する降雨による洪水を安全に流下させ、流域の家屋の浸水を防止するために、また、10年に1度の確立で発生する渇水に対し必要な流量を確保するため、蛇行する吉野瀬川下流部を放水路として直線の流路に変更すると共に、上流部に堤高59.5m、総貯水量830万m³の重力式コンクリートダムを建設する「日野川総合開発事業」を採択した。この事業は、南条郡南越前町に所在する平成17年(2005)に完成した榎谷ダムと合わせ、越前市および鯖江市の地下水障害の未然防止と、将来の工業用水需要に対する安定した供給の確保を図り、同地域の発展に寄与することを目的とするもので、農業用水・上水・工業用水などの水源開発および治水安全度の向上を目的とした日野川流域水資源総合開発事業の一環である。

事業は、昭和59年(1984)に河川改修計画が当時の建設省の認可を受けた。平成9年(1997)にダムと放水路を含めた全体計画が認可を受けた後、平成12年度から用地着手にかかり、用地内に位置する小野町・勝蓮花町の二集落が移転することになった。これに伴い吉野瀬川ダム建設事務所(以下、ダム事務所と略)は、吉野瀬川ダム建設工事区域内の埋蔵文化財分布調査を福井県教育庁埋蔵文化財調査センター(以下、県埋文と略)に依頼した。県埋文は、平成19年(2007)4月16日～4月20日にかけて、越前市広瀬町・旧小野町・旧勝蓮花町地係において埋蔵文化財分布調査を行い、ダム建設により水没する範囲、およびダム工事用道路の建設により削平される範囲を踏査した(第1図)。分布調査の結果、旧小野町の集落跡地では古代の須恵器片を、広瀬町の水田部分でも古代の須恵器や中世の土器を採集した。また、後日



第1図 事業の概略図(縮尺1/50,000)

の補足により、吉野瀬川を挟んだ旧小野町集落跡の対岸の字「平等」にて、拳大～人頭大の礫を積み上げた石積みをも2基、五輪塔の水輪4点の集積と、空風輪1点、火輪1点と塔片を確認したことから、中世墓の存在を想定した。そのため、県埋文は水没する旧小野町の集落跡地と、対岸の平等については試掘調査の必要がある旨をダム事務所へ回答した。上記の結果を受け、ダム事務所は埋蔵文化財の試掘調査を県埋文に依頼し、県埋文は同年5月28・29日に旧小野町集落跡において試掘調査を実施した。また、平等については試掘調査の結果を受けて判断することになった。試掘調査の結果、主に中世・近世の遺物の他、土坑状遺構、小穴などを確認し、本格調査が必要である旨を回答した。この結果を基に福井県教育委員会は、越前市教育委員会と未周知遺跡について協議を行い、遺構・遺物を確認した小野遺跡を集落遺跡として、石塔片を確認した小野平等遺跡をその他の墓として、須恵器を採集した広瀬戸谷口野遺跡を散布地として遺跡地図に登録を行った。その後、ダム事務所と県埋文は試掘結果をもとに協議を行い、小野遺跡、小野平等遺跡の発掘調査を平成22年度以降、2～3年に亘る予定で発掘調査を行うことで合意し、初年度は旧県道武生米ノ線より北側の発掘調査を行い、北側の範囲の表土掘ぎ時に合わせて、旧県道部分の試掘調査を行うこと、小野平等遺跡については、平成22年度中に試掘調査を行い、本格調査の要否と調査となった場合の範囲確認を行うことになった。しかし、吉野瀬川ダム建設工事が採択された時点では、周辺地域の経済活動は活発であり、想定された工業用水の需要が見込めたものの、次第に周辺企業の環境に対する取り組みに関し、積極的に工業用水を再利用することが行われるようになった。このような社会・経済情勢の変化から、新たな工業用水の需要が見込めないことが次第に明らかとなった。そのため福井県は工業用水事業を中止し、治水上の安全のための治水ダムに特化して事業を継続することが妥当であると判断するに至り、地元の越前市および吉野瀬川下流の鯖江市からも、治水ダムとしての事業継続の強い要請があり、公共事業等評価委員会からも、治水ダムに変更し継続することが妥当という評価を得て、平成20年(2008)に治水専用ダムとして事業は継続された。

紆余曲折のあった計画であったものの、平成22年度4月から行う小野遺跡の発掘調査面積は9,200㎡で合意したが、平成22年2月の時点で予算等の措置が不透明のため1ヶ月延期となり、最終的に調査開始は平成22年5月から同年12月までの8ヶ月間となった。調査面積についても、試掘調査の結果から埋蔵文化財に影響がない北東部に工事用仮設道路を設ける部分の面積を省くなど、調査面積を7,300㎡に変更して行うことになった。旧県道部分については、道路敷設時の掘削などにより、遺構・遺物は確認されず、発掘調査の必要はないこと、また、小野平等遺跡の調査面積は平成22年12月3日から同月17日までに行った試掘調査により、新たに石塔の露出を確認し、750㎡の範囲の本格調査が必要であると判明した。そして、平成23年(2012)度の調査は旧県道より南側と小野平等遺跡を連続して行うこと、期間は平成23年4月から11月までと決定し、調査面積は小野遺跡が5,300㎡、小野平等遺跡が750㎡で行うことになった(第2図)。

第2節 調査の経過

両遺跡の調査は2ヵ年に亘る。平成22年度の小野遺跡の調査区は旧県道武生米ノ線から北側の範囲である。調査期間中に小野平等遺跡調査区の竹の伐採と撤去、および試掘調査を行い、年度末には小野遺跡の次年度調査区の表土掘ぎの一部を先行して行った。平成23年度の小野遺跡の調査は旧県道から南側の範囲である。小野平等遺跡は前年度の試掘調査の結果から、小野遺跡終了後に調査を行うことになったが、夏場などは下草が繁茂し過ぎないように、刈り取りなどの諸作業を随時行った。



第2図 道路位置図 (縮尺1/4,000)

また、両遺跡の調査区には、実測作業や遺物を取り上げる目安として、10m四方のグリッドを設定し、東西にアルファベットを、南北に算用数字を付した(第3図)。以下に発掘調査日誌を抄録する。

—平成22年度—

4月14～28日 表土剥ぎを行う。表土剥ぎ最終日の28日には旧県道武生米ノ線部分の試掘調査を行い、その結果、道路造成の際の削平により、遺構や遺物は確認できなかった。

5月6日 調査開始にあたり、器材等の準備を行う。

5月19日 作業員集合し、作業を開始する。ベルトコンベアーを設置し、トレンチを掘削する。

5月20・21日 C～G 2～5区内においてトレンチ掘削と包含層の掘削を行う。

5月25日 D 3～5区遺構面検出を行う。

5月27日 D・E 2～5区の遺構確認面検出作業を行う。

5月31日 G 3・4区において包含層を掘削する。

6月1日 F・G 2～4区の包含層掘削と遺構検出作業を行う。

6月3日 G 5区の掘削を行う。須恵器が出土する。F 2区を中心に遺構掘削を行う。

6月4～7日 F・G 4・5区の包含層掘削作業を行う。

6月9～10日 F 2・3区遺構掘削作業を行う。

6月11～17日 F・G 3～5区の遺構面検出作業と遺構掘削を行う。

6月21日 D・E 3・4区の遺構掘削を行う。

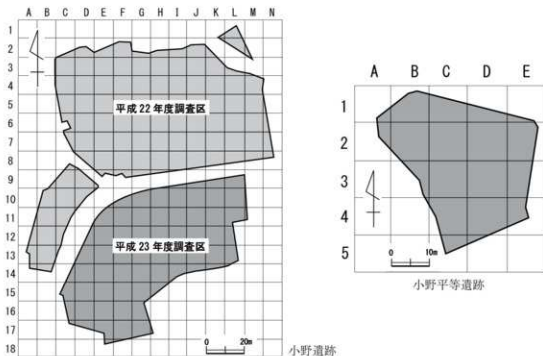
6月24日 SK03・04掘削、およびE 5・6区遺構検出作業を行う。

7月1日 G 6～8列、F・G 7列にトレンチ掘削を行う。

7月5～9日 E・F 5・6区、G 6～8区の掘削と遺構面の検出作業を行う。

7月21日 SK02・05の遺構写真を撮影する。

7月22日 SK03遺構写真を撮影する。



第3図 小野遺跡・小野平等遺跡グリッド配置図(縮尺1/2,000・1/1,000)

- 8月2～6日 セクションベルトの掘削や遺構の完掘を行う。
- 8月9日 調査区中央部の全景写真撮影を行う。
- 8月10日 1回目の空中測量を行う。
- 8月11日 調査区西側の作業に移る。H・I 3・4区にトレンチを掘削する。
- 8月17日 I・J列6・7列にトレンチを掘削する。
- 8月20～25日 H・I 6～8区の遺構面検出と掘削作業を行う。東西方向の溝状遺構が並行している。
- 8月26日 I～K 6区の遺構確認面検出作業を行う。
- 9月9～14日 L・M 4～6区を中心に遺構面検出作業を行う。
- 9月21～24日 K 7・8区を中心に遺構面検出作業を行う。
- 9月27～28日 N 5～8区の遺構面検出と遺構掘削を行う。
- 9月30日～10月8日 段丘面下段H・I 3～5区の掘削を行う。
- 10月12～14日 小野平等遺跡の竹の伐採が始まる。J・K 3・4区を集中して掘削する。須臾器が少量出土する。
- 10月18～21日 I・J 2・3区、L・M 4区の包含層を掘削する。
- 10月26日 西側調査区A～D・8～13区にて、グリッド杭に沿ってトレンチを掘削する。
- 10月29日 仮設道路北東の調査区(K～M 1～3区)の掘削を行う。
- 11月8日 西側調査区にて作業を行う。削平により遺構の残存は悪い。
- 11月10日 西側調査区内の遺構面検出作業を行う。
- 11月16日 東側調査区の空中測量を行う。
- 11月17日 東側調査区的全景写真撮影を行う。
- 11月18～25日 西側調査区の遺構確認面検出作業と遺構掘削作業を行う。
- 11月24～11月30日 小野平等遺跡の伐採した竹を撤去する。同時に小野遺跡は遺構掘削を行う。
- 12月2日 小野平等遺跡の現況写真撮影を行う。
- 12月3日 小野平等遺跡の試掘調査を開始する。以後、日によっては小野遺跡と並行して作業を行う。
- 12月8日 小野遺跡の西側調査区全景写真撮影。午後より、西側調査区の空中測量を行う。
- 12月10日 小野平等遺跡の試掘調査。北側山際の狭い平坦面に火輪1点が露出しているのを確認する。
- 12月13日 小野平等遺跡の試掘調査において、北側山際の平坦面に十字にトレンチを掘削する。火輪の下の水輪を確認するが、地輪は未確認である。
- 12月14日 小野平等遺跡の試掘調査において、北側山際の平坦面のトレンチ内の礫を外す。
- 12月17日 小野平等遺跡試掘調査は、山際平坦面のトレンチ東側を地山まで掘削して終了する。
- 12月20～24日 冬季に向け、小野平等遺跡の養生を行う。両遺跡の後片付けなど近辺の清掃と諸設備の撤去を行い終了する。
- 平成23年3月14～25日 平成23年度の小野遺跡調査区の表土剥ぎ、杭打ちを先行して行い、8割程度終了する。

－平成23年度－

- 4月1日 作業開始。
- 4月11日 E～G 10～11区にトレンチを掘削する。
- 4月12～14日 K 9・10区を中心に遺構面精査および遺構掘削を行う。

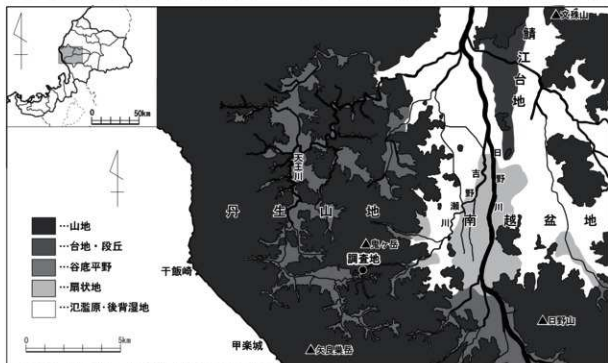
- 4月15～19日 G～K区にかけてトレンチを入れる。削平された部分を確認した。
- 4月20～27日 H・I区にトレンチを掘削し、遺構検出作業を行う。
- 5月2～9日 H12～14区の遺構確認面の検出作業と遺構掘削を行う。
- 5月16～18日 K・L13区の掘削を行う。H10・11区掘り下げとG・H列10・11区南北トレンチの掘削を行う。
- 5月17～20日 G・H列南北トレンチ掘削続きを行う。F・G10・11区、遺構確認面を検出していく。F・G11・12区、E・F10～12区の掘削やH・I13・14区の掘削を行う。
- 5月23～26日 I区10・11区にトレンチを入れる。G10・11区の掘削と、遺構面検出作業を行う。
- 5月27日 小野平等遺跡の竹、下草の伐採と小野遺跡F11区の遺構面検出作業を行う。
- 6月6日 G10・11区の遺構面精査。SD40の掘削を行う。上層から銭貨が出土する。
- 6月7日 C～E15～17区の掘削を行う。F・G10・11区にて遺構の検出作業と遺構掘削を行う。
- 6月8～15日 F・G10・11区を中心に精査、半掘を行う。SD40の掘削を行う。
- 6月24日 D～F12区の掘削作業と遺構確認面の検出作業を行う。
- 7月12日 調査区東側(H～N区)の測量を行う。
- 7月13日 調査区東側(H～N区)の全景写真撮影を行う。
- 7月22日 小野平等遺跡現況測量を行う。
- 7月26日～8月1日 D～G12区の遺構掘削と攪乱部分の除去を行う。
- 7月22日 E～G区14・15区の遺構面検出作業を行う。
- 8月5～11日 E・F13区の遺構掘削を行う。
- 8月22～25日 E～G14～17区の掘削作業を行う。
- 8月31日 SK103から一分金が出土する。
- 9月1日 SE03・05を完掘する。
- 9月6日 G11区を中心に再精査する。溝(SD45)を掘削する。G12区Ⅱ層から、縄文土器片が出土する。
- 10月3日 SE04の写真撮影を行う。
- 10月4日 調査区西側(C～G区)の全景写真撮影を行う。小野平等遺跡の草刈り、清掃を行う。
- 10月6日 調査区西側(C～G区)の空撮を行う。小野平等遺跡は表土面の検出を行う。
- 10月12日 小野平等遺跡にて 山際の掘削の続きを行う。空風輪、火輪が出土する。
- 10月14日 小野平等遺跡、A～C1・2区の掘削続き。SX1・2の小礫の除去を行う。
- 10月17日 小野平等遺跡はD・E1・2区の表土掘削。E2区からは須恵器が出土した。
- 10月24日 SX2の掘削を行う。C2区、C3区南半の掘削を行う。
- 11月7日 SX1・2の清掃と写真撮影を行う。C・D3・4区の包含層掘削を行う。
- 11月17日 小野平等遺跡の空撮を行う。
- 11月24日 器材の補修、プレハブ内の清掃などを行い、現場作業を終了する。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境(第4図)

福井県は、行政的には敦賀市北東の木ノ芽山嶺を境に北部を嶺北地方、南部を嶺南地方と呼び分けるが、旧国名では敦賀以北を越前国、以南を若狭国と称していた。越前市は、越前国のほぼ中央に位置し、平成17年(2005)10月に旧武生市と旧今立町が合併して誕生した市である。山地と盆地からなる地形を呈し、市城の東に越前中央山地、南に南条山地、西に丹生山地の3つの山地に囲まれ、北は丹生山地と、越前中央山地から西に延びる文殊山、および、丹生山地、越前中央山地間にある城山、経ヶ岳などの独立丘陵により狭められる。これより北を狭義の福井平野とし、南北方向にのびている鯖江台地を含む以南を南越盆地(または丹南平野など)と呼ぶ。

丹生山地は、南越盆地南部から日本海側の千飯崎に東西方向にのびる吉野瀬川断層以北を指す。丹生山地の西側は急斜面となり日本海に臨むが、東側は西側と比較すると緩やかに傾斜し、南越盆地へと続く。南越盆地と接する山麓部は山地間を侵食し南越盆地内へ流れ込む吉野瀬川、大虫川などの河川による扇状地が形成され複雑な屈曲部を多く有する。このような丹生山地内には織田盆地、宮崎盆地、白山盆地などの農山村集落が立地する大小の規模の盆地が散在している。また、市城南側の南条山地は、吉野瀬川を境に丹生山地と接している。南条山地の西側は、丹生山地と同様に急斜面をもって若狭湾に臨み、日野河谷を境に東側には越前五山の一つである日野山(795m)が聳え、岐阜県境より続く越美山地に連なる。市城東側の越前中央山地西側は、丹生山地と同様に文室川や鞍谷川などの河川による扇状地が形成され、屈曲した緩斜面を有している。これら山地に囲まれた南越盆地は典型的な沈降盆地であり、丹生山地や越前中央山地からの諸河川と、盆地内を南北に貫流する日野川の沖積作用によって形成されたものである。日野川の形成した扇状地、氾濫原は盆地北端部の文殊山付近にまでおよび、盆地内には丹生山地、越前中央山地と同様の地質で、もとは一連の山地であった愛宕山(103m)、茶臼山(135m)、村国



第4図 遺跡周辺の地形図(縮尺1/40万・1/20万)

山(239m)、三里山(334m)、妙法寺山(235m)などの独立丘陵が存在している。

今回の調査地が位置するのは、南越盆地西端から約4km西方の、丹生山地と南条山地の間に挟まれた吉野瀬川が形成した谷底平野である。遺跡の標高は約94m～97mを測る。吉野瀬川は南条山地の矢良果岳を源とし、北流の後、旧藤蓮花町付近で西方からの丸岡川と合流し、丹生・南条山地間を東流する。山地間を蛇行、侵食して流れる吉野瀬川が形成した河岸段丘や、金華山(391m)、鬼ヶ岳(533m)、若須岳(564m)などの尾根筋や谷筋が形成する盆地が入り組み、丹生・南条山地間には集落や水田が立地可能な平野や平坦面を見ることができる。しかし、旧小野町集落より西方の吉野瀬川上流側には旧藤蓮華町、沓掛などの集落が立地する盆地が展開しているが、下流側の吉野瀬川兩岸は総じて幅狭く、比較的急斜面が続く箇所が多くなり、吉野瀬川が山地を抜けた後、東方に形成する扇状地上に位置する広瀬町まで集落は立地していない。このことから、調査地の立地は盆地の東端部に該当するといえる。

なお、丹生山地・南越盆地の周辺では、古来より窯業が盛んである。丹生山地の西側および散在する盆地には、花崗岩、石英粗面岩が風化、分解した粘土が産出し、これらを利用した陶器、瓦製遺業が盛んである。当地の近辺では、吉野瀬川右岸の広瀬町・池ノ上町において現在も瓦が生産されており、また、北約6～7kmの織田盆地・宮崎盆地は、中世以降現代まで越前焼の生産地として知られている。

第2節 歴史的環境(第5図)

小野遺跡と小野平等遺跡の位置する丹生山地および南条山地間は、その地形的条件のためであろうが周知の遺跡は限られる。しかし、旧武生市が位置する南越盆地は古代には越前国府や国分寺が置かれ、越前国の政治と経済の中心地であり、多くの遺跡が存在する。よって、ここでは南越盆地西部を中心に主な遺跡について述べる。

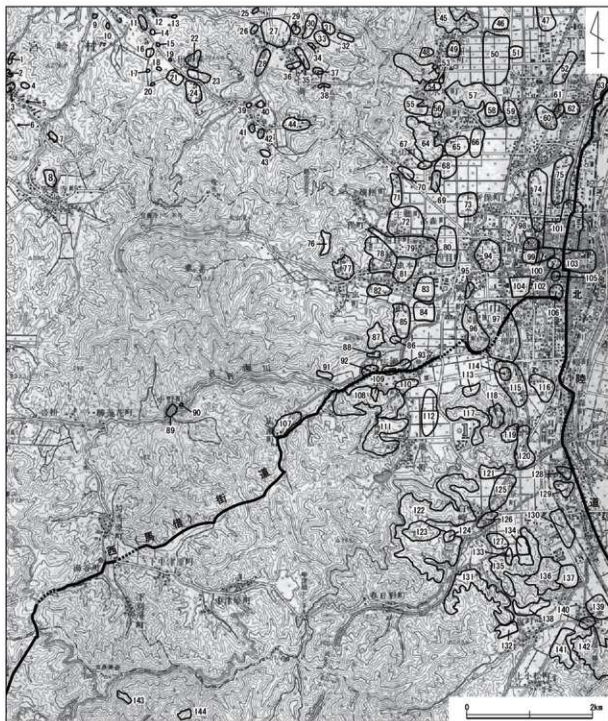
縄文時代の遺跡では、愛宕山古墳群(57)の里山1・2号墳が位置する尾根の西方において、住居跡1基の他、ビット群を確認し、早期後葉～中期中葉に属す土器と石器が出土している。日野川と吉野瀬川に挟まれた沖積地に位置する北府遺跡(75)では中期から晩期の遺構、遺物が確認された。遺構には土器棺墓3基、堅穴住居1棟などがある。丹生郷遺跡(72)では、縄文土器が出土している。

弥生時代の遺跡では、北府遺跡(75)内の北府A遺跡の調査において弥生時代後期の周溝を巡らす平地住居や掘立柱建物を確認されている。遺物には、弥生時代後期の溝から木製の盾が出土している他、口縁部が受け口状を呈する近江地方の影響を受けた土器が多いことが注目される。また、第5図の範囲外であるが、鯖江市との境に近い日野川右岸の自然堤防上に位置する瓜生助遺跡では、弥生時代中期から後期の方形周溝溝群とその集落が確認され、堅穴住居からは小銅鐸が出土している。

古墳時代では、南越盆地内に所在する独立丘陵上に古墳群が築かれるものの、発掘調査が行われたものは少ない。前期、中期については特に少なく、後期には愛宕山古墳群(57)、茶臼山古墳群(96)などがある。愛宕山古墳群は総数72基を数え、その内の里山支群の2基の方墳が発掘され、2号墳からは鉄刀、鉄鏃が出土した。6世紀初頭から中葉に位置づけられる。県指定史跡である茶臼山古墳群は、昭和25年(1950)に慶応大学によって円墳1基と14の小石室が、平成6・7年度には武生市教育委員会(現越前市教育委員会)により茶臼山古墳群馬塚支群の馬塚1～5号墳の調査が行われた。古墳と時期的、位置的に近接して須恵器窯2基、横穴墓2基の他、祭祀遺構、埋葬遺構が構築されている。なお、茶臼山1・2号窯は武生南部古窯跡群の内、調査が行われた中で最も操業が早い7世紀第1四半期に位置づけられている。その他、岡本山古墳群(95)は前期に、船山古墳群(69)、北山古墳群(64)は後期に位置づけられる。

古墳時代の集落では、愛宕山の南の水田地帯に位置する安丸官人遺跡(50)は平成21年度の発掘調査において、旧河川の流域に展開した古墳時代、古代、中世の集落の縁辺であることが確認された。古墳時代の遺構には、周囲に溝を巡らす掘立柱建物がある。

古代になると、前述したように越前国府が丹生郡の武生の地に置かれ、この地が越前の政治・経済の中心となる。古代の遺跡には、官衙・寺院・集落・窯跡がある。官衙に関する調査では、国府推定地とされる旧武生市街地中心部において、国府関連に伴う推定地域の試掘・範囲確認などが精力的に行われている。中世・近世の開発に伴う遺構が多く、国府跡を特定するまでの遺構や遺物は確認されていないが、地点を変えての数度に及ぶ調査の成果として国府遺跡(101)では石帯が、府中城跡(103)では多くの墨書土器が出土し、官人の存在が窺えるまでになった。近年では、平成19年度から越前国府関連調査が5ヵ年計画で行われ、墨書土器や緑釉陶器など国府につながる資料が蓄積されている。高森遺跡(79)は、大虫川が形成した扇状地上に立地し、南東方に越前国分寺と推定される大虫廃寺跡(83)が位置する。3次に渡る発掘調査から、多数の掘立柱建物群とそれらを囲む区画溝が確認され、丹生郡衙跡と推定されている。寺院遺跡では、いずれも白鳳期に建立された大虫廃寺、深草廃寺跡(99)の他、第5図の範囲外だが野々宮廃寺跡がある。大虫廃寺跡は、大虫扇状地の扇端に位置し、過去の土砂採取の際に礎石が1点出土した。これまで4次にわたる調査が行われた結果、塔跡と推定される基壇、瓦溜4ヵ所、掘立柱建物2棟が確認された。寺域や伽藍配置は不明であるが、奈良時代後半まで存続することから大虫廃寺転用国分寺説が有力視されている。深草廃寺跡は国府推定地の西端に位置し、昭和37年(1962)以来4次にわたる調査が行われた。7世紀第3四半期前後と越前で最も早く建立されたと推定され、大虫廃寺跡と同様に伽藍配置は不明だが、出土した瓦の供給地が王子保窯跡群(135)であることが確認された。野々宮廃寺跡は国府推定地の東約6kmの味真野扇状地の扇端に位置し、基壇の一部が確認されたものの比較的早い段階で廃れており、国分寺であった可能性は低い。その他、仏教的な要素が窺われる遺跡として、大塚向山遺跡(136)では焼土坑や掘立柱建物が確認され、「寺」と墨書された須恵器が出土し、祭祀場を含む寺と考えられている。隣接する山腰遺跡(137)は性格不明ながら、「国府」と墨書された須恵器が出土している。市域からは大きく南西に外れるが、矢立果岳中腹の平坦面に位置する南越前町マンダラ寺跡(143)は8～10世紀の須恵器の中に、浄瓶や鉄鉢形など仏具的なものを有し、2棟の掘立柱建物の配置からも山中の寺院であると考えられている。また、今回の調査地である小野遺跡の北方に聳える鬼ヶ岳山頂では須恵器片が採集されている。古代の集落遺跡には芝原遺跡(60)、平出遺跡(74)、新町遺跡(94)、高瀬二丁目遺跡(104)、徳神遺跡(116)などがある。平出遺跡は平安時代の集落で、緑釉陶器、灰釉陶器、石帯が出土している。新町遺跡では掘立柱建物、井戸、土坑などの奈良～平安時代の集落跡が確認されている。高瀬二丁目遺跡は越前国府推定地の南西に近接する平安時代の集落であり、倉庫群であったと考えられる。徳神遺跡は、日野川左岸の沖積地に位置する古代～中世の集落である。窯跡には王子保窯跡群(135)、広瀬窯跡群(108)、池ノ上窯跡群(111)などがある。これら窯跡は南越前盆地の南、南条山地の北麓に位置し、その分布範囲から武生南部窯跡群と呼称される。王子保窯跡群は、これまで7次にわたり発掘調査が行われ、7世紀中葉から8世紀前葉にかけての須恵器生産が確認された。7世紀中葉に位置づけられる6・7号窯では須恵器の他、瓦や鴟尾も生産されている。広瀬窯跡群と池ノ上窯跡群は隣接し、7世紀中葉を中心に操業される。しかし武生南部窯跡群における須恵器生産は8世紀後半には廃れた後、北方の丹生窯跡群に移り、丹生窯跡群は中世以降になると越前焼の産地として現代まで窯業が受け継がれる。その他、光明山経塚(8)は平安時代末の経塚であり、大正時代に神社背後の



第5図 周辺の遺跡分布図 (縮尺1/60,000)

光明山山頂から出土した遺物は市文化財となっている。

中世以降では、前述した市街地内の国府関連遺跡発掘調査に関連し、国府遺跡、元町遺跡(105)、府中城跡などの調査が行われ、限られた調査範囲だが集落や武家屋敷に関わる遺構や遺物が確認されており、国府が置かれて以降、中世から近現代に至るまで、一地方都市の中心地であることが明らかとなった。市街地周辺では家久遺跡(62)、徳神遺跡がある。家久遺跡は8世紀から16世紀にわたる集落であるが、平安末から鎌倉時代初頭と考えられる隅丸方形の礫郭墓1基が確認され、白磁四耳壺、鉄製太刀、烏帽子、硯箱、化粧箱等が副葬されていた。徳神遺跡では、骨片や炭化材などを伴う12～13世紀と考えられる火葬遺構が

第1表 周辺の遺跡分布一覧表 (Noは第5図に対応する)

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	神坂2号遺跡	37	赤布遺跡	73	下太田遺跡	109	広瀬狼谷遺跡
2	上長生原遺跡	38	栗野遺跡	74	甲田遺跡	110	広瀬南田遺跡
3	正堂遺跡	39	西ノ谷遺跡	75	北野遺跡	111	滝ノ上原遺跡
4	五郎田遺跡	40	岡ヶ遺跡	76	大虫塚	112	滝ノ上原町遺跡
5	日野原遺跡	41	北谷遺跡	77	大虫塚	113	内山遺跡
6	藤井1号遺跡	42	若宮遺跡	78	下四日遺跡	114	千福城
7	栗崎谷遺跡	43	八田水上遺跡	79	高森遺跡	115	千福遺跡
8	光明山経塚	44	宇石遺跡	80	上太田遺跡	116	榊野遺跡
9	向門遺跡	45	藤原古墳群	81	竹安深丸遺跡	117	末ノ山古墳群
10	菅原遺跡	46	上氏家治ノ止弘遺跡	82	川井中村遺跡	118	妙法寺城
11	標津7～8号遺跡	47	下本保遺跡	83	大虫塚寺跡	119	小泉館
12	櫻田遺跡	48	余田古墳群	84	下大虫角庄遺跡	120	妙法寺遺跡
13	標津六号遺跡	49	余田遺跡	85	片山遺跡	121	妙法寺台遺跡
14	標津9号遺跡	50	安丸官人遺跡	86	広瀬片山遺跡	122	白崎宗跡群
15	美ノ谷遺跡	51	河野館	87	鬼神山城	123	藤ヶ生遺跡
16	西広田遺跡	52	藤丸ノ原遺跡	88	菅神社遺跡	124	白崎城跡
17	新保六号遺跡	53	赤坂古墳群	89	小野遺跡	125	塚原四段田遺跡
18	藤谷遺跡	54	赤坂堂田遺跡	90	小野平等遺跡	126	塚原白崎遺跡
19	八田新保1号遺跡	55	片岡遺跡	91	広瀬川谷口野遺跡	127	上山殿遺跡
20	堀ヶ谷遺跡	56	赤坂古墳遺跡	92	宗良館	128	西館丸ノ天狗堂遺跡
21	舟輪原遺跡	57	愛宕山古墳群	93	広瀬川之下遺跡	129	西館丸石田遺跡
22	駒ノ谷遺跡	58	三日月城	94	新町遺跡	130	今宿遺跡
23	狐谷ノ原遺跡	59	狭間石田遺跡	95	岡本山古墳群	131	野中宗跡群
24	倉庫遺跡	60	芝原遺跡	96	赤白山古墳群	132	寺ノ山遺跡
25	後呂遺跡	61	芝原古墳群	97	熊子遺跡	133	八幡遺跡
26	後谷遺跡	62	家久遺跡	98	金剛院城	134	城原遺跡
27	寺遺跡	63	鳥帽子形遺跡	99	深草庵寺跡	135	王子原跡群
28	上巻老遺跡	64	北山古墳群	100	京町三丁目遺跡	136	大海内山遺跡
29	小深田遺跡	65	片岡神田遺跡	101	因幡遺跡	137	山腰遺跡
30	中ノ坪遺跡	66	幸田榎本町遺跡	102	新善光寺城	138	楓ノ谷遺跡
31	道斉遺跡	67	碓ヶ谷遺跡	103	府中城	139	陣手遺跡
32	北長遺跡	68	新岡遺跡	104	高瀬二丁目遺跡	140	国兼遺跡
33	奥山遺跡	69	船山古墳群	105	元町遺跡	141	度ヶ遺跡
34	坪ノ内遺跡	70	北山馬正免遺跡	106	竜門寺城	142	矢谷山城
35	京野遺跡	71	上平丸遺跡	107	宮ヶ神遺跡	143	マングラ寺跡
36	前瀬遺跡	72	丹生郷遺跡	108	広瀬原跡群	144	深山遺跡

9基礎確認されている。また、丹生山地間の盆地に位置する遺跡には、発掘調査ではなく工事など不時発見の遺構や遺物があり、小野遺跡から西方に約4kmの葛蒲谷町では、昭和49年(1974)の神社境内の山道工事中に鎌倉時代の五輪塔や蔵骨器を伴う中世墓が発見され、西方3kmの丸岡町では大正時代に、室町時代と考えられる五輪塔片が出土した。これら石塔類の例をはじめ、古代以降中世にかけての丹生山地や南条山地では、山岳信仰や布教活動、寺院跡の伝承などが散見される。

鎌倉末頃から旧武生市街地は府中と呼ばれ、現在の越前市役所付近がその跡地とされる府中城は、城域や規模などの詳細は不明だが、朝倉氏が設置した奉行所が前身である。外堀、内堀の他、館や天守台をもつ平城であったらしく、府中館ともいべきものであった。織田信長が一揆を討伐した後の天正年間には、府中三人衆の一人である前田利家が府中に入り、城域を拡大する。関ヶ原の戦い後、慶長六年(1601)には本多富正が府中城主となり、水路や街区など城下の整備や産業を奨励し、その後の城下町の基盤作りを行い、中でも鎌や庖丁などの鍛冶生産は現在でも越前打刃物として続く伝統産業となっている。以後、明治維新に至るまで本多家九代が福井藩付家老として府中を治めることとなる。

北陸道を擁し、古代には国府が置かれた府中は、商工業の発展に伴い、中世以降も物資の流通におい



第6図 現在の題目岩

て越前の要であった。府中を通り畿内へ向かう道には、険しい南条山地を越える北陸道の他、府中から西に向かい、広瀬、湯谷、中山を通り、日本海側の甲斐城浦や今泉浦から船運で敦賀へと向かう道があり、後者は「西街道(馬借街道)」と呼ばれ、中世には朝倉氏が領国支配のために整備した街道の一つで、近世においても重要な流通路であった。

なお、調査地である旧小野町に残る「小野」という地名の由来については、遣隋使小野妹子の一族の小野姫が当地に移り住み、永住したので「小野」となったということである。また、小野平等遺跡の位置する吉野瀬川左岸の地は、通称「大竹藪」と呼ばれ、小野姫等の墓所であると言伝えられる。他に、「足羽社記」には、「閼婁所生、小野稚郎女の御名代なるか(越前国名蹟考)と記述がある。その他、集落から約300m下流の旧県道沿いの岩肌には、日蓮上人の孫弟子の日像上人が刻書したとされる法華経が刻まれた「題目岩」(第6図)があり、当時の布教活動の一端が窺える。

注

題目岩は、ダム建設事業に伴い平成22年(2010)7月2日に岩肌から切り出され、現在は越前市武生柳町所在の長栄山本行寺に移設されている。「武生市史 概説編」には文龜三年(1503)の紀年名がある、と記載されるが、風化のため肉眼では判読し難い。尚、本行寺住職の石本忠隆氏には題目岩に関し、数々のご教示を頂いた。記して感謝したい。

参考文献

- 武生市史編纂委員会 1976 『武生市史 概説編』
 白山村誌編纂委員会 1978 『白山村誌』
 福井県企画開発部地域振興課 1982 『土地分類基本調査 鯖江・梅雨』
 福井県武生市教育委員会 1984 『高森遺跡発掘調査概報Ⅰ』 武生市埋蔵文化財調査報告Ⅰ
 福井県武生市教育委員会 1986 『愛宕山遺跡群Ⅰ』 武生市埋蔵文化財調査報告Ⅲ
 福井県武生市教育委員会 1986 『王子保窟跡群』 武生市埋蔵文化財調査報告Ⅳ
 福井県武生市教育委員会 1989 『大虫塚寺・野々宮塚寺』 武生市埋蔵文化財調査報告Ⅹ
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1994 『年報8』
 福井県武生市教育委員会 1996 『深草塚寺』 武生市埋蔵文化財調査報告19
 福井県武生市教育委員会 2000 『国府A遺跡 国府B遺跡 元町遺跡 府中城跡D・E地点』 武生市埋蔵文化財調査報告20
 福井県武生市教育委員会 2001 『茶臼山古墳群』 武生市埋蔵文化財調査報告21
 福井県武生市教育委員会 2004 『徳神遺跡』 武生市埋蔵文化財調査報告23
 福井県武生市教育委員会 2005 『北府A遺跡』 武生市埋蔵文化財調査報告24
 福井県越前市教育委員会 2006 『高瀬二丁目遺跡』 越前市埋蔵文化財調査報告01
 福井県教育委員会 2006 『馬借街道・海の道』 歴史の道調査報告書 第6集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『大塩向山遺跡・山腰遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第96集

第3章 小野遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

1 調査区の地形と層序(第7・8図)

小野遺跡は周囲を山地に囲まれており、調査区の標高は約93～97mを測る。調査区内で最も標高が高い地点は調査区西部の、南方から吉野瀬川沿いに張り出す尾根筋の辺りである。吉野瀬川は北側の山際に沿って屈曲して流れるが、その流れを南東方向に変えた調査区北東方辺りが最も標高が低くなる。

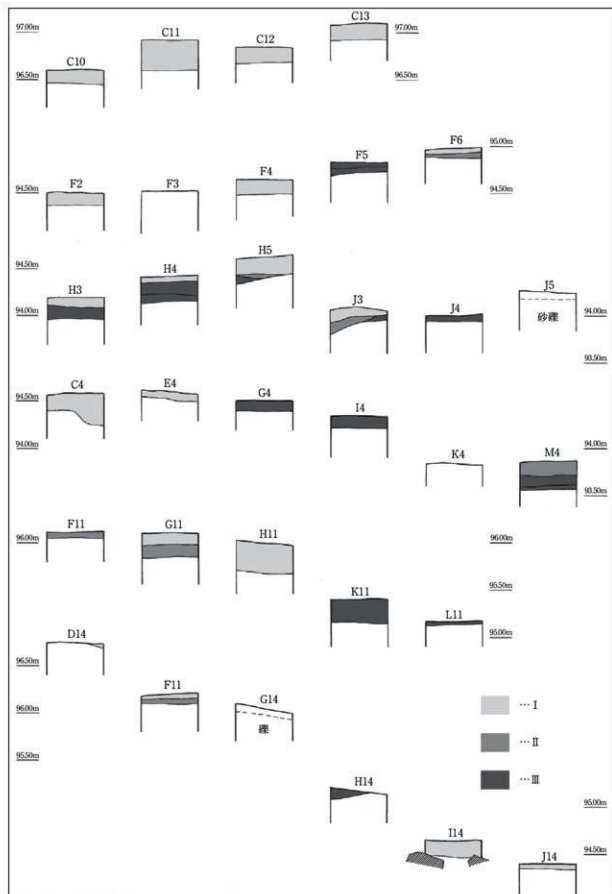
吉野瀬川が形成した河岸段丘は、旧県道から北側の調査区では4～6区にかけて段状の地形が遺存し、集落移転前は宅地に利用されていた。その北側にあたるJ～M4区以北の遺構が確認できない部分では、東方に谷状に落ち込んでゆく地形を確認した。旧県道から南側では後世の削平が著しく、当時の地形は想定する他ないのだが、南方の谷筋を山際に沿って流れる小野川にかけて低くなっていたようである。小野遺跡の地形は、大きく見れば旧県道を境に南北に緩やかに傾斜する馬の背状の地形であり、小野平等遺跡の位置する段丘も含め、比較的急峻な斜面に囲まれた小盆地にあたる。

第1章で述べたように、調査区は小野町集落の跡地であり、調査前は更地となっていた。近現代以降の土地開発、家屋の基礎跡などや移転に伴う建物の撤去などの造成により、大きく削平と攪乱が広がる部分が所々に分布し、良好に包含層が残存する箇所は限られた。遺構についても、掘削したところ近代以降の構築と判断できるものもあり、包含層および遺構や遺物の残存は良好とは言えない。調査区の土層は大きく4層に分けられる。第Ⅰ層は表土剥ぎ時に取り切れなかった近現代の造成土、攪乱土層に該当するが多様な時期の遺物が多く含まれるため、遺構外出土遺物として抽出し、掲載している。第Ⅱ層は中近世の包含層である。この層は近世における造成土も含まれるが、造成土は第Ⅰ層との判別がつきにくい層もあった。第Ⅲ層は律令時代の包含層である。黒褐色粘質土であり、特にK～M3・4区にかけての段丘下段の落ち込んだ箇所には良好に残存しているが、遺物の出土は少ない。第Ⅳ層は遺構確認面である。黄褐色砂質土または粘質土である。削平のため、さらに下層の砂礫層が現れる箇所もある。

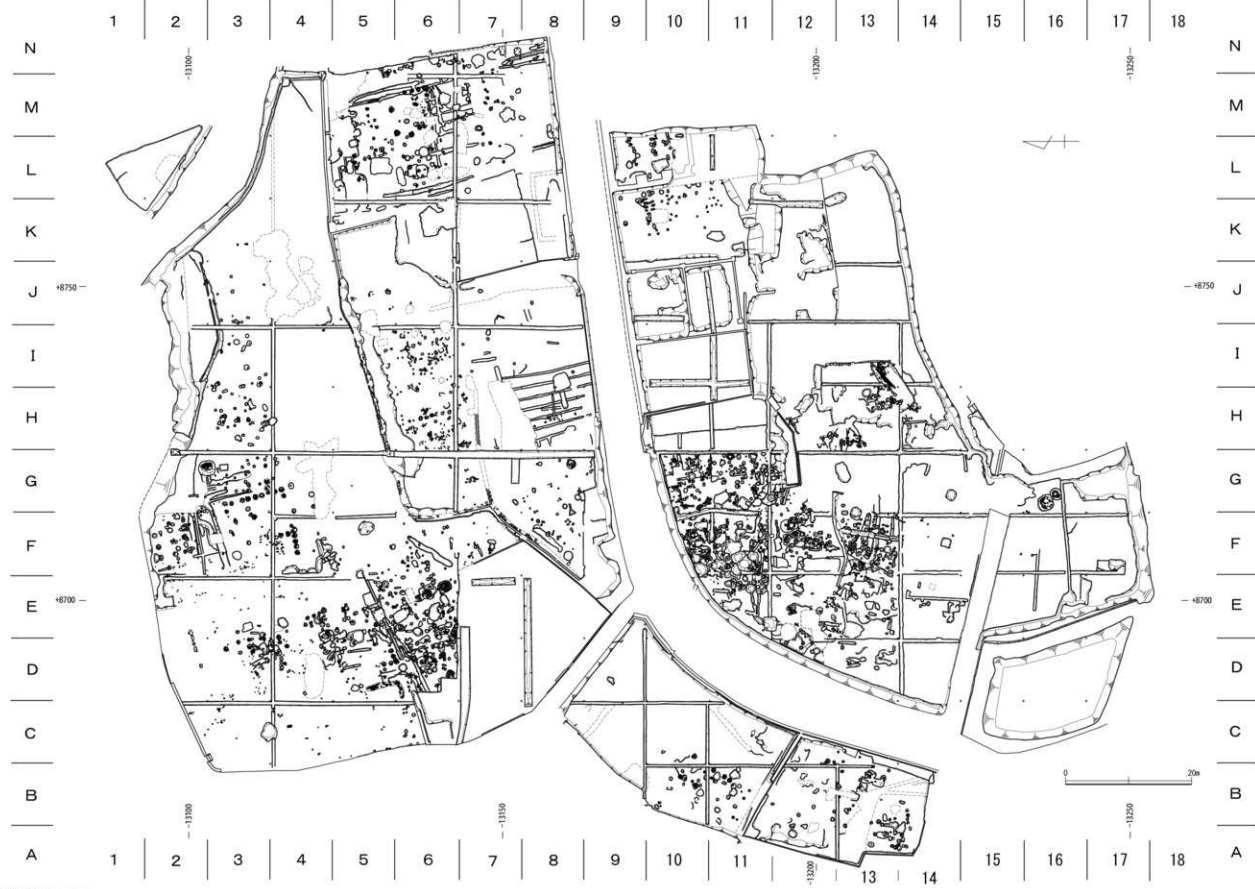
2 遺構と遺物の分布

調査において検出した遺構は、掘立柱建物・溝・土坑・井戸・柱穴・小穴の他、不明遺構がある。主にD・E5～7区、F・G2・3区と10～13区では土坑、柱穴を中心とした遺構が集中しており、建物の構成を窺うことができる。F・G10・11区は調査区内においても比較的高所にあたり、本来ならば、この周囲にはさらに遺構が広く分布していたと考えられる。時期別では、ほとんどの遺構が中世と近世に属し、中世の遺構の分布は近世とはほぼ重なっていると考えられるが、個々に判別し特定するのは困難である。古代の遺構は限られ、Ⅲ層が覆土となる遺構も小穴程度であった。やはり後世の削平の影響が大きいと考える。

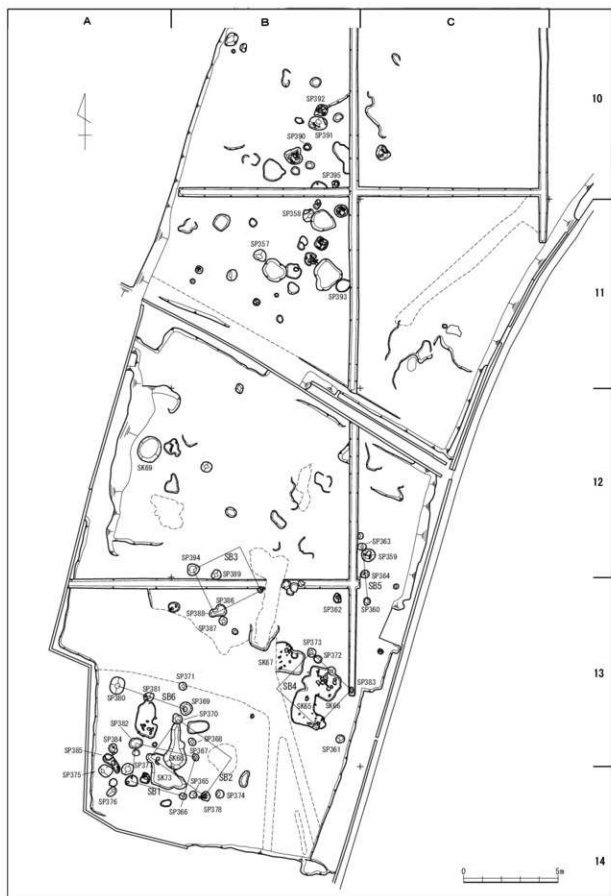
遺物には近世の土器、陶磁器を主体に、木製品、石製品、金属製品、土製品、銭貨などがあり、他の時期の遺物には中世の土器、陶磁器、古代の須恵器の他、僅かに縄文土器の小片がある。土坑、溝からは量の多少はあるものの遺物が出土するが、柱穴、小穴からの出土遺物は極めて限定的である。遺構出土以外の遺物出土状況は遺構の分布状況と同様の傾向を呈す。また古代の土器は、段丘下のE～M4～6区にかけてと、間に攪乱を挟みF・G10～12区とK9・10区に分布域が分かれるが、後世の遺構に混入したものが多量にある。



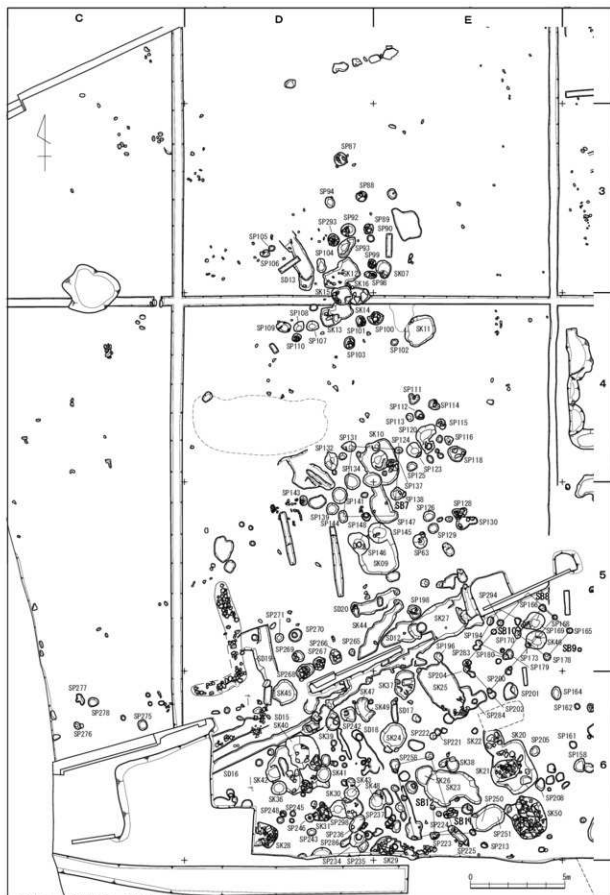
第7図 土層模式図



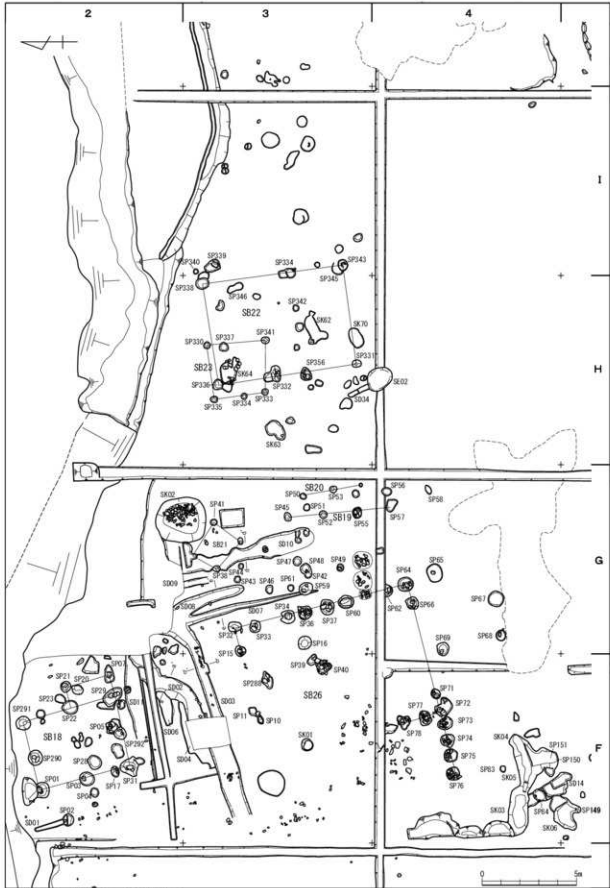
第8図 遺構全体図 (縮尺1/600)



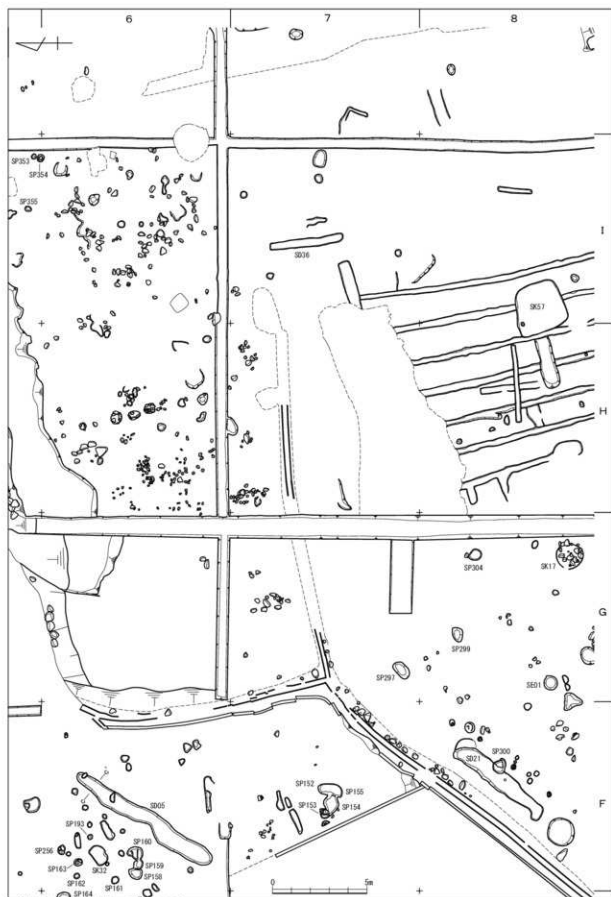
第9図 遺構図1 (縮尺1/200)



第10図 遺構図2 (縮尺1/200)



第11図 遺構図3 (縮尺1/200)

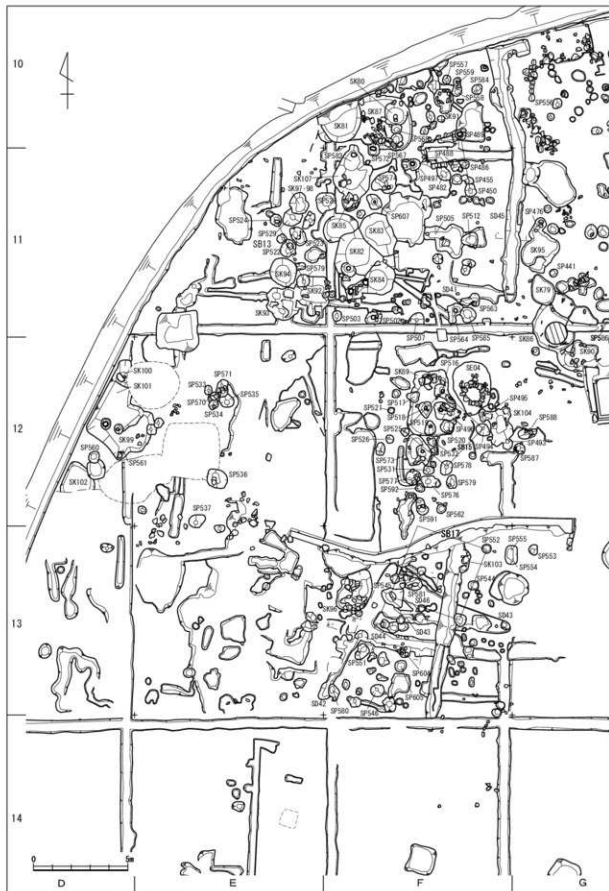


第12図 遺構図4 (縮尺1/200)

第1節 遺跡の概要



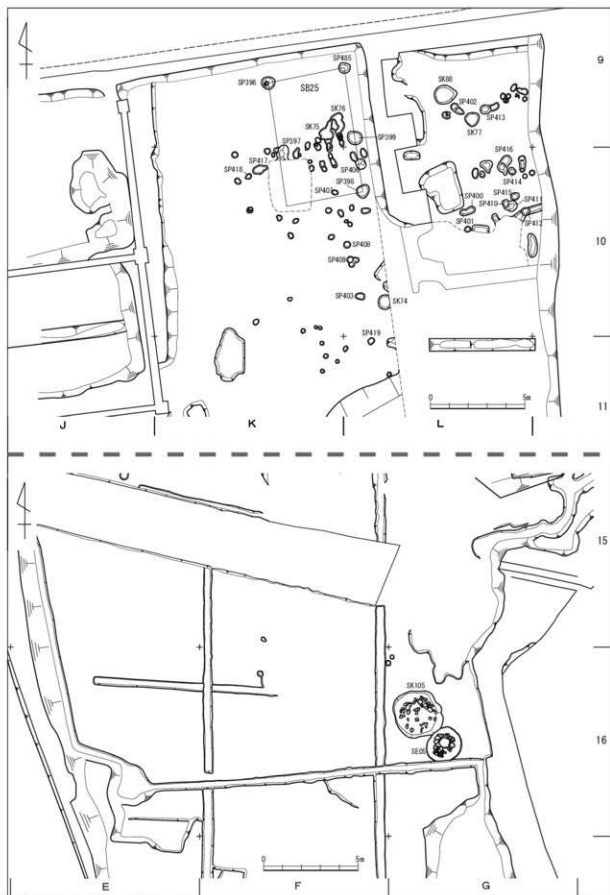
第13図 遺構図5 (縮尺1/200)



第14図 遺構図6 (縮尺1/200)



第15図 遺構図7 (縮尺1/200)



第16図 遺構図8 (縮尺1/200)

第2節 遺構

建物、土坑、溝、不明遺構を取り上げる。建物を構成する柱穴以外の柱穴、小穴については図示したものもあるが特に言及はしない。

1 建物

柱穴が規則的に並ぶものを建物と判断したが、調査の段階では個々の建物としての認識には至らず、整理作業段階において図面上で確認したものがほとんどで、番号も整理に合わせて改めて付した。今回、復元し得たものには、礎石建物と掘立柱建物がある。礎石建物としたものは、削平のため礎石は無いものの、柱穴内に根石が残存している柱穴で構成される。しかし、礎石建物については調査段階で時期判断に迷い、積極的に近世遺構として認識していなかった。そのため、覆土や遺物から近代以降であることが確実なものは除外し、他の遺構と関連付けられるものみに番号を付している。掘立柱建物には、良好に柱根が残存しているものもある。また、多くの柱穴を確認したものの、復元し得なかった建物も多数存在すると考える。

なお、各建物の長軸方向を桁行、短軸方向を梁行とし、測量図上で各柱穴列の両端の柱穴の中心を結んだ距離を桁行・梁行の寸法とした。桁行方向は、座標北から東西に振れる角度を計測した。

SB01(第17図) A・B13・14区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。桁行324cm、梁行200cm、方位はN77°Wを測る。柱穴の平面形は不整楕円形を呈し、西側が径65～70cm、深さ8～14cm、東側が径40～45cm、深さ20cm前後を測る。柱穴から遺物は出土していない。

SB02(第17図) A・B13・14区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。攪乱のため、東側の柱穴は検出に至っていないが、桁行350cm、梁行254cm、方位はN55°Wを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径45～57cm、深さ12～40cmを測る。柱穴から遺物は出土していない。

SB03(第17図) B12・13区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。攪乱のため、北側の柱穴は検出に至っていない。桁行278cm、梁行261cm、方位はN64°Eを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈し、径40～70cm、深さ15～24cmを測る。柱穴SP394から越前焼小片が出土している。

SB04(第17図) B13区に位置する2間×1間の掘立柱建物である。攪乱と土坑で切られ、検出に至っていない柱穴がある。桁行291cm、梁行266cm、方位はN46°Wを測る。桁行の柱間寸法は145cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径32～50cm、深さ18～35cmを測る。遺物は出土していない。

SB05(第17図) A・B13区に位置する掘立柱建物である。2間の柱穴列のみを確認し、対応する柱穴列は検出に至っていないが、北側に展開すると考える。柱穴列を桁側とすると、桁行382cm、方位はN19°Wを測る。柱間寸法は180cmと200cmを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈し、径56～91cm、深さ26～51cmを測る。東端の柱穴には礎石と考える径20cmの石がある。遺物は出土していない。

SB06(第17図) C12・13区に位置する掘立柱建物である。2間の柱穴列のみを確認し、対応する柱穴列は検出に至っていないが、東側に展開すると考える。柱穴列を桁側とすると、桁行288cm、方位はN5°Wを測る。柱間寸法は142cmと147cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径40～47cm、深さ21～27cmである。南端の柱穴SP360から近世に属す瀬戸・美濃焼や唐津焼、越前焼片が出土しているが、図示は出来なかった。

SB07(第18図) D・E4・5区に位置する1間×2間の掘立柱建物である。桁行373cm、梁行256cm、方位はN7°Eを測る。梁行の柱間寸法は124～150cmを測る。柱穴の平面形は円形および隅丸方形を呈し、径42～77cm、深さ11～54cmを測る。柱穴SP148から近世と考える越前焼の挿片が出土しているが、

図示は出来なかった。

SB08(第18図) E5区に位置する3間×1間の掘立柱建物である。北側の柱穴は検出に至っていないが、桁行520cm、梁行190cm、方位はN40°Eを測る。桁行の柱間寸法は108~207cmを測り、柱穴間でばらつきがある。柱穴の平面形は円形および隅丸方形を呈し、径28~44cm、深さ10~37cmを測る。柱穴SP168から土師質皿片が、SP173・200から越前焼片が出土し、いずれも中世に属すと考えるが、図示はできなかった。

SB09(第18図) E5区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。桁行205cm、梁行195cm、方位はN51°Wを測る。柱穴の平面形は不整形円形を呈し、径34~45cm、深さ8~34cmを測る。遺物は出土していない。

SB10(第18図) E5区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。北側の柱穴は検出に至っていないが、桁行210cm、梁行160cm、方位はN31°Eを測る。柱穴の平面形は円形および楕円形を呈し、径28~38cm、深さ14~34cmを測る。遺物は出土していない。SB08・09・10は柱穴規模や位置関係から時期的に近いと考える。

SB11(第18図) E6区に位置する掘立柱建物である。1間×1間分を確認しているが、南側へ続くと可能性がある。桁方向を南北と想定すると、桁行150cm以上、梁行160cm、方位はN4°Wを測る。柱穴の平面形は円形および不整形円形を呈し、径29~49cm、深さ15~29cmを測る。柱穴SP216から型成形の土師質皿片が出土している。

SB12(第19図) E6区に位置する2間×1間の掘立柱建物である。東辺の中間の柱穴はSK231に切られたと判断する。桁行405cm、梁行205cm、方位はN15°Wを測る。桁行の柱間寸法は182cmと220cmを測り、北側と南側で一定しない。柱穴の平面形は不整形円形を呈し、径32~73cmと幅があり、深さ13~35cmを測る。柱穴SP224から近世と考える越前焼の播鉢片が出土しているが、図示はできなかった。

SB13(第19図) F11区に位置する2間の柱穴列である。対応する柱穴は東に展開する可能性がある。長さは355cm、方位はN26°Wを測る。柱間寸法は145cmと200cmを測る。柱穴の平面形は不整形円形を呈し、径67~94cm、深さ34~45cmを測る。柱穴底には礎石を有するものがある。SP522からは近世、SP579からは中世と考えられる越前焼片が出土しているが、図示はできなかった。

SB14(第19図) F11区に位置する2間の柱穴列である。対応する柱穴は西に展開する可能性がある。長さは304cm、方位はN10°Wを測る。柱間寸法は144cmと160cmを測る。柱穴の平面形は円形および不整形円形を呈し、径58~65cm、深さ22~42cmを測る。SP489には柱根が残存し、型成形の土師質皿片が出土している。

SB15(第19図) F12区に位置する2間×1間の掘立柱建物である。東辺の中間の柱穴を欠く。桁行296cm、梁行294cm、方位はN43°Eを測る。桁行の柱間寸法は128cmと170cmを測る。柱穴の平面形は不整形円形を呈し、径45~80cm、深さ25~56cmと幅がある。柱根が残存する柱穴がある。SP494から中世の越前焼(307)の他、伊万里焼、瀬戸・美濃焼などが出土しており、近世に位置づけられる。

SB16(第19図) G11区に位置する掘立柱建物である。東側は掘乱のため検出に至らず、2間×1間分を確認した。南北方向を桁行とすると、桁行400cm、梁行300cm、方位はN18°Wを測る。桁行の柱間寸法は200cmを測る。柱穴の平面形は不整形楕円形を呈し、径55~90cm、深さ14~46cmを測る。SP462には柱根が残存している。遺物は出土していない。

SB17(第20図) F13区に位置する2間×1間の掘立柱建物である。北端の柱穴は検出に至っていない

いが、桁行405cm、梁行394cm、方位はN21°Wを測る。柱間寸法は、190～200cmを測る。柱穴の平面形は円形および不整形円形を呈し、径50～130cmと幅があり、深さ30～59cmを測る。南辺の梁行の中間には支柱の可能性のある小穴がある。SP545には壁に接して根固めの石が据えられており、型成形の土師質皿片が出土している。

SB18(第20図) F 2区に位置する2間×2間の掘立柱建物である。東側に庇を有す。桁行514cm、梁行390cm、方位はN17°Wを測る。柱間寸法は、桁行230～260cm、梁行175～200cmを測る。庇は東に111cm張り出し、1間分を確認した。柱穴の平面形は円形および不整形円形を呈し、径80～115cm、深さ45～67cmを測る。柱穴には礎石および根固めの石を有すものがある。柱穴SP03から肥前陶器、底部分のSP7から型成形の土師質片、SP21から越前焼片が出土している。

SB19(第20図) G 3区に位置する3間の柱穴列である。対応する柱穴列は検出に至らなかった。柱穴列を桁側とすると、桁行550cm、方位はN4°Wを測る。柱間寸法は174～193cmを測る。柱穴の平面形は円形および不整形円形を呈し、径42～69cm、深さ5～43cmと幅がある。SP55のみ深く、埋土に礫を有す。SP52から手づくねの土師質皿片が出土している。SD07・10や、礎石建物と並行する位置関係にあり、塀となる可能性もある。

SB20(第20図) G 3区に位置する2間の柱穴列である。対応する柱穴列は検出に至らなかった。柱穴列を桁側とすると、桁行315cm、方位はN11°Wを測る。柱間寸法は150cmと163cmを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径21～40cm、深さ13～33cmを測る。遺物は出土していない。

SB21(第21図) G 3区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。北側の柱穴は検出に至っていない。桁行189cm、梁行177cm、方位はN49°Wを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径37～42cm、深さ22～35cmを測る。遺物は出土していない。

SB22(第21図) H 3区に位置する3間×1間の掘立柱建物である。東辺の桁側は2間となる。桁行752cm、梁行542cm、方位はN8°Wを測る。桁行の柱間寸法は、西辺では160～310cmを測り、中間が狭く、東辺では280cmと470cmを測る。柱穴の平面形は不整形円形および楕円形のものが多く、径49～86cm、深さ16～90cmと幅がある。柱穴SP332・343には柱根が残存する。SP343の柱根は原位置を保っているが、SP332の柱根は倒れた状態であった。柱穴356から中世に属す越前焼の挿片が出土している。井戸SE02が南西に近接し、建物に付属すると考える。

SB23(第21図) H 3区に位置する1間×1間の掘立柱建物である。桁行314cm、梁行290cm、方位はN5°Wを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、径35～43cm、深さ28～38cmを測る。遺物は出土していない。

SB24(第22図) G 11区に位置する3間×1間の掘立柱建物である。桁行678cm、梁行234cm、方位はN88°Wを測る。桁行の柱間寸法は、北辺が200～244cm、南辺が170～277cmを測り、一定しない。柱穴の平面形は円形および不整形円形を呈し、径46～78cmを測るが、SP514の長軸は140cmとなる。深さは28～58cmを測る。SP461・514から中世の越前焼、土師質皿が、SP444から近世の唐津焼、越前焼(312)が出土している。

SB25(第22図) K 9・10区に位置する2間×1間の掘立柱建物である。南西隅の柱穴は攪乱により欠いている。桁行660cm、梁行409cm、方位はN8°Wを測る。桁行の柱間寸法は、377cmと283cmを測り、一定しない。柱穴の平面形は不整形円形および楕円形を呈し、径60～81cm、深さ32～79cmを測る。土層観察からは柱抜き取り痕を確認でき、一部横倒して残存するものもある。柱穴SP397から律令期の土師質甕小片が、SP485から中世の青磁片が出土しており、この建物の時期は中世の可能性が高い。

SB26(第11図) F・G 3・4区に位置する礎石建物である。全ての柱穴が残存していないため、推定であるが、桁行940cm、梁行700cm、方位はN15°Wを測る。西南角から西方に柱穴列が張り出し、別棟が付属すると考えられる。SD02・03・07・08と平行関係にあり、関連性が窺われる。時期は18世紀後半から19世紀前半と考える。

SB27(第11図) L・M 5・6区に位置する礎石建物である。全ての柱穴が残存していないため、推定であるが、桁行1270cm、梁行980cm、方位はN78°Eを測る。北西部に400cm×360cmの別棟が付属すると考えられる。SD23・SK54を切るが、SD22・32・33と平行関係にあり、関連性が窺われる。時期は18世紀前半から19世紀前半と考える。

2 土坑

SK02(第23図) G 2・3区に位置する。長径278cm、短径270cm、確認面からの深さは40cmを測る。平面形は不整形を呈す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる皿状を呈す。底面の東側を中心に、10～30cm大の礫が多く出土しており、投棄された様相を呈す。遺物には中世の可能性のある越前焼の甕底部(1)と体部小片が出土したのみであった。

SK03(第23図) F 4区に位置する。SK05と接する。長軸260cm、短軸105cm、確認面からの深さは70cmを測る。平面形は楕円形を呈す。平坦な底面から直立気味に立ち上がる。遺物には伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、石製品があり、18世紀後葉～19世紀中葉に位置づけられる(4～16・第46図17)。

SK05(第23図) F 4区に位置する。当初はSK04と切り合うとしたが、一体の土坑の可能性はある。推定長軸230cm以上、短軸150cm、確認面からの深さは55cmを測る。平面形は南側が膨らむ不整形楕円形を呈す。断面形は、下部は箱状で上部は浅皿状を呈す。底面近くから伊万里焼の筒碗(2)が出土した。他に、瀬戸・美濃焼、越前焼、土鈴など、17世紀後葉～18世紀後葉のものが出土している。

SK06(第23図) F 4・5区に位置する。SD14・SP149と切り合う。長軸207cm以上、短軸105cm、確認面からの深さは25cmを測る。平面形は不整形楕円形を呈す。断面形は、逆台形状を呈す。遺物には越前焼、土師質皿などがあり、18～19世紀中葉に位置づけられるが、図示できるものはない。

SK09(第24図) D・E 5区に位置する。SP145・146に切られる。長軸240cm以上、短軸208cm、確認面からの深さは25cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。覆土には炭化物ブロックを全体に少量含み、遺物は出土していない。

SK10(第24図) E 4区に位置する。SP136・137と切り合う。長軸243cm、短軸180cm、確認面からの深さは30cmを測る。平面形は不整形を、断面形は浅皿状を呈す。中央部と南西部にも柱穴と切り合っていることを確認した。遺物には越前焼片があり、中世に位置づけられるが、図示は出来なかった。

SK11(第23図) E 4区に位置する。長軸171cm、短軸142cm、確認面からの深さは28cmを測る。北西部は乱れで削られる。平面形は不整形を呈す。覆土の観察から、2つの遺構の切り合いの可能性があり。遺物には中世から近世の越前焼が混在する。

SK12(第23図) D 3区に位置する。長軸201cm、短軸95cm、確認面からの深さは23cmを測る。平面形は不整形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物は中世の越前焼の搦鉢や甕の体部片などが出土しているが、図示できるものは無かった。

SK15(第24図) D 3・4区に位置する。SK12と切り合い、SK16を切る。長軸105cm、短軸94cm以上、確認面からの深さは28cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。西側に10～25cm大の石が集中する。遺物には瀬戸・美濃焼の碗、皿の他、越前焼があり(23～27)、16世紀中葉から17世紀初頭

に位置づけられる。他に銭貨がある。

SK16(第24図) D3・4区に位置する。SK15に切られる。推定長軸135cm、短軸90cm、確認面からの深さは21cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は浅皿状を呈す。礎石の可能性のある上面が平坦な石が出土する。遺物は出土していない。

SK20(第24図) E6区に位置する。SK22を切り、SK21に切られる。長軸265cm、推定短軸180cm、確認面からの深さは28cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。覆土中に15~60cm大の石を含む。遺物は出土していない。

SK21(第24図) E6区に位置する。SK20を切っている。長軸153cm、短軸105cm、確認面からの深さは75cmを測る。平面形は楕円形を、断面形は下層が箱型を、上層は浅皿状を呈す。上層は一度掘り返した可能性が考えられる。底面には集石があり、近世の土師質皿が出土した。他に、伊万里焼や瀬戸・美濃焼、越前焼など中世~近世の遺物が混在し(28~30)、須恵器も混入していた。

SK23(第25図) E6区に位置する。SK26を切る。長軸300cm、短軸167cm、確認面からの深さは39cmを測る。平面形は不整楕円形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物には越前焼、土師質皿(第33図31~33)があり、17世紀代を中心とする。

SK24(第25図) E6区に位置する。SP281を切る。長軸143cm、短軸125cm、確認面からの深さは34cmを測る。平面形は円形を、断面形はU字状を呈する。遺物には越前焼の搦鉢、土師質皿があり、中世から近世に位置づけられるが、図示は出来なかった。

SK25(第25図) E6区に位置する。大小のピットと切り合う。長軸330cm、短軸170cm、確認面からの深さは20cmを測る。平面形は方形を、断面形は浅皿状を呈す。南側には20~30cm大の礫が集中する。遺物には伊万里焼、唐津焼、越前焼や土師質皿(34)など中世から近世のものが混在している。

SK26(第25図) E6区に位置する。SK23に切られる。推定長軸100cm、確認面からの深さは18cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。覆土は焼土ブロック、炭化物を含んだ土を埋め戻した様相を呈す。遺物は出土していない。

SK27(第25図) E5区に位置する。SD12・16を切る。長軸は200cm程度、短軸は100cm程度、確認面からの深さは33cmを測る。平面形は楕円形を、断面形は逆台形状を呈す。上面から上層にかけて、炭化物、焼土を含み、土師質皿が多く出土した。他に、伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、砥石など16世紀後半~19世紀初頭にかけての遺物が混在して出土している(35~55・第47図8)。

SK36(第26図) D6区に位置する。SK42を切る。長径78cm、短径70cm、確認面からの深さ50cmを測る。平面形は円形で、断面形はU字状を呈す。遺物は出土していない。

SK40(第26図) D6区に位置する。SK42を切り、SP305と切り合う。長軸177cm、短軸162cm、確認面からの深さは55cmを測る。平面形は不整形を、断面形は逆台形を呈す。底面近くには礫が含まれた。遺物には瀬戸・美濃焼の碗、および土師質皿(60・61)があり、16世紀代に位置づけられる。

SK41(第26図) D6区に位置する。SK42を切る。長径81cm、短径74cm、確認面からの深さは57cmを測る。平面形は円形で、断面形はU字状を呈す。遺物には中世の土師質皿(62・63)がある。

SK42(第26図) D6区に位置する。SK36・40・41・SP263に切られる。一辺260cm、確認面からの深さは36cmを測る。平面形は方形を、底面は段を有し、西側が低くなる。遺物には越前焼の搦鉢(64)、および土師質皿があり、16世紀後葉から17世紀初頭に位置づけられる。

SK52(第26図) M7区に位置する。長軸64cm、短軸54cm、確認面からの深さは13cmを測る。平面形

は不整形を、断面形は逆台形状を呈す。曲物の底板と考えられる板材(第48図19)とタガの一部が残存していた。上部は取り去られたと考えられる。近世の曲物埋設遺構と考えられ、土水設備の可能性があり。他に遺物は出土していない。

SK54(第26図) L6区に位置する。SK59・SP322を切る。長軸205cm、短軸186cm、確認面からの深さは14cmを測る。平面形は方形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物には赤瓦片があるが、図示は出来なかった。近世の遺構と判断できる。

SK57(第26図) H・I8区に位置する。長軸274cm、短軸263cm、確認面からの深さは14cmを測る。平面形は方形を、断面形は浅皿状を呈す。壁の立ち上り近くの覆土には、他所より炭化物を多く含んでいる。遺物は出土していない。

SK59(第26図) L6区に位置する。SK54・SP313に切られる。長軸235cm、短軸180cm以上、確認面からの深さは12cmを測る。平面形は不整形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物は出土していない。

SK60(第26図) L7区に位置する。径90cm、確認面からの深さは36cmを測る。平面形は円形を、断面形は箱状を呈す。遺物には近世と考えられる越前焼、土師質皿があるが、図示は出来なかった。

SK65(第26図) B13区に位置する。SK66と接し、SP383を切る。長軸188cm、短軸120cm、確認面からの深さは13cmを測る。平面形は南東部が突出する方形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物には中世の越前焼、土師質皿があるが、図示は出来なかった。

SK66(第26図) B13区に位置する。長軸192cm、短軸160cm以上、確認面からの深さは15cmを測る。平面形は不整形を、断面形は浅皿状を呈す。覆土には礫を多く含む。遺物は出土していない。

SK67(第27図) B13区に位置する。西側を攪乱で切られている。長軸158cm、短軸150cm以上、確認面からの深さは20cmを測る。平面形は不整形を、断面形は浅皿状を呈す。覆土には礫を多く含む。遺物は出土していない。

SK78(第27図) H13区に位置する。SX01を切る。長軸154cm、短軸120cm、確認面からの深さは65cmを測る。平面形は楕円形を、断面形は逆台形を呈す。壁際の覆土には木質を含む粘質土が堆積し、その内側はレンズ状に堆積することから、本来は何らかの構造物を設置しており、廃棄に際し抜き去ったと考えられる。主として下層には粗い砂質土が堆積し、上層には粘質土が堆積する。遺物には17世紀後葉～18世紀中葉の瀬戸・美濃焼の碗(73)、中世の越前焼(74)、土師質皿(72)の他、漆椀、箸、板材などがある(第48図1・8～13・20)。

SK79(第28図) G11区に位置する。SK86に切られる。長軸174cm、短軸122cm、確認面からの深さは48cmを測る。平面形は楕円形を、断面形は上層が浅皿状を、下層が箱状を呈す。覆土の中間には木質を多く含む薄い層があり、上層は小礫を多く含む、埋め戻しと考えられる。遺物には瀬戸・美濃焼、伊万里焼、唐津焼、越前焼(75・76)、土師質皿の他、漆椀とその蓋(第48図5・7)があり、18世紀から19世紀中葉を中心とするが、図示出来るものは少なかった。76は15世紀代の甕で、混入である。

SK80(第27図) F10区に位置する。SK87を切り、SP568と接する。長軸118cm、短軸110cm以上、確認面からの深さは64cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は逆台形を呈す。掘削の結果、径19cmの柱根が残存する柱穴であることが判明した。遺物には越前焼(78)、瀬戸・美濃焼(77)などがあり、17世紀前葉から中葉に位置づけられる。

SK81(第27図) F10区に位置する。SK87を切り、西側の一部を攪乱で切られる。長軸250cm以上、短軸200cm、確認面からの深さは90cm以上を測る。平面形は楕円形を、断面形は箱型を呈し、上部は浅

皿状となる。板材、棒材などの廃材や石を多く含み、掘削当初の用途から、最終的に廃棄土坑となったと考えられる。遺物も多く、伊万里焼、唐津焼、越前焼、瀬戸・美濃焼、京・信楽焼、土師質皿など(79～86)の他に鎌、和鉄(第49図2・3)があり、16世紀後半から19世紀半ばのものが混在している。

SK82(第28図) F11区に位置する。SK83・84を切り、北西部は攪乱で切られる。長軸260cm以上、短軸250cm以上、確認面からの深さは92cmを測る。平面は推定隅丸方形を、断面は逆台形を呈す。覆土はブロック土が主体となり、埋め戻された様相を呈す。遺物には17世紀前半から18世紀中葉にかけての唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼(90～98)の他、板材(第48図15・16)がある。中世の染付(94)が混入する。

SK83(第28図) F11区に位置する。SK82に切られ、北東部を攪乱で切られる。径240cm、深さ105cmを測る。平面形は推定円形を、断面形は逆台形状を呈す。覆土はブロック土が主体となり、埋め戻された様相を呈す。遺物には17世紀前半から19世紀中葉の越前焼、土師質皿(87)の他、廃材、砥石(第47図3)があるが、図示出来るものは少ない。

SK84(第28図) F11区に位置する。SK82に切られる。西側で柱根が残存していた。長軸は176cm、短軸150cm以上、確認面からの深さは59cmを測る。平面形は円形を、断面形は逆台形状を呈す。遺物には17世紀初頭の越前焼(89)、土師質皿(88)、行火、支脚状製品がある(第44図7・第46図19)。

SK85(第27図) F11区に位置する。SK107と切り合う。長軸120cm程度、短軸92cm、確認面からの深さは35cmを測る。平面は推定楕円形を、断面形はU字状を呈す。上層は炭化物・焼土を多く含み、ブロック土を主体とするため、埋め戻されたと考える。遺物には被熱した磁器片があるが、図示は出来なかった。

SK87(第27図) F10区に位置する。SK80・81に切られる。おそらくSP567・568を切る。長軸350cm以上、短軸285cm、確認面からの深さは33cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。底面近くから、石臼、礫、棒材が列状に廃棄されており、それらを覆うように黄褐色土で埋め戻され、上層には焼土、炭化物を含む層が堆積していた。遺物には土師質皿、中世の染付(99)の他、石臼(第45図2・10)、搦き臼と考えられる石製品(第46図15)がある。時期は不明である。

SK88(第27図) L9区に位置する。長軸121cm、短軸98cm、確認面からの深さは90cmを測る。平面形は楕円形を、断面形は箱状を呈す。覆土はブロック土を主体とし、人為的に埋め戻された様相を呈す。遺物には、中世と考えられる越前焼があるが、図示は出来なかった。

SK92(第28図) E11区に位置する。長軸183cm、短軸150cm、確認面からの深さは25cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物には唐津焼(101)、瀬戸・美濃焼、越前焼、土師質皿があり、17世紀前半を中心とする。

SK93(第28図) E11区に位置する。長軸178cm、短軸165cm、確認面からの深さは30cmを測る。平面形は円形を、断面形は浅皿状を呈す。遺物には伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、土師質皿があり、18世紀から19世紀前半を中心とするが、図示は出来なかった。

SK95(第29図) G11区に位置する。SP476と切り合う。長軸200cm、短軸163cm、確認面からの深さは58cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形の上層は浅皿状を、下層は逆台形状を呈す。遺物には伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、土師質皿など、18世紀後半から19世紀前半を中心とするものがあるが、図示は出来なかった。

SK96(第29図) F13区に位置する。長軸250cm、短軸169cm、確認面からの深さは26cmを測る。平面形は不整楕円形を、断面形は浅皿状を呈す。20cm大の石を含む。遺物には伊万里焼、京・信楽焼、越前焼、土師質皿などがあり、18世紀代から19世紀半ばまでのものを中心とする(103～107)。

SK104(第29図) F12区に位置する。SP493・495と切り合う。長軸177cm、短軸105cm、確認面からの深さは40cmを測る。平面形は不整形三角形を、断面形は半円形を呈す。覆土には20cm大の石や、越前焼の堝・鉢が含まれ、廃棄土坑の可能性がある。遺物には幕末前後と考えられる越前焼がある(111~116)。

SK105(第29図) G16区に位置する。SE05と接する。長軸278cm、短軸258cm、確認面からの深さは40cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形は箱状を呈す。底面には10~25cm大の石が投棄されている。遺物には伊万里焼、唐津焼、越前焼、土師質皿など、17世紀前半から18世紀中葉のものがある。

SK106(第29図) G10区に位置する。長軸115cm、短軸104cm、確認面からの深さは60cmを測る。平面形は不整形方形を、断面形はU字状を呈す。覆土下層には植物遺体、木質を含む。遺物には、瀬戸・美濃焼(120)、越前焼(117~119)、土師質皿(121)、行火(第44図13)、曲物(第48図17)など、15世紀代から18世紀中葉のものが混在するが、15世紀代の遺物が主体をなす。

SK107(第27図) F11区に位置する。SK85に切られ、SP582とは不明である。長軸200cm、短軸190cm以上、確認面からの深さは73cmを測る。平面形は隅丸方形を、断面形はU字状を呈す。上層には炭化物・焼土を含む層があり、埋め戻されている。遺物には越前焼の播鉢(122・123)、瀬戸・美濃焼の皿(124)など16世紀末葉から17世紀前半のものと、18世紀代の伊万里焼が混在し、他に下駄(第48図24)がある。

3 溝

SD02(第30図) F2・3区に位置する。東西は攪乱で切られるが、西側はSD03と接すると思われる。SD06に切られ、SD04との前後関係は不明である。幅83~103cm、深さは16~23cmを測り、断面形は不整形なU字状を呈す。覆土上層には炭化物、焼土を含み、火災等の後、埋め戻された可能性がある。遺物には土師質皿、肥前陶磁器、越前焼など、18世紀中葉から19世紀中葉のものがある(125~139)。

SD03(第30図) F3~G2・3区にかけて位置する。SD07・08との前後関係は不明である。幅53~91cm、深さは10~18cmを測り、断面形はU字状を呈す。区画溝の可能性が有る。土師質皿が多く出土している。その他の遺物には、肥前陶磁器、越前焼、京焼、瀬戸・美濃焼など18世紀中葉から19世紀中葉のものがある(140~150)。また、壁土と考えられるものもある(151)。

SD05(第30図) F6区に位置する。幅70~116cm、深さ9~15cmを測り、断面形は浅皿状を呈す。幅は一定しないが直線的に延びる。遺物には、土師質皿片の他、中世の瀬戸・美濃焼の碗(154)がある。

SD07(第30図) G3区に位置する。幅は北側で43cmを測り、深さは8~16cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。直線的に延びて、南にいくにつれて細くなる。建物と並行し、一連のものとする。遺物は出土していない。

SD08(第30図) G3区に位置する。幅83cm、深さは8~12cmを測り、断面形は浅皿状を呈す。直線的に延び、覆土上層には炭化物、焼土を含む。遺物には土師質皿、伊万里焼、越前焼など18世紀後半から19世紀半ばのものがある(157~159)。他に土製品(160)、石製品(第44図2・10・第46図18)がある。

SD10(第30図) G3区に位置する。南側は削平される。幅59~118cm、深さは4~12cmを測り、断面形は浅皿状を呈す。幅は一定しないが直線的に延びる。遺物には土師質皿(162)、伊万里焼、越前焼の他、産地不明のもの(161)など、18世紀後半から19世紀中葉のものがある。

SD15(第30図) D6区に位置する。整地層から掘り込まれたと考えられる。最終的に地山面までの掘り下げを行った。北側は、近現代の掘削により削られている。溝構築時の幅は79cm、深さ33cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。遺物は覆土上層から多く出土し、土師質皿、伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼など17世紀代から19世紀半ばに亘るものがある(163~187)。

SD16(第30図) D6～E5区に位置する。整地層から掘り込まれたと考えられる。最終的に地山面までの掘り下げを行った。溝構築時の幅は93cm、深さ34cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。残存幅は一定せず、北東～南西方向に延びる。この溝を境に南北に遺構が展開することから、区画溝の可能性がある。遺物には瀬戸・美濃焼、越前焼、土師質皿など、17世紀代から18世紀後葉に亘るものがある(221～227)。

SD22(第30図) M5・6区に位置する。幅41～66cm、深さは9～14cmを測り、断面は逆台形状を呈す。直線的に延び、SD23と並行し、北側で接する。SD22・23は西側の建物に関連し、SD32・33に対応すると考えられる。遺物は出土していない。

SD23(第30図) M5・6区に位置する。幅25～72cm、深さは6～17cmを測り、断面はU字状を呈す。幅は一定しないが直線的に延びる。柱穴に切られており、時期差を伴うものの西側の建物と関連すると考えられる。遺物には伊万里焼、越前焼、土師質皿(229)など18世紀～19世紀初頭のものがあるが図示出来るものは少ない。

SD38(第30図) H12・13区に位置する。SD39と一部並行して東西に延びるが、東側で一条の溝となる。東西は次第に立ち上がりが不明瞭となる。幅185cm、深さ15cmを測り、断面は逆台形状を呈す。覆土に大小の石を多く含む。遺物には伊万里焼、唐津焼、越前焼、土師質皿(233～235)の他、金属製品(第49図6)など18世紀後半から19世紀のものがある。

SD39(第30図) H12・13区に位置する。SD39は幅95cm、深さ20cmを測り、断面形は浅皿状を呈す。遺物には伊万里焼、唐津焼、越前焼、土師質皿などがあるが、中世に属す越前焼の破片が多く、近世の遺物と混在している。図示出来るものはなかった。

SD40(第30図) H13～I14区にかけて位置する。北東～南西方向に延びる自然流路と考えられ、東西は攪乱で切られている。幅254～338cm、深さ30～38cmを測る。覆土は細砂や粗砂を主体とし、北東方向に流れていたと考える。北側には径3～9cmの丸太材が散在しており、何らかの施設であった可能性がある。遺物には伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、土師質皿など(188～218)や、渡来銭(第50図)、煙管の吸口(第49図5)があり、15世紀から18世紀後半に亘る遺物が混在している。

SD42(第30図) F13区に位置する。北北東～南南西に延びる。幅40～70cm、深さ9～17cmを測る。断面形は浅皿状を呈す。この溝の東側は西側より遺構が多く、区画溝の可能性ある。遺物には18世紀後半から19世紀前半の土師質皿(242～261)が集中して出土した他に、伊万里焼、越前焼がある。

SD43(第30図) F13区に位置する。近接して東西方向に走り、西側はSD42と直行するように位置し、東側は削平されたと考える。幅51～65cm、深さは18cmを測り、断面は逆台形状を呈す。SD46を切る。遺物には伊万里焼、越前焼、土師質皿(236～241)など18世紀代のものがある。

SD44(第30図) F13区に位置する。SD44は幅59～90cm、深さは18cmを測り、断面形はU字状を呈す。遺物には伊万里焼(264)、越前焼、土師質皿(262・263)など近世のものがある。

SD45(第30図) F10～F・G11区にかけて位置する。ほぼ南北方向に延び、北側で東に折れるが、攪乱と調査区端のため不明である。幅72～98cm、深さは27～30cmを測り、やや北側が低くなる。断面形は逆台形状を呈す。この溝より西側は東側より遺構が多く、区画溝の可能性ある。遺物には伊万里焼、越前焼(271)、土師質皿(265～270)などがあり、中世と近世の遺物が混在している。

SD46(第30図) F13区に位置する。SD46は幅130cm程度、深さは22cmを測り、断面形は浅皿状を呈す。遺物には土師質皿があるが、図示は出来なかった。

4 井戸

当遺跡は近年まで集落が営まれていたため、井戸の中には井戸側上部に近代以降と考える素材が使用されているものもあった。このような井戸の構築時期は不明であるが、近代以降まで使用されたと判断し、除外している。

SE01(第31図) G 8区に位置する。平面形は直径74cmを測る円形を呈する。確認面からの深さは96cmを測る。筒状の掘方から、素掘りの井戸と判断した。覆土は大きく砂質土と粘質土に分けられ、人為的に埋め戻した様子は窺えない。遺物には加工板材(第48図21~23)がある。時期は不明である。

SE02(第31図) H 3・4区に位置する。長径145cm、短径113cmの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは130cmを測る。土層観察から、本来は内部に井戸側として何らかの構築物が存在したと考える。砂質土層を掘り抜いているためか、調査期間中に崩壊したため、平面図は推定を含む。遺物には越前焼甕、土師質皿(272)など16世紀後半を中心とするものがあるが、図示出来るものは少ない。

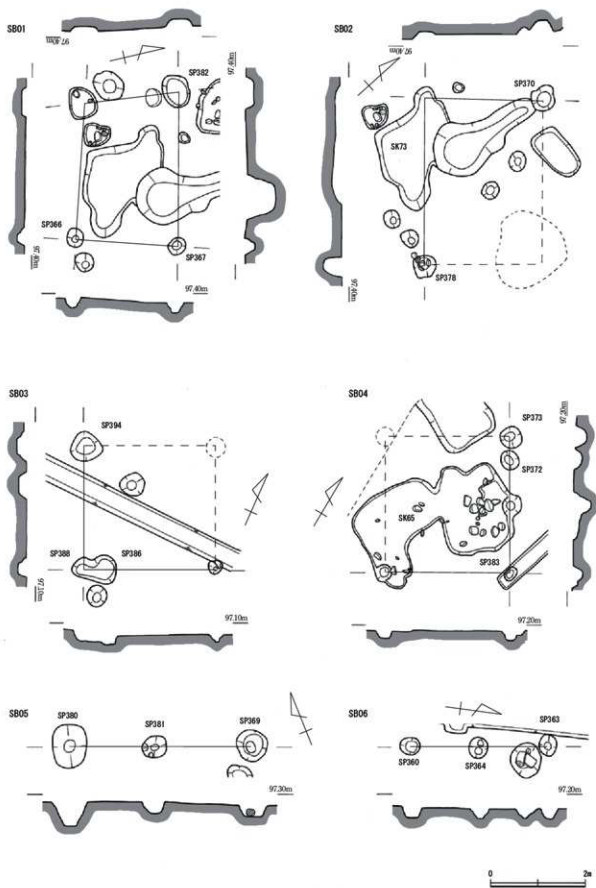
SE03(第31図) G 11区に位置する石積み井戸である。井戸上面東側の石は失われているが、石積みの内径が55cmを測る円形を呈す。確認面からの深さは70cmを測り、底面には3~5cmの小礫が敷かれており、湧水がみられた。石積みは、10~25cm大の石を使用して5~6段に積上げており、下部には長辺が25cm程度の長方形の石を長軸方向に立てて設置している箇所がある。掘方は径115cmを測る不整円形を呈す。掘方の埋土には小円礫を多く含む。遺物には石積み内から磁器片、越前焼など17世紀から18世紀のものがあるが、図示出来るものはない。

SE04(第31図) F 12区に位置する石積み井戸である。石積みの内径が長径80cm、短径70cmを測る楕円形を呈す。確認面からの深さは165cmを測り、底面は粘質土層に達し、湧水がみられた。石積みは25~35cm大の石を使用して13~14段に積上げており、やや雑な印象を受ける。石積みの下には基礎構造として、径12cmの丸太材が井桁状に組まれる。掘方は平面形が長径280cm、短径190cmの不整楕円形を呈す。石積み内の遺物には越前焼(277・282・283)、土師質皿(279・280)、石臼(第46図7)、庖丁(第49図1)があり、掘方の遺物には瀬戸・美濃焼の碗(273)、越前焼(274~276・281)、土師質皿(278)がある。出土遺物から、SE04は17世紀前半以降に構築され、19世紀中葉まで使用されたと考える。

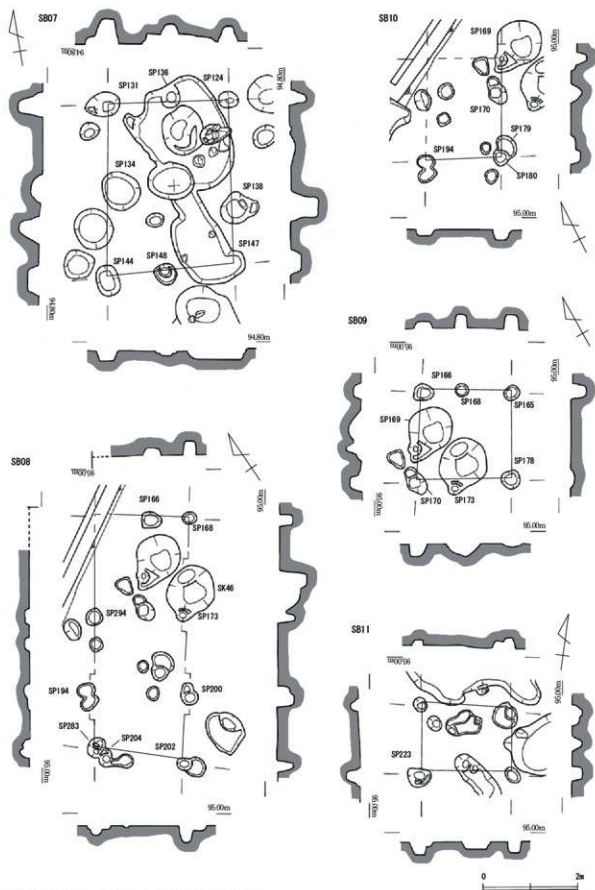
SE05(第31図) G 16区に位置する石積みと桶を組み合わせた井戸である。井戸上面南側の石は失われているが、石積みの内径は50cmを測る円形を呈す。確認面から下部の桶底面までの深さは118cmを測る。上部の石積み部分は25cm大の石を使用し4~5段に積上げる。下部の桶部分は幅10cm、長さ55cm程度の板材を径45cmの円形に組んだもので、竹製のタガで結われている。底板は5cm程度上げ底となる。石積み部分と桶部分の間に、幅8cmの樋が設けられており、東側から導水していたと考えられ、SE05は桶部に水を溜める汲上井戸と言える。石積み内の遺物には伊万里焼(286)、京・信楽焼(287)があり、掘方の遺物には瀬戸・美濃焼(284)と越前焼(285)がある。出土遺物から、SE05は18世紀初頭以降に構築され、19世紀前半まで使用されたと考える。

5 不明遺構

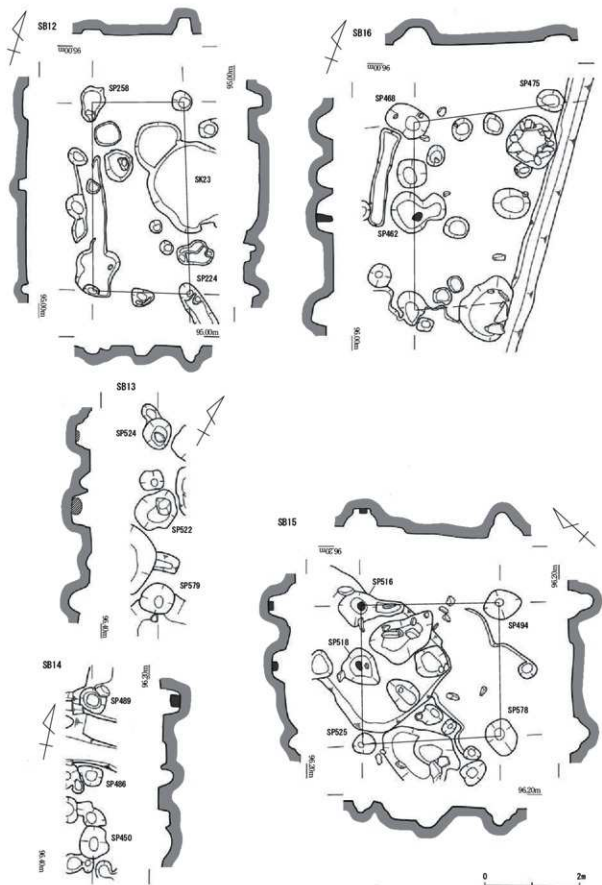
SX01(第14図) H 13区に位置する。SK78・SD40に切られる。不整形を呈する段状の落ち込みである。遺物には越前焼(292~294)、手づくねの土師質皿(288~291)など13世紀代のものがある。



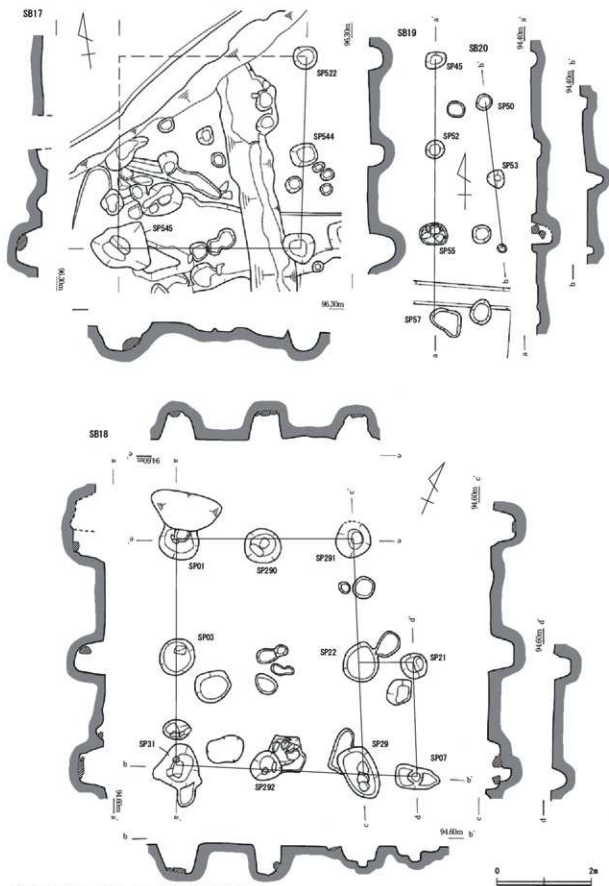
第17図 建物 (SB01~06) 実測図 (縮尺1/80)



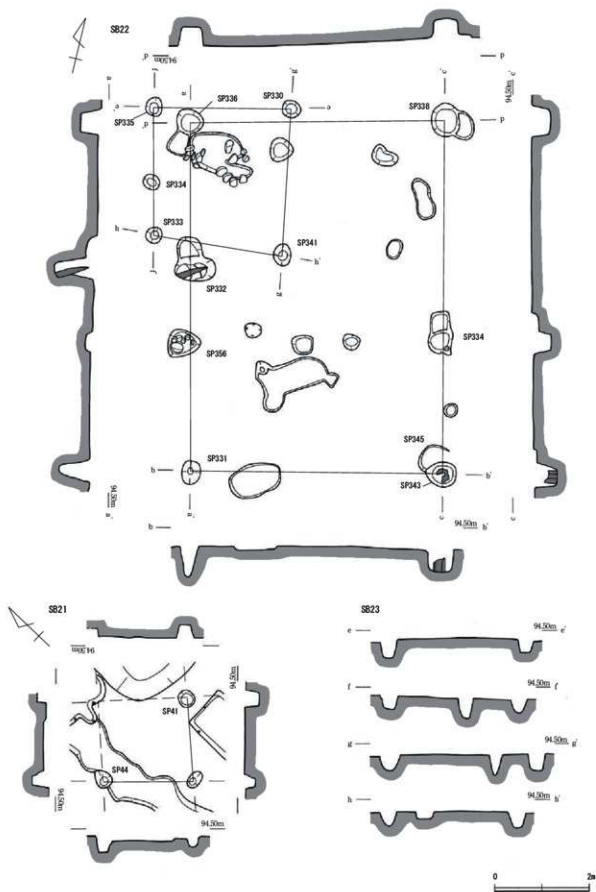
第18図 建物(SB07~11)実測図(縮尺1/80)



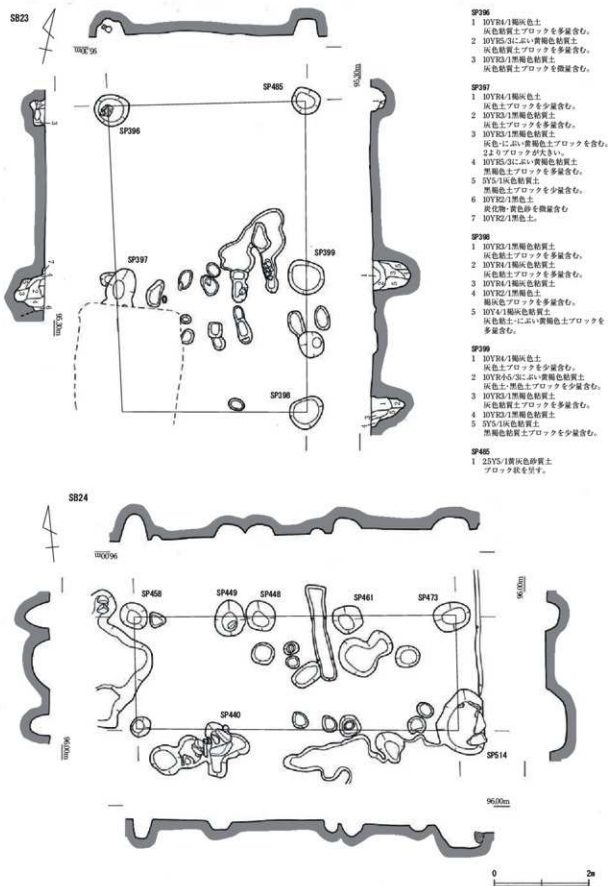
第19図 建物 (SB12~16) 実測図 (縮尺1/80)



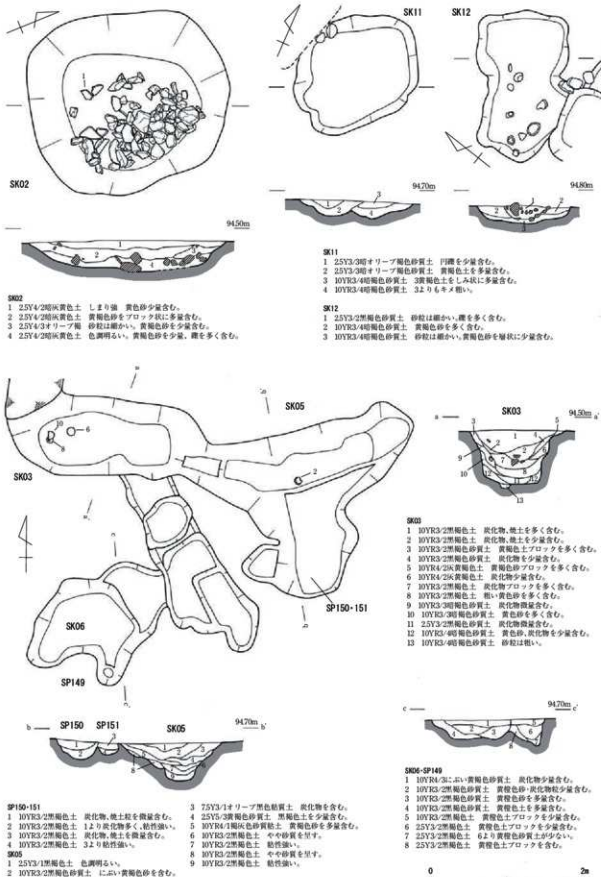
第20図 建物(SB17~20)実測図(縮尺1/80)



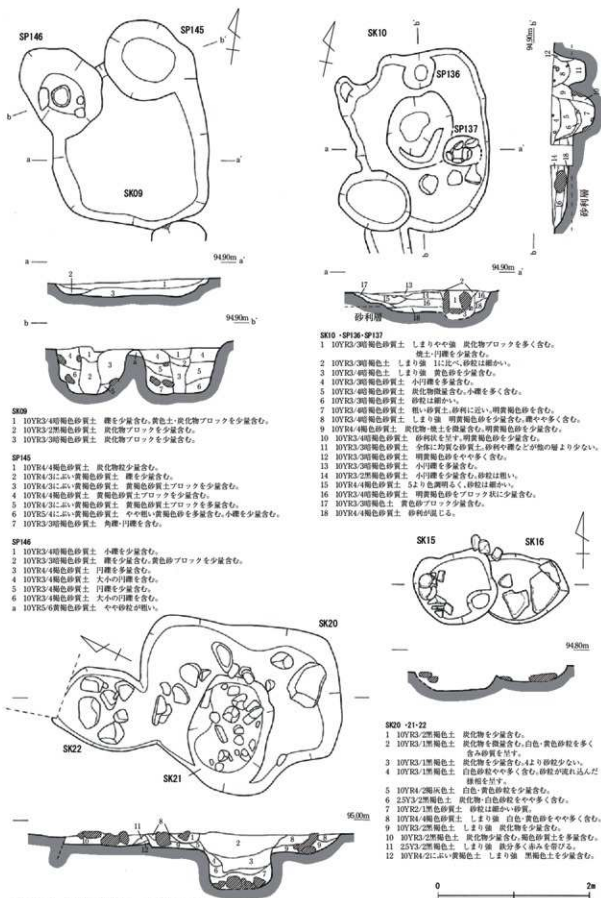
第21図 建物 (SB21~23) 実測図 (縮尺1/80)



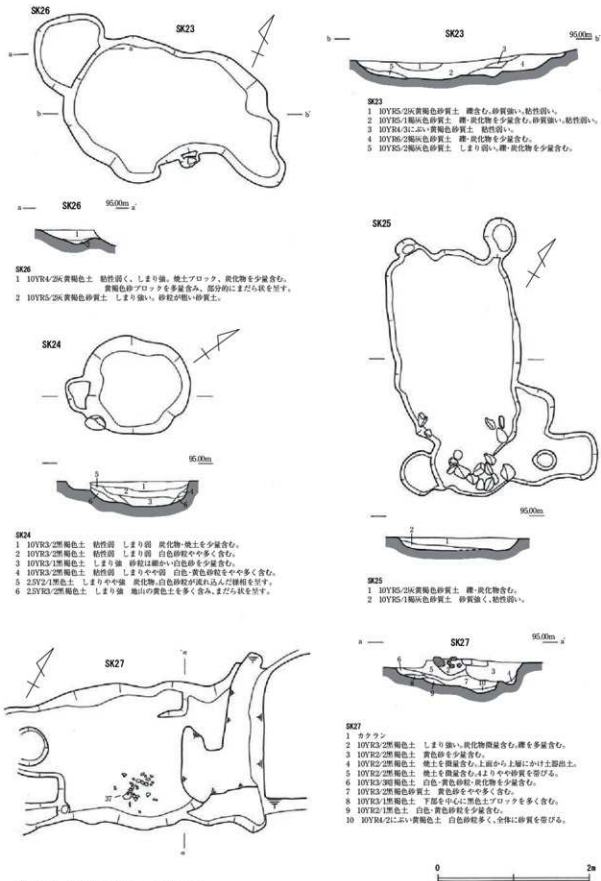
第22図 建物 (SB23-24) 実測図 (縮尺1/80)



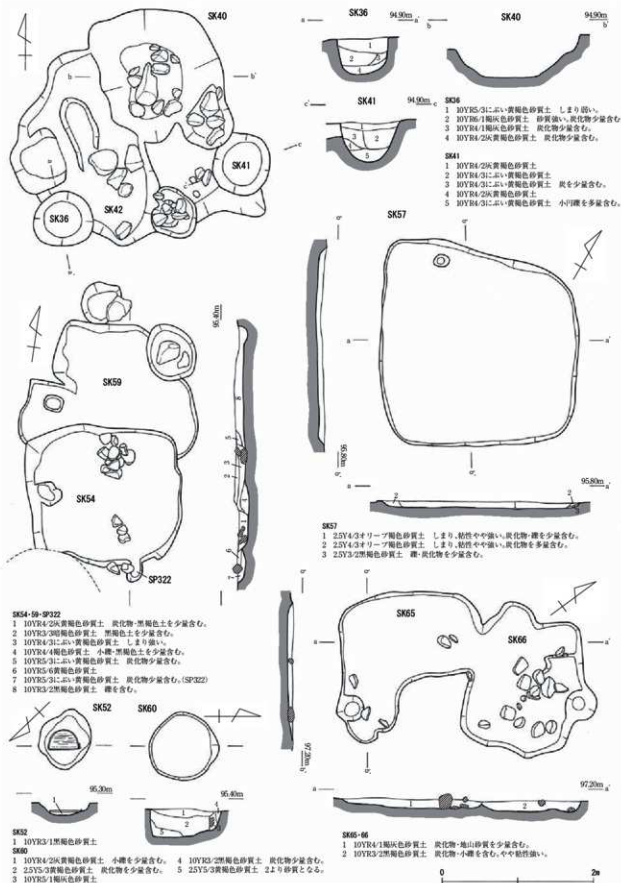
第23図 土坑実測図1 (縮尺1/50)



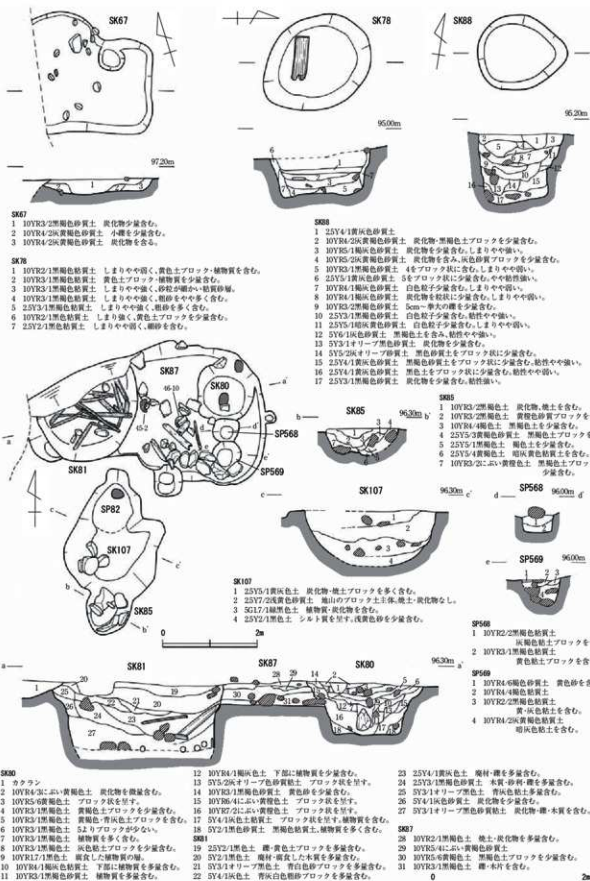
第24図 土坑実測図2 (縮尺1/50)



第25図 土坑実測図3 (縮尺1/50)

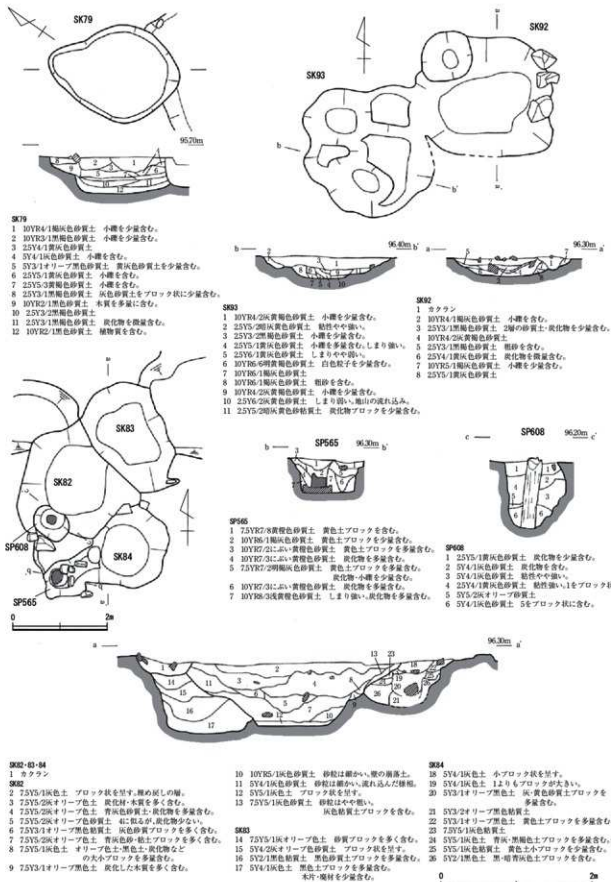


第26図 土坑実測図4 (縮尺1/50)

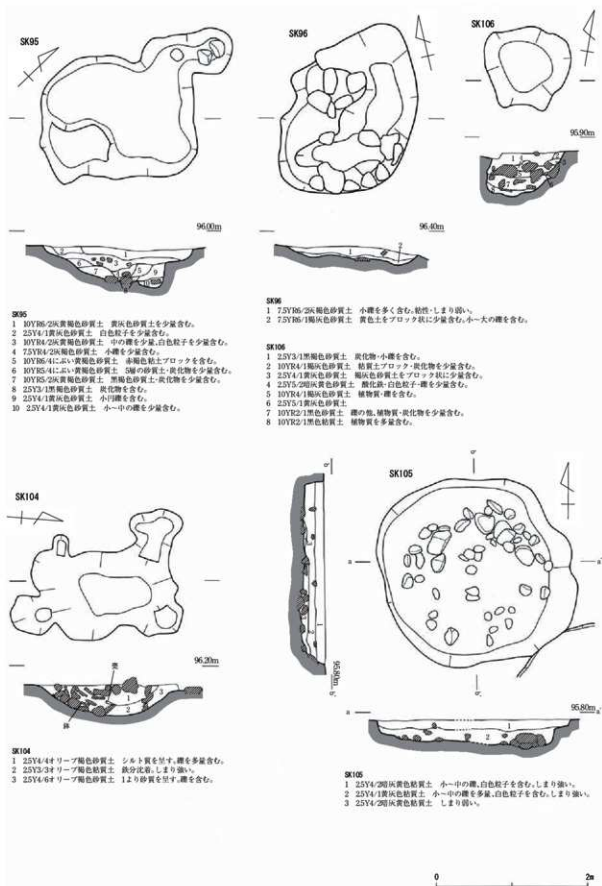


第27図 土坑実測図5 (縮尺1/50・1/80)

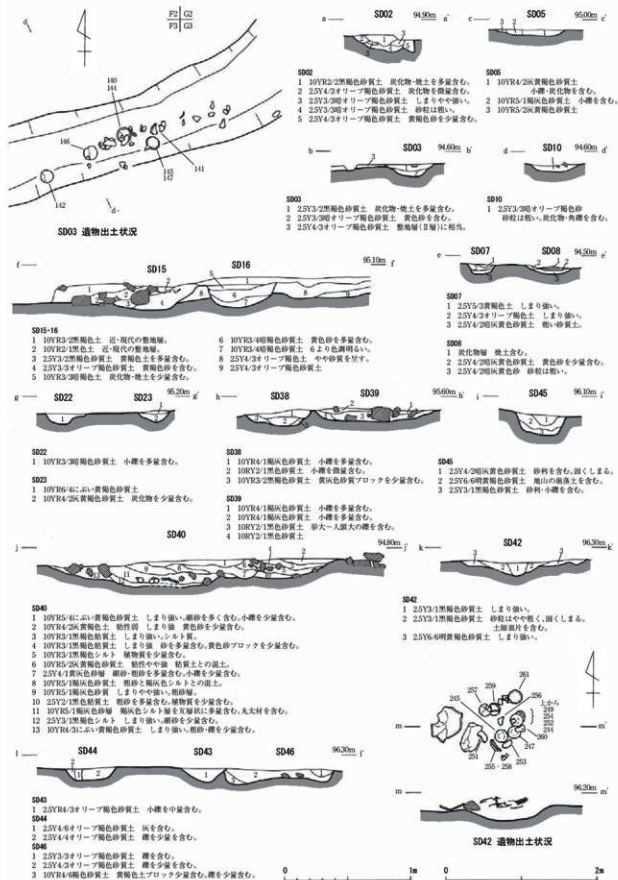
第3章 小野遺跡の調査



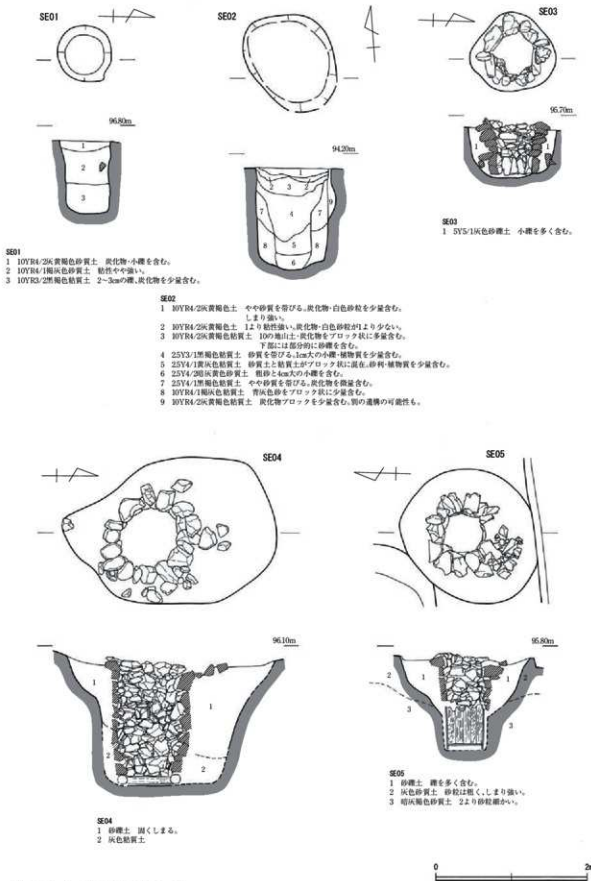
第28図 土坑実測図6 (縮尺1/50・1/80)



第29図 土坑実測図7 (縮尺1/50)



第30図 溝実測図 (縮尺1/30・1/50)



第31図 井戸実測図 (縮尺1/50)

第3節 遺物

出土遺物には、陶磁器、土師質皿、石製品、漆器、木製品、銭貨、金属製品、須恵器、縄文土器がある。遺物の主体となる時期は中世以降である。以下、遺物については種別や産地ごとに記述を行うが、遺物図版では陶磁器、土師質土器は遺構出土遺物と遺構外出土遺物に分けて掲載している。それ以外の石製品から縄文土器については種別ごとに掲載している。

1 中近世の陶磁器・土師質皿(第32～43図、図版第7～10、表2)

(1) 伊万里焼(肥前磁器)⁽¹⁾

伊万里焼は、日常雑器として生産された碗、皿類が中心である。碗では、11・12・133は外面に青磁釉、内面に透明釉が施される筒型を呈し、湯飲み碗として使用されたものである。134は外面に菊花を施す同型のものである。2・335は陶器の胎土であるが、磁器に特有の染付を施した陶胎染付である。皿は、口径が12～13cm前後の中皿が中心となる。これら碗や皿類にはコンニャク印判を用いた五弁花文など、18世紀を特徴づけるものが存在する。その他、瓶類(132・159・358～360)、紅皿(79・354)、水注(363)、灰吹き(355)などがある。これらは概ね大橋Ⅲ期からⅤ期に相当し、17世紀後半から19世紀中葉に位置づけられるが、主体となるのは18世紀半ばから19世紀中葉のものである。

(2) 唐津焼(肥前陶器)⁽²⁾

唐津焼は碗、皿類の他、小杯などがある。碗には91・212がある。91は呉器手となり、212は器表面に刷毛目文を施す。51は京焼を模した浅丸碗である。皿の54・342には胎土目痕が、101・207・350には砂目痕が残る。これら皿に関しては大橋Ⅰ～Ⅱ期に位置づけられる。86の鉢は、白泥で象眼を施す三鳥手となる。唐津焼は概ね大橋Ⅱ～Ⅳ期が中心となり、17世紀代から18世紀後半に位置づけられる。

(3) 瀬戸・美濃焼⁽³⁾

瀬戸・美濃焼には、中世(古瀬戸製品・大窯製品)から近世(登窯製品)のものがああり、以下、製品ごとに述べる。

大窯製品には、碗、皿がある。天目茶碗はいずれも鉄釉が施されており、高台周辺に化粧掛けは認められない。22・303は内反り高台である。22・302は高台脇の削り込みが広く、器高はやや低い。211は高台脇の削り込みが浅い。体部は丸みを帯びており、口唇部は垂直ぎみとなる。器壁は薄い。61・154は灰釉碗である。付高台で底部外面に輪トチ痕が残る。340は灰釉平碗で、削り出し高台である。皿は灰釉を施すものばかりである。343は灰釉丸皿で、付高台である。298・344・347は内壳皿で、見込みにも凸部を有する。298・344の凸部は露胎であり、347は凸部にも施釉が認められる。いずれも底部外面に輪トチ痕が、347のみ底部内面にも輪トチ痕が残る。298のみ付高台であり、344・347は削り込み高台である。345は灰釉皿で付高台である。底部内面中央に印花文が認められる。24・299は灰釉折縁皿で、299は削り出し高台となる。65は灰釉ソギ皿である。削り出し高台で底部内外面に輪トチ痕が残る。大窯期(15世紀末～17世紀初頭)の製品には、大窯第1・2段階の遺物は少なく、大窯第3・4段階の16世紀後半～17世紀初頭に位置づけられる製品が主体となる。また、古瀬戸製品には346の卸皿がある。

登窯製品には、碗(73・90など)、皿(163など)、茶入れ(80)、鬚盥(361)、仏花瓶(362)、香炉(357)などがある。碗には鉄釉を施すものと、灰釉を施すものがあり、高台を無釉とするものが多いが、13・164は高台畳付のみを無釉とする。皿は長石釉・灰釉を施す。81・93は腰部の削り痕が明瞭な折縁皿である。これら近世の瀬戸・美濃焼は連房式登窯期に相当するが、登窯第1～2段階が中心となり概ね17世紀終末から18世紀終末に位置づけられる。

4) 京・信楽焼

信楽焼には、半筒碗(50)、灯明皿(352)、灯明受皿(353)、土鍋(364)があるが総量は少ない。京焼とも信楽焼とも判別し難い碗や鉢は、京・信楽焼系(150・287)とした。これらは18世紀後半から19世紀中葉に位置づけられる。

5) 輸入陶磁器

輸入陶磁器類には、青磁、白磁、染付などの中国製磁器がある。青磁では碗と皿がある。碗の328は連弁をヘラで大きく描き、329は連弁を細い線で描く。228の雷文はやや崩れている。325は口縁端部が外反し、玉縁状となる。皿には稜花皿となる332がある。330・331・334などの底部片は、高台内の軸を拭取るものばかりである。208・339は白磁の皿である。これらの青磁と白磁は概ね15世紀中葉から16世紀前葉に位置づけられる。また、染付には皿と鉢がある。皿は小型品が主体で、口縁部が残存するものは少ないが、端反皿となるものが多いと考える。99の見込みにはおそらく玉取獅子文が、296には十字花文が描かれる。口縁が内湾する341は、口縁下の波頭文がかなり簡略化されて描かれており、文様の類例から底部は碁笥底を呈すると考える。99・296・341は、一乗谷朝倉氏遺跡や福井城跡など中世の遺跡や遺構から普遍的に出土するものであり、これら中国からの輸入磁器は15世紀後半から16世紀半ばに位置づけられるが、209の輪花口縁になると考える鉢は17世紀の初めに位置づけられる。

6) 越前焼⁽⁴⁾

中世から近世のものがあり、時期ごとに述べる。

中世に位置づけられる甕の27・377・378は口縁帯を形成し、明瞭な受け部を有する。307・308・379～381は口縁部が厚く、受け部が退化したものである。382～384は口縁が外傾し、386・387は口縁断面が方形状を呈する。387にはヘラ記号の「七」が刻まれ、74・277・397～399は押印文を有する。398・399などの押印文は、格子目が縦に細長く斜格子が組合う。277の格子目は正方形に近いものである。397は類例から「本」と判読でき、凹字で施される。壺では、76と119は肩部に突帯を有する。310の肩部片には銘文が認められ、文字は「や(?)まか□」であろうか。396は肩部に沈線を巡らせて、ヘラ記号が認められるが、壺は近世に属するものと判別が付きにくいものもある。播鉢は全形を窺えるものは少なく、293・408は内面に播目が無く、底部には断面三角形の高台が貼り付けられる。これと同様の底部を持つと考えるのは、片口状となる294の他、400・401があり口縁端部に沈線を有する。また、409には脚が付き格子状の播目を有す。壺の76・119と共に永平寺町諏訪問興行寺遺跡で出土例があり、15世紀中頃に位置づけられている。同様の格子状の播目は402にもあり、403・404と同様の口縁となるが、411の様な脚を有するかは不明である。内面に間隔の空いた播目を有するものでは、271・313・405は口縁端部に沈線を施し、117・314・407は端部を丸く収める。83・315は口縁端部が丸みを帯びて先細りし、25・30・89・123などは内傾する平坦面を有し、播目の間隔がやや詰まる。甕、壺、播鉢の主要器種以外には292の陶鈿がある。中世の越前焼は13世紀後半に相当するⅡ-2期以降に出現し、以後、Ⅴ期まで継続して出現する。

近世の越前焼には、器表面に鉄泥を施すものや、Ⅷ-2期以降には体部にロクロ目を残すものが出現する。ロクロ目のない甕では、総じて口縁端部が幅広となり、96・97・218など断面が方形を呈するものや、75・107・108・390など逆三角形を呈するものがある。中でも75は新相を呈すと考える。ロクロ目を呈する甕では、55・114・157の口縁端部は幅が広くなりやや外傾し、394は玉縁状に丸みを帯びる。114・394には粘土紐を振った耳が付く。壺は138・391にヘラ記号が認められる。78・393はお歯黒壺と考える。播鉢の110・217・282などは、口縁部上面は平坦で端部がとがる。283は口縁部上面が丸味を帯び、口縁外面

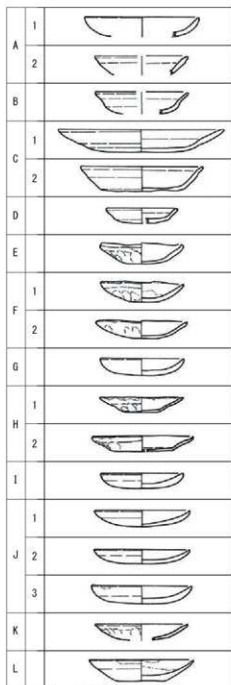
は面取りされる。411はこれらより新しい様相を呈する。外面にロクロ目が残る播鉢には、底部に横に張出す高台が付くようになり、158のような断面三角形を呈するものと、412のような断面方形を呈する両者があり、前者が古相を呈す。また、小型の播鉢139には高台は付かず、口縁は片口となる。播目は密で158・412と施文の様相が共通する。近世には播鉢の他に体部にロクロ目を残す鉢が多く、体部が大きく外傾するものと、内湾気味に立ち上がるものがある。前者では、84は口縁端部が幅広となり、56・85は折り返し、406は丸く収める。後者では、153は口縁端部が幅広となり、100・112・219などは折り返す、395は丸く収め、410は面取りする。414は片口鉢となる。鉢の器形と口縁部の形態は多様となる。近世の越前焼はⅦ期にやや減少するようであるが、Ⅸ期まで一定量が存在するといえる。

7) 常滑焼

419は広口壺である。口縁部を欠き、頸部は直立ぎみに立ちあがる。内面には指押さえ痕や指ナデ痕が明瞭に残る。12世紀後半に位置づけられる。

8) 土師質皿

土師質皿は多量に出土した。成形には手づくねによるものと、型によるもの、ロクロを使用したものがあり、平面形や底面の圧痕の有無から判断した。成形と調整方法から、以下の12類に分類する(第32図)。



第32図 土師質皿分類図

A類 体部から緩やかに立ち上がり、見込み付近から口縁外面を挟んでまわしナデを行う。

A1類 口縁内外を大きく挟み、見込みはやや深くなる。

A2類 口縁を強くなでることで口縁外面下に段が生じる。

B類 内面の立ち上がりを押さえ腰部を立てる。口縁を外反気味に広げてまわしナデを行う。外面にはくびれが生じる。

C類 口径が13cm以上の大型のものをまとめる。口縁は大きく外傾する。

C1類 丸みを帯びて立ち上がり、腰部に弱いくびれを有す。

C2類 平底で直線的に体部が立ち上がり、口縁端部が弱く揃み上がる。

D類 平底の底部から口縁が直線的に外傾する。

E類 底面から屈曲気味に体部が立ち上がる。見込み付近から口縁外面下約1cmまでを挟み、まわしナデを施す。口縁端部が揃み上がるものもある。口径が6.0cm前後の小型のものと8.0~9.0cm前後のものがある。

F類 内面は立ち上がり付近から口縁外面下約1cmまでを挟み、まわしナデを行いナデ抜く。

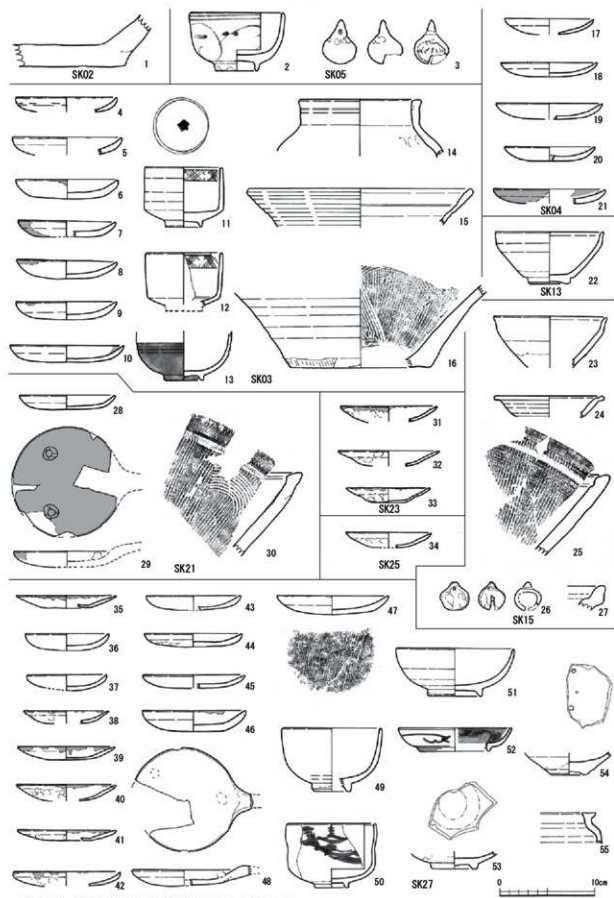
F1類 底面の厚さに比べ口縁が厚く、ぼつりとした重量感のある印象を受ける。平面形は不整形を呈す。

- F 2 類 全体に薄く、緩やかに立ち上がり、浅めとなる。
- G 類 丸底で口縁が緩やかに立ち上がる浅めのもの。比較的丁寧な作りで平面は正円に近い。
- H 類 型成形後、内面立ち上がり付近から口縁外面を挟み、まわしナデを行う。整形痕が残る。平面は正円に近いが、口縁の傾きは一定しないものもあり、形態は多様である。口径は10cm前後となる。
- H 1 類 口縁端部が先細りのものが主体だが、口縁端部の摘み上げが意図的とはならない。把手の有無により、a：無し、b：有りとするが、破片のため確認できないものはaとしている。
- H 2 類 屈曲して立ち上がり、口縁端部には意図的にナデにより摘み上げる。薄手である。
- I 類 型成形。口縁内外を挟み、まわしナデの前後に見込みを一方方向になる。口径が8.5cm前後の小型のもの。底部から均一な厚さを保ち緩やかに立ち上がる。厚手である。
- J 類 型成形。口縁内外を挟み、まわしナデの前後に見込みを一方方向になる。口径は10.0cm前後のものが中心となるが、11.0cmを超えるものも少量存在する。口縁端部は丸くおさめるものと弱く摘み上げるものがある。
- J 1 類 口縁に比べ、薄い底部を有すもの。
- J 2 類 厚さがほぼ均一となるもの。把手の有無により、a：無し、b：有りとするが、破片のため確認できないものはaとしている。
- J 3 類 全体に厚手で、見込みの浅いもの。把手の有無により、a：無し、b：有りとするが、破片のため確認できないものはaとした。また、受皿となるものには、見込みに灯明皿を受ける粘土塊の支点があるものと無いものがある。
- K 類 型成形を真似て手づくねで成形したと考えられるもの。調整はまわしナデをナデ抜く。
- L 類 ロクロ成形のもの。底面に糸切り痕を有す。

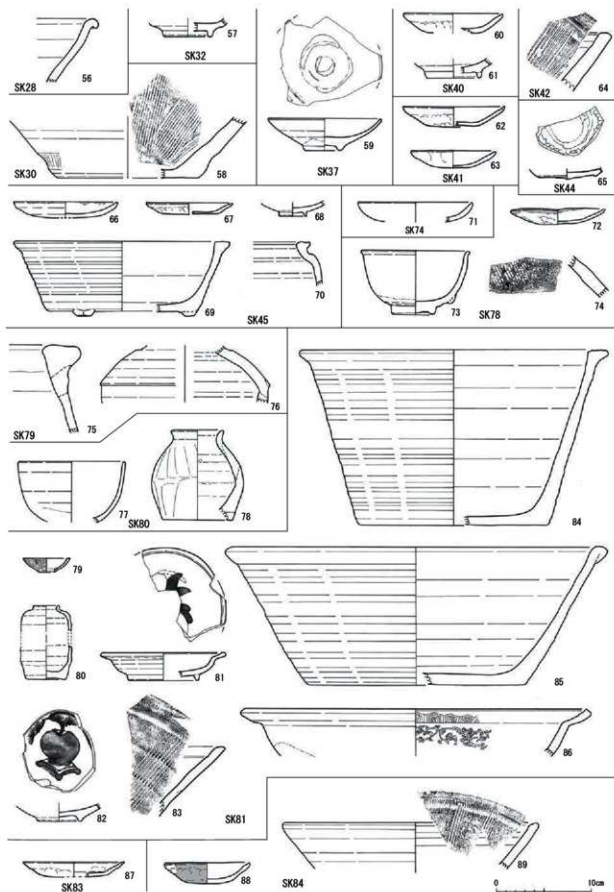
以上の土師質皿を概観すると、成形技法としてはA～G・K類の手づくねとH～J類の型成形に大きく二分される。A～D類の出土例は少量だが、これらは概ね13世紀～16世紀後半の中世に位置づけられる。主体となるのは15世紀後半代だが、D類は13世紀後半代に、C 2類としたものは16世紀半ばから後半と考える。E・F・G・H類としたものは、17世紀代に位置づけられる。E・F類は煤や油痕が付着するものが多く、灯明皿として使用されている。また、型成形のものには底面に板状の圧痕が観察できるものがある。H・J類は灯明皿として使用されたものが多く、受皿として把手を貼り付けたものがある。SD03出土の145と147は皿と受皿が重なった状態で出土した。J 1類は底部の薄さのためか把手が付くものは見いだされず、受皿としては利用されない可能性がある。J類は18世紀～19世紀半ばに位置づけられ、型成形により定型化した製品を供給する段階であり、時期が下るにつれ底部の厚みを増すようである。184は見込みに小穴を穿つもので、用途は不明だが少なからず出土例がある。灯明受皿には、粘土塊の支点のあるものとなないものがある。K類は1点(238)を図示したのみであるが、整った見込みの成形から型成形を模したと判断した。372・373のL類は19世紀半ば以降に出現すると考えたい。

9) 瓦質土器・土製品・その他

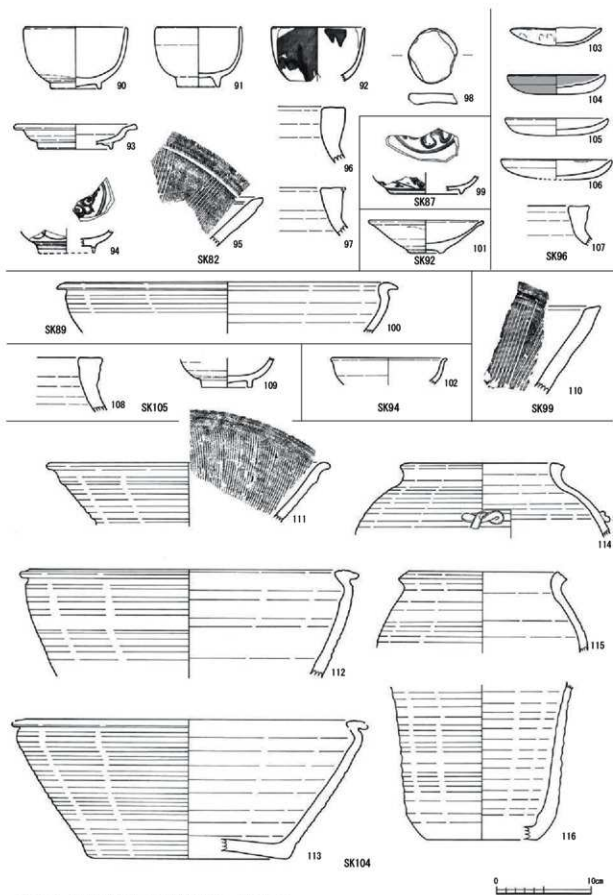
319は13世紀代に位置づけられる瓦質土器の土鍋である。土製品には3・26・160などの土鈴や、375・376などの土人形がある。その他、151は壁土片の可能性が有る。瓦は図示できなかったが、18世紀代の赤瓦片が少量出土している。また、415・416は匣鉢、417・418は円錐ピンと考えられ、窯道具と推測する。415・416は体部下方向がやややすばまり、口縁部にかけてはほぼ垂直に開き、重ねて焼くことが可能である。417・418は上面以外に釉や粘土等が付着している。焼成地、焼成品は不明である。



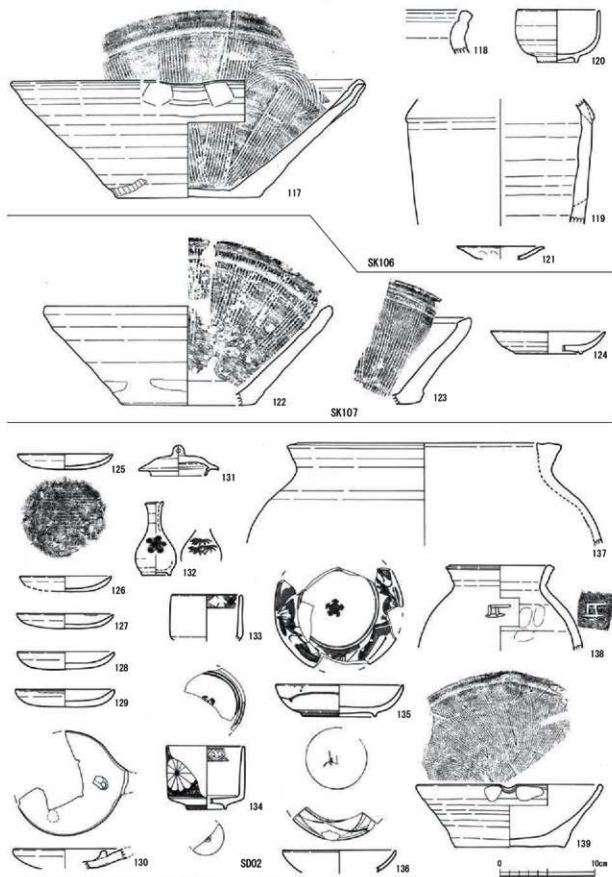
第33図 遺構出土土器・陶磁器実測図1 (縮尺1/4)



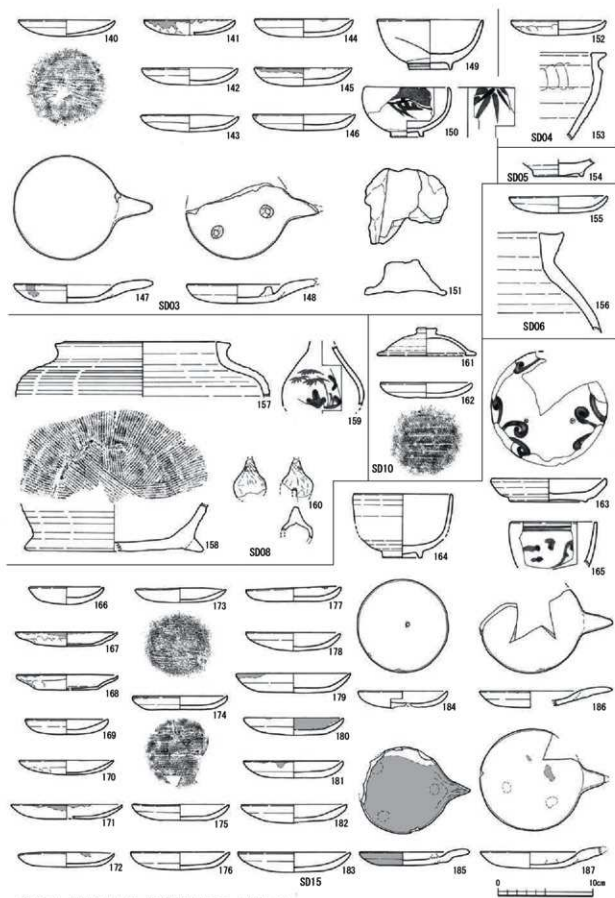
第34図 遺構出土土器・陶磁器実測図2 (縮尺1/4)



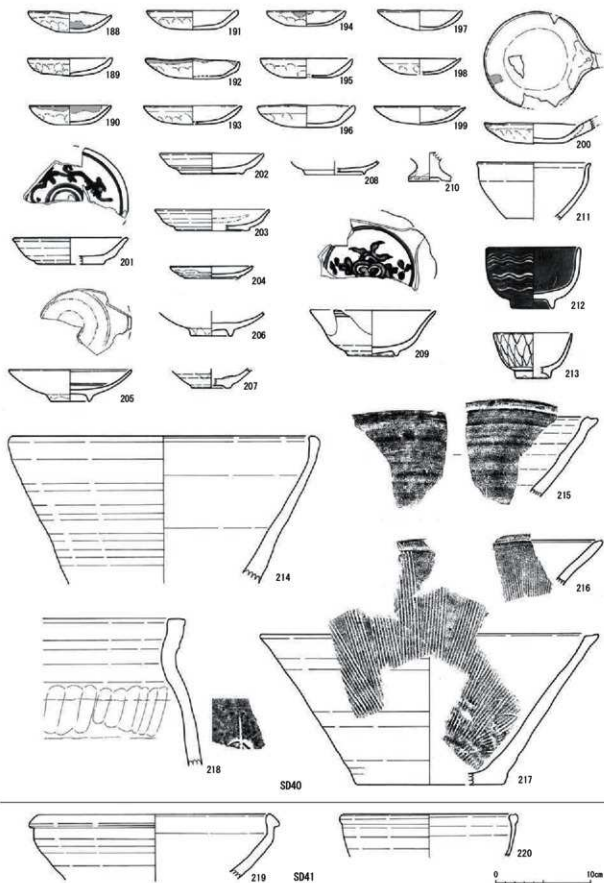
第35図 遺構出土土器・陶磁器実測図3 (縮尺1/4)



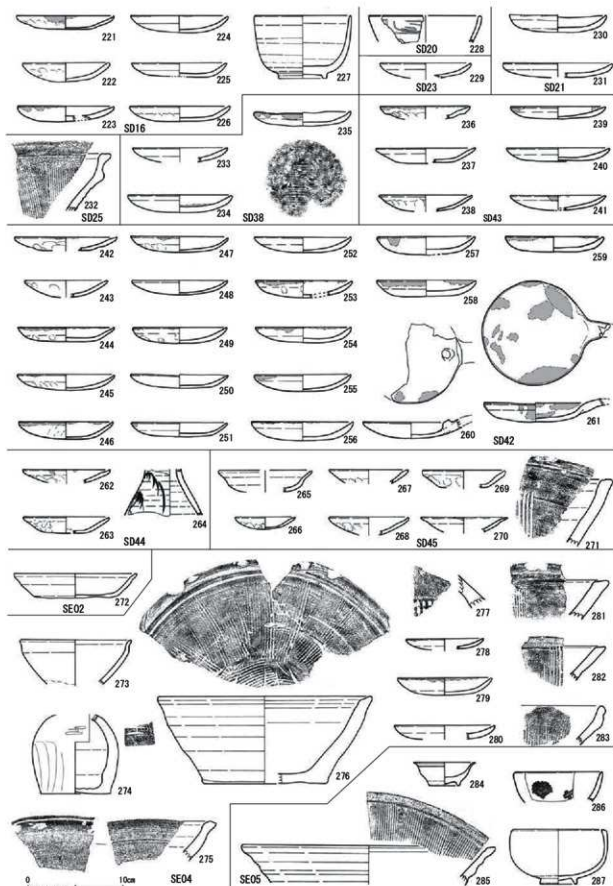
第36図 遺構出土土器・陶磁器実測図4 (縮尺1/4)



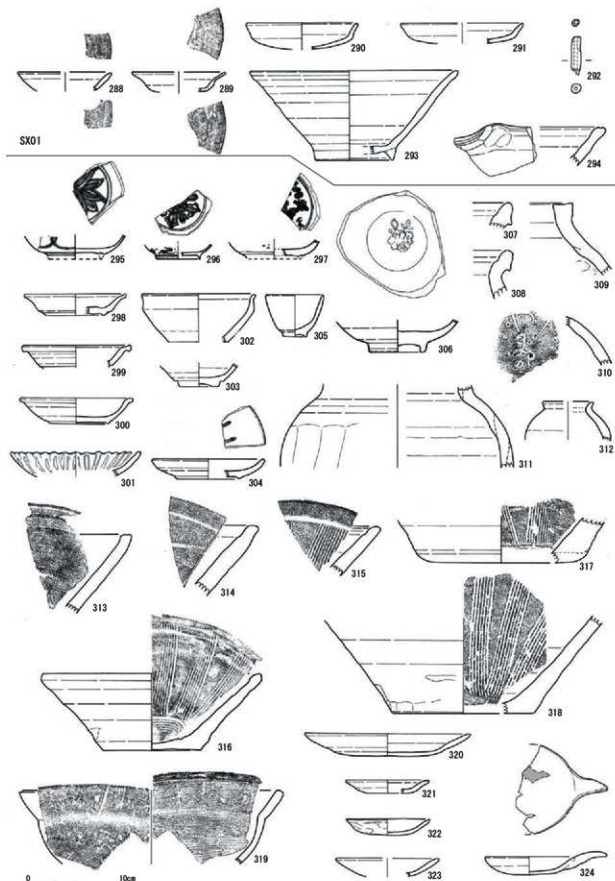
第37図 遺構出土土器・陶磁器実測図5 (縮尺1/4)



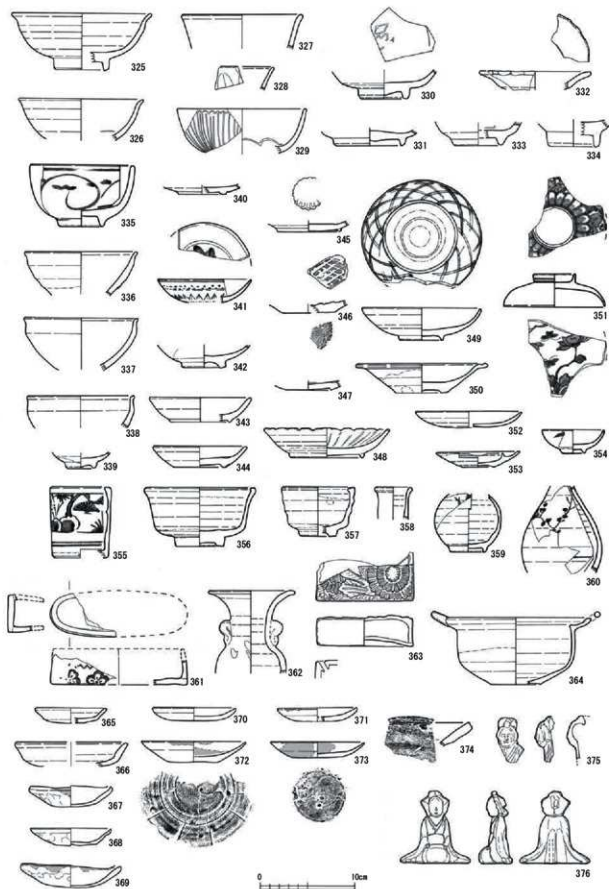
第38図 遺構出土土器・陶磁器実測図6 (縮尺1/4)



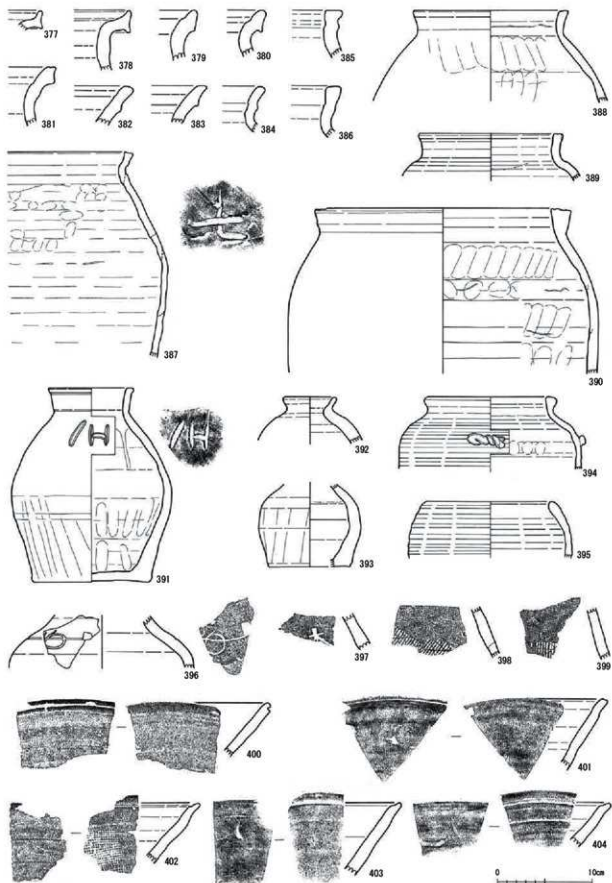
第39図 遺構出土土器・陶磁器実測図7 (縮尺1/4)



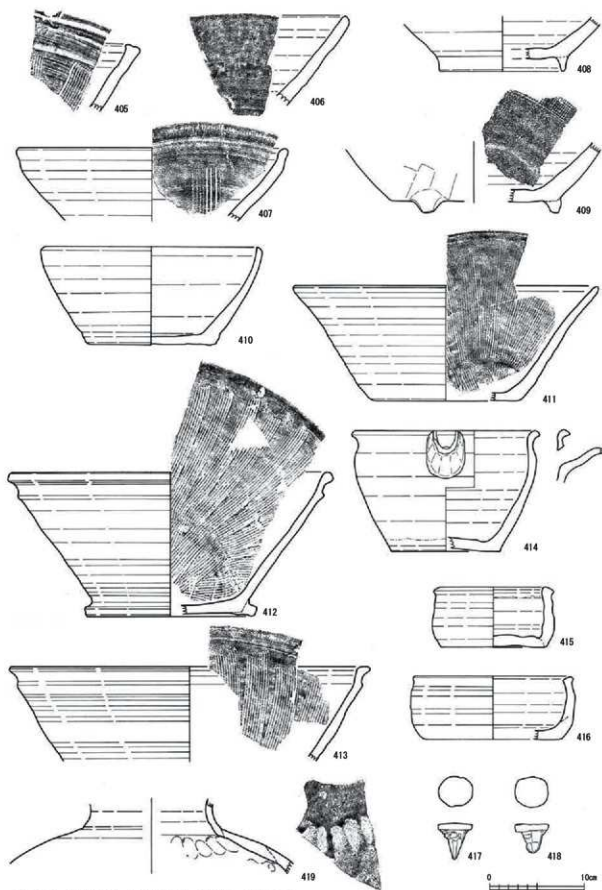
第40図 遺構出土土器・陶磁器実測図8 (縮尺1/4)



第41図 遺構外出土土器・陶磁器実測図1 (縮尺1/4)



第42図 遺構外出土土器・陶磁器実測図2 (縮尺1/4)



第43図 遺構外出土土器・陶磁器実測図3 (縮尺1/4)

2 石製品(第44~47図、図版第11・12、表3~6)

1) 行火(第44図)

1~7は蓋である。1~4は平面形が楕円形を呈するが、1・2と比べ、3・4はやや隅丸長方形を呈する。また、1・3・4の内面は高く大きな曲面のため広い空間を有すが、2の内面は低平で緩やかな曲面を有す。5は平面形がD字形を呈する。内面の身受け部は、前面部分が広く加工される。6・7は破片のため平面形の判断が付かないものだが、両者の内面は緩やかで低平な器形である。8~13は身部および底部片である。8~10は平面形が楕円形を呈する。8は長方形の窓の部分、9・10は底部である。10と2はSD08出土で、一対の可能性がある。11・12は平面形がD字形を呈する。共に前面に長方形の窓を持ち、上方が火入れ部として開口する。13は前面が火入れ部として開口する手焙り形を呈する。内底面は入り口部分が突出し、奥に向かってやや傾斜する。11~13の底部には、側面側に脚を有す。総じて平面形が楕円形を呈するものが、D字形、手焙り形を呈するものより大型となる。全て凝灰岩製である。

2) 石臼(第45・46図7~10)

石臼は、上臼8点、下臼3点の計11点が出土し、10点を図化し得た。茶臼に該当するものは無い。1~7は上臼である。1の上縁部は、くぼみから丸みをもって立ち上がる。幅広の平坦面を有し、断面は扁平な方形状となる。もの入れ孔は楕円状に大きく開き、平面形は楕円形を呈す。側面には挽き木をタガで固定するための挽き手溝が2カ所あるが、対の位置には並ばない。挽き手孔は、石臼の大きさに比べて不自然に彫り込みが浅く、機能したかは疑問である。この石臼は、何らかの製粉・粉碎作業に特化したものであろうか。播面は剥落のため、副溝が8条確認できる箇所があるのみで、分画数は不明である。石臼の機能を終えた後、柱の礎石に転用されている。2と4の上縁の断面は方形状を呈し、比較的高く作り出されている。播面の径より上縁部の径がややすばまる。2は挽き手孔の下端は擦り切れて欠損していることや、厚みが一定しないことから、かなり使い込まれたことが分かるが、播目は丁寧に目立てされた状態である。4は上縁部とくぼみの境が明瞭である。使い込まれたため薄くなっており、播目は残っておらず、弧状の擦痕がある。3は上縁部がくぼみからやや曲線的に傾斜して立ち上がる。断面形は台形状を呈し、やや幅広の平坦部を有す。5と6は上縁部の断面形は蒲針状を呈す。7はSE04の石組内から出土した。小破片であり器表面は摩耗が激しい。くぼみから傾斜して上縁部となり、幅狭の平坦面を有す。もの入れ孔は平面形が円形を呈し、上縁部に近接する。播目は不明である。側面にはややくびれを生じさせるような加工を施す。8~10は下臼である。欠損のために分画数は不明だが、8は8分画と考えられ、副溝は7条確認できる箇所があり、使用による同心円状の擦痕が明瞭である。

3) 容器状製品(第46図11~15)

破片のため全形は窺えないものが多い。11~13は盤である。11は大型となり、内面底部と体部内面上半に被熱痕がある。12は内面に仕切りを有し、内面から口縁にかけて被熱する。断面形が逆台形状の脚を有す。13は内面から口縁にかけて被熱痕があり、低平な脚を有す。小型の12・13は香炉としての使用も推察される。14は何らかの意匠を表現した容器の端部である。他の製品と比較すると、非常に粒子の細かい凝灰岩を用いている。逆台形状の脚が1ヶ所残存する。上面の縁部に並行する沈線を有す。鉢状を呈する15は、掲き臼の口縁部と考える。内外面とも口縁端部を面取りし、口唇部は平滑に整形する。体部外面は口縁部と異なり、意匠的に粗い擦痕を残し、内面は盤で平滑に整形している。

4) 砥石(第47図1~14)

砥石は、他の石製品を転用したものも含め19点出土し、14点を図示した。図示した中で、幅や長さ、

および断面形状から大きく3つに分類を行った。

I類 幅が6.0～8.0cmを測り、断面形が長方形を呈すもの(1・2)。

II類 幅が3.5～4.0cmを測るもの(3～9)。これらは、さらにa:長さが14.0cm前後のもの(3・4)、b:9.0～10.0cm前後のもの(5・6)、c:6.0cm以下のもの(7～9)に細分した。cについては、欠損の可能性も考慮しなければならないが、9において端部を平滑に加工していることから設定した。

III類 幅が2.5～3.0cmを測るもの(10～12)。これらはさらにa:長さが11.0cm前後で断面形が正方形のもの(10)、b:長さが7.5cm前後で断面形が長方形のもの(11・12)に細分した。

以上から、砥石には流通における規格があり、研ぐ対象物は何か、砥石をどのように使用するかの違いを多様に反映していると考えられる。なお、13・14はII類ともIII類とも判断がつかないものである。

5) 硯(第47図15～18)

硯は4点を図示し得た。15は断定出来ないが、16～18の平面形は長方形を呈す。また、全て側面は垂直に立ち上がる。底面は、15・16は浅い抉りを有し、17は平坦面となる。18の底面には幅1.3cmの低平な脚を有する。16の陸部は使用により大きく窪む。形態から判断し、全て16世紀以降に属すると考える。

6) その他の石製品(第46図16～19)

16・17は、円形に研磨し穿孔を施した不明石製品だが、重石などの可能性が考えられる。両者の厚さは近似し、17には擦り切り痕がある。18・19は鉤状に加工を施した支脚状製品で、どちらも細かなノミ痕を残す。19は尖り気味の基部に煤が付着する。18は全面に煤が付着し、基部が平坦に整えられる。

3 漆器(第48図1～7、図版第12、表7)

1～4は胴部が高台脇から緩やかに立ち上がる椀で、総じて口径に比べ器高が低いものである。1・2の高台高は低く、高台内の刃りも浅い。また、1の底面は2～4よりも薄く削られ、4は器壁が厚い。全て内面は赤漆を、外面は黒漆を塗布する。4以外の外面には赤漆による施文が残存し、丸の中に漆絵を施すものだが、残存状況が不良のため意匠は不明である。5・6は胴部下半に稜を有し、直立気味の高台外面に、厚い底部を有する。胴部は内湾気味に立ち上がる。どちらも内外面に黒漆を塗布し、高台裏に赤漆で模様あるいは記号を施文する。7はSK79出土の蓋である。同じくSK79から出土した5の椀に伴う蓋と考える。口縁は短く屈曲し、高台裏には5と同様に赤漆で模様を施文する。

4 木製品(第48図8～24、図版第12、表8)

8～13は箸で、全てSK78から出土した。断面形は多角形状を呈し、端部に向かって細くなる。14～16は加工痕を有す板材である。17は曲物である。内面は漆状のものが塗布される。残存状態は悪く、被熱により部分的に炭化していた。18・19は底板である。18は木釘で接合されている。19は径が32.5cmを測り、側面は外傾するように面取りされる。20は弧状の棒材で、表面は滑らかに加工される。両端部は多方向から面取りし、貫通孔がある。21～23はSE01から出土した板材で、木釘穴を有す。23が底板に、21・22は側板に相当し、平面形が方形、側面形は逆台形状の容器に復元できる。出土遺構から推定し釣瓶と考える。24は下駄である。前緒を通す穴が1ヶ所のみ、いわゆる雪下駄である。

5 金属製品(第49図、図版第13、表9)

金属製品は、調理用具、農耕具、装身に関するもの等、日常生活に関わるものが出土している。

1はSE04の底面から出土した庖丁である。刃部は外湾し、切っ先は摩耗し丸みを帯びる。刃こぼれが顕著である。柄は断面形が不整楕円形で、柄長は約10cmと大人の握り拳程度の長さである。2は刃鎌である。刃先形状は方形状、尻形状は角形となる。3は和鋏である。切っ先は鋭角となる。4・5は煙

管の吸口である。6は毛抜きである。基部より刃部の幅がやや広がる。7は簞で、頭部は耳掻き状となり二本の足が付く。肩部には表裏で位置がずれる切込み状の意匠がある。

6 銭貨・貨幣(第50図、表10)

銭貨及び貨幣は16種69枚が出土し、46枚の拓影を掲載した。渡来銭が23枚で33%、本邦銭が42枚で61%、不明が4枚で6%を占める。SD40から渡来銭が15枚出土した他は多くが包含層出土で、分布状況は散漫である。渡来銭の内、北宋銭が占める割合は17枚で74%を占める。また、寛永通宝の内、寛永十三年(1636)から明暦二年(1656)に発行されたものは古寛永に、寛文八年(1668)以降に発行されたものは新寛永に二分されるが、判別可能なものは古寛永が8枚で22%、新寛永が28枚で78%を占める。46は一分判金である。四文銭以外の寛永通宝は1文銭であり、一分判金は1,000文(一貫文)に相当する。一分判金はSK103から出土したが、額面から地鎮など人為的に埋設したとは考えにくい。

7 古代の遺物(第51図、図版第13、表11)

古代の遺物は先にも述べたが、後世の包含層、遺構に混入したものが多く、小破片が多い。須恵器の破片数は336点を、土師質土器の破片数は122点を数え、出土範囲はほぼ共通する。その範囲は大きく南北に分かれ、北側はE～G 5・6区を中心にやや東西方向に広がる。南側はF～H 10～13区とK 9・10区の2つの分布域があるが、攪乱を挟んでいるためである。以下、図化し得たものを記述する。

1～8は坏蓋である。天井部が平坦な1～3と丸みを帯びる4～8がある。口縁端部を折り返すものが主体である。9～15は無台坏である。9の口縁端部はやや外反する。底面を回転ヘラ切り後、丁寧にヘラ削りする11と、粗いナデ調整を行う9・15がある。16は坏の口縁部である。17～25は有台坏である。高台がハの字状に広がるまたは端部が突出する17・18と21～23がある。26～34は無台皿である。坏に比べ丁寧に削りを施す。体部が直線的に外傾する26～28・32、丸みを帯びる29、弱く屈曲する30・31がある。35・36は埴である。器形は窳えないが、35の高台端部は外方に突出し、36は平坦面となる。37は短頸壺の蓋と考える。摘みは付かない。38～41は瓶類の口縁部で、42～44は底部である。低い高台の42・43と高い高台の44があり、いずれも端部が外方に突出する。45・46は鉢である。45の器壁は薄く、内外とも丁寧に調整である。46の底部は回転ヘラ切りの後、粗いナデを施す。47・49～51は甕の頸部および胴部である。48は壺の肩部である。52～57は土師質土器である。調整は不明なものが多い。52～55は甕で、口縁端部に面を持つ52～54、丸く収める55がある。56・57は鍋で、端部が外方へ突出する56と内傾する57がある。

8 縄文土器(第52図、図版第13、表12)

僅かではあるが、G～K 3区を中心に縄文土器が出土した。摩耗が激しい小破片ばかりで、残存状況は不良であるが、器体の厚さや胎土、観察可能な器表面の調整から縄文土器と判断した。

1は半截竹管で文様を施したもので、中期に属すと考えられる。2は沈線を施す有文のもの、3・4は糸痕調整のみの無文のものである。2～4は後期に属すと考えられる。

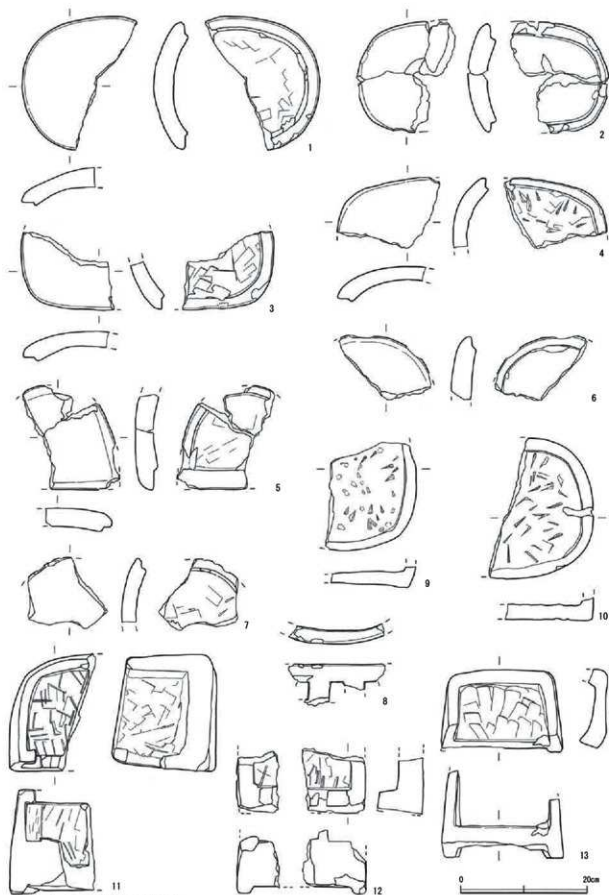
註

(1) 大橋康二 1988 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社

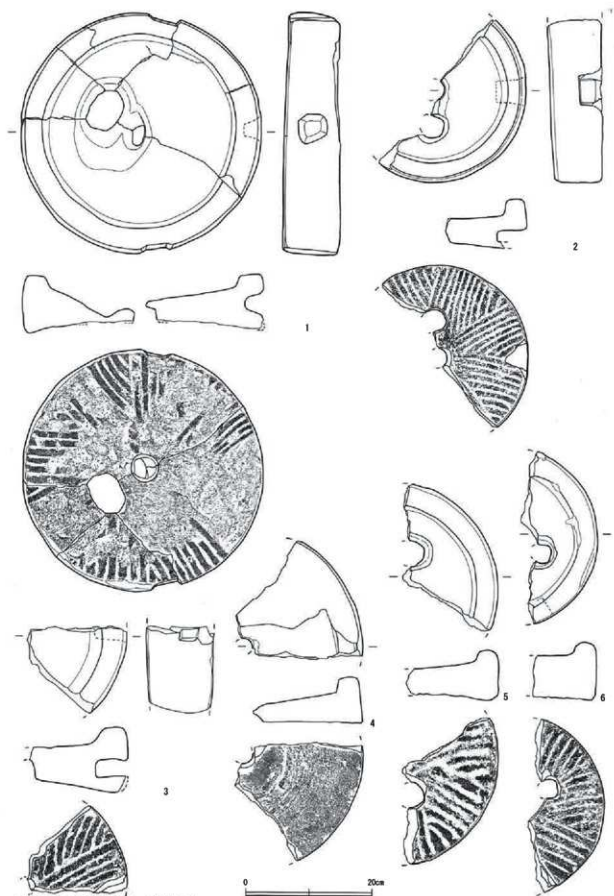
(2) 前掲註(1)

(3) 愛知県史編纂委員会 2008 『愛知県史』別冊窯業2

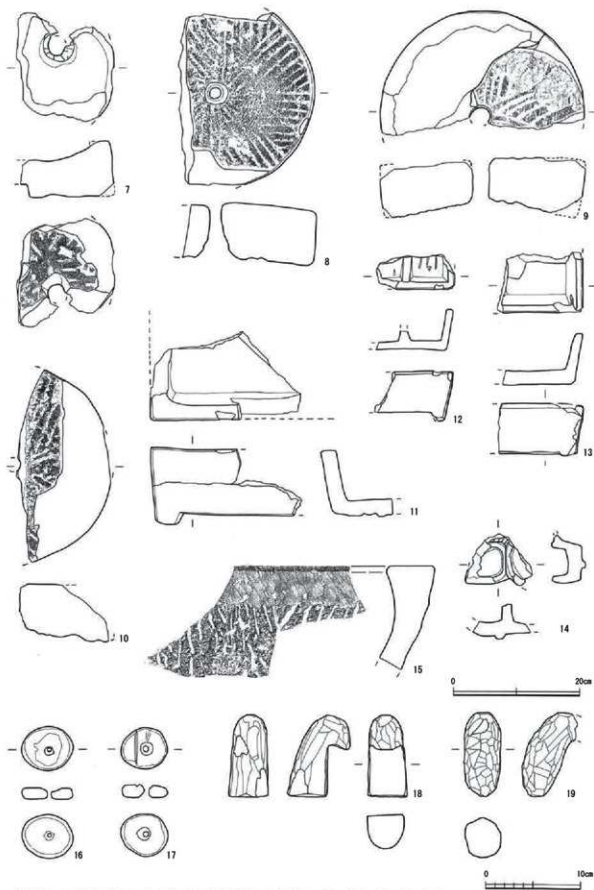
(4) 木村孝一郎 2011 『越前焼の編年の研究と生産地の動向』『越前焼・常滑焼』第10回 山陰中世土器検討会



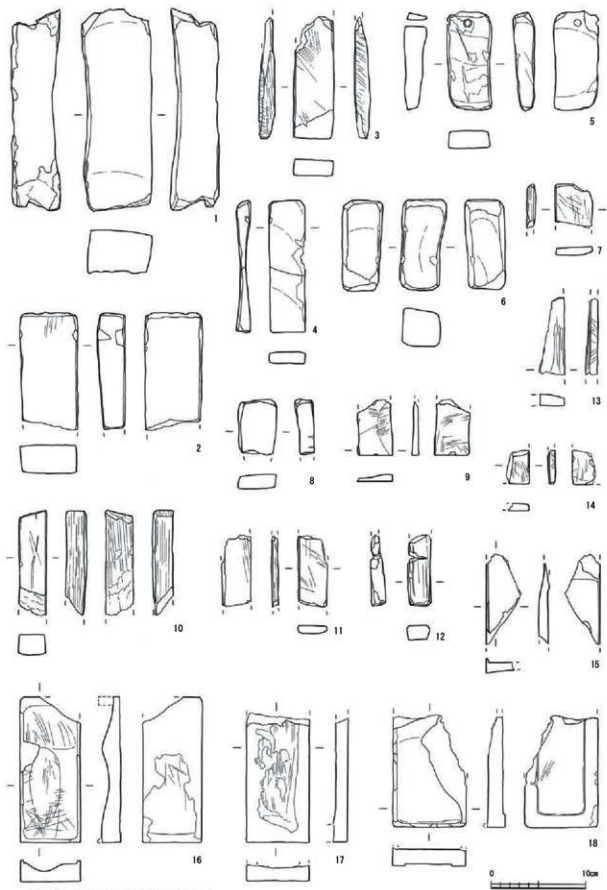
第44図 行火実測図 (縮尺1/6)



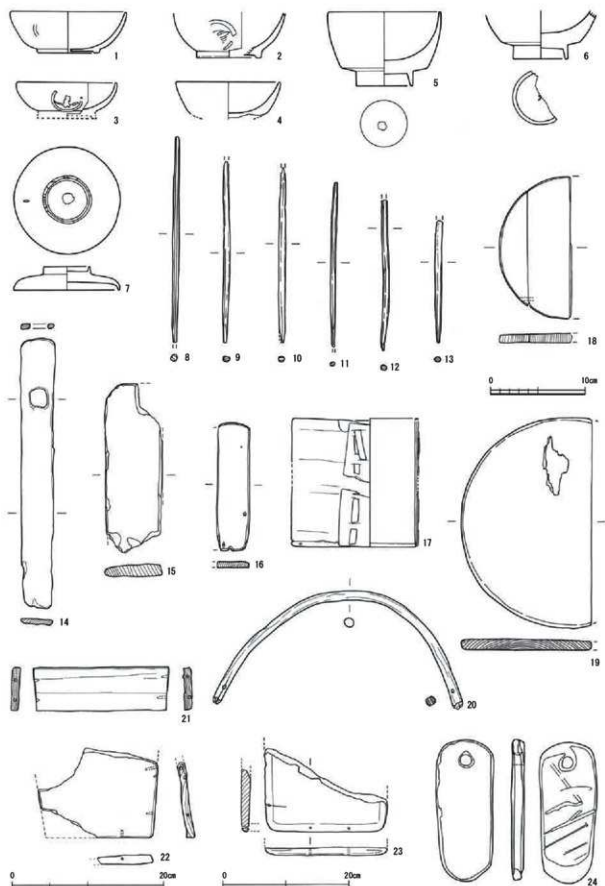
第45図 石臼実測図1 (縮尺1/6)



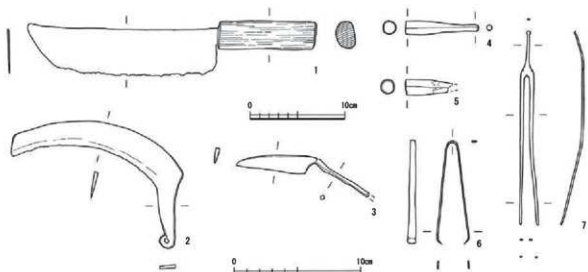
第46図 石臼実測図2・その他の石製品実測図 (縮尺7~15:1/6、16~19:1/4)



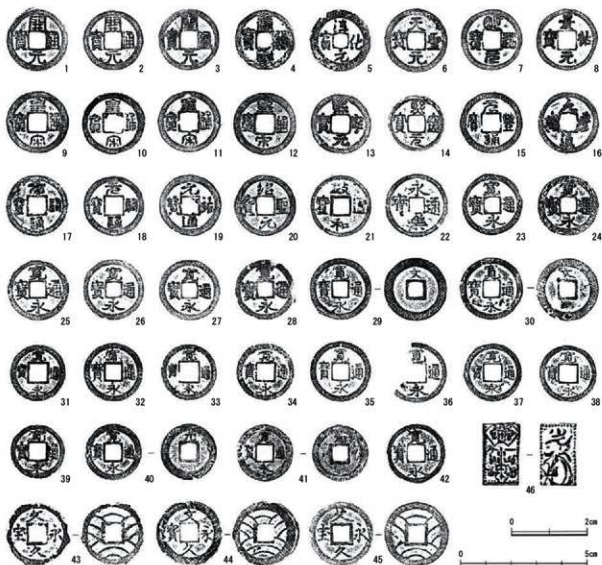
第47図 紙石・硯実測図 (縮尺1/4)



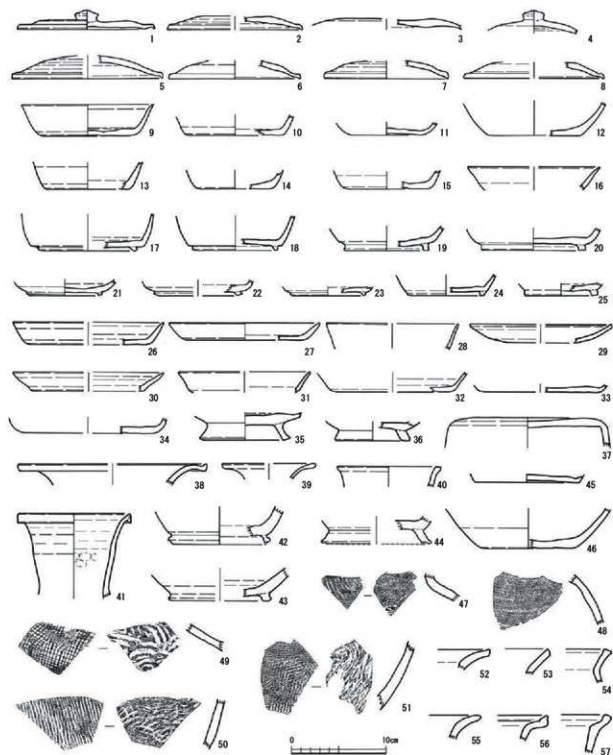
第48図 漆器・木製品実測図 (縮尺1~13・18:1/4, 14~17・20~23:1/5, 19・24:1/6)



第49図 金属製品実測図 (縮尺1・2 : 1/4, 3~7 : 1/3)



第50図 銭貨・貨幣拓影 (縮尺1~45 : 2/3, 46 : 1/1)



第51図 須恵器・土師器実測図 (縮尺1/4)



第52図 縄文土器実測図 (縮尺1/3)

第3節 遺物

第2表 土器・陶磁器観察表(第32～43回)

()は残存値

No.	種別	出土地点		法 量 (cm)		成 形・調 整その他	陶磁器・産地 土師質・打子漆器	陶磁器・種類・表裏 土師質・色調	備 考		
		区	区	口徑	底 径					器 高	
1	陶器 甕	G2-3	SK02	-	-	36)	粘土練積み上げ 横ナテ 底) 未調整	横筋	内面自然釉		
2	陶器 甕	F1	SK05	9.8	4.6	6.3	ロウの成形 瓶底内面 密付無釉 密付 外) 草文文	伊方型	透肉釉	瓶底密付 大横目黒	
3	土製品 土師	F1	SK05	高4.6	幅3.7	厚3.7	手づくね 底面凹凸み	-	5YR7-6焼		
4	土師質 土師	甕	F1	SK03	(10.5)	-	-	惣成形 (口) 戻しナテ 外) ナテ	(口) 横筋	10YR8-2/6灰青	J3a類
5	土師質 土師	甕	F1	SK03	(11.0)	-	-	惣成形 (口) 戻しナテ 外) ナテ	(口) 横筋	10YR8-2/6灰青	J3a類
6	土師質 土師	甕	F1	SK00 No.1	10.8	-	2.1	惣成形 (口) ナテ	(口) 横筋	10YR8-2/6白	J3a類
7	土師質 土師	甕	F1	SK03	10.1	-	1.8	惣成形 (口) 戻しナテ 見込) 一方内側のナテ 底) 横目黒	(口) 横) 横・油流	2.5YR8-2/6白	J3a類
8	土師質 土師	甕	F1	SK01 No.1	10.5	-	2.0	惣成形 (口) 戻しナテ 見込) 一方内側のナテ 底) 横目黒	(口) 横筋	10YR8-4/6灰青	J3a類
9	土師質 土師	甕	F1	SK03	10.5	-	1.9	惣成形 (口) 戻しナテ 見込) 一方内側のナテ 底) 横目黒ナテ滑し	(口) 横筋	10YR8-4/6灰青	J3a類
10	土師質 土師	甕	F1	SK03 No.2	11.9	-	1.8	惣成形 (口) 戻しナテ 見込) 一方内側のナテ 底) 横目黒	(口) 横筋	2.5YR8-2/6灰	J3a類
11	磁器 磁甕	F1	SK03	8.0	3.8	6.4	ロウの成形 瓶底内面 密付無釉 密付 内) 四方隆 見込) 二重溝線+草文文(コンシヤコ印)	伊方型	外) 青緑釉 内) 透肉釉	大横目黒	
12	磁器 磁甕	F1	SK03	8.60	-	3.7	ロウの成形 密付 内) 四方隆 見込) 二重溝線	伊方型	外) 青緑釉 内) 透肉釉	大横目黒	
13	陶器 甕	F1	SK03	-	4.2	3.3	ロウの成形 瓶底内面 密付無釉 瓶底内面 上下縁面口滑し	横口・赤濃	灰緑・鉄粒	横筋密付 密付無釉	
14	陶器 甕	F1	SK03	(12.8)	-	8.2	ロウの成形 外) 回転ナテ 内) 回転ナテ 指捺痕	横筋	鉄流		
15	陶器 鉢	F1	SK03	(26.0)	-	(40)	ロウの成形 外) 回転ナテ 内) 回転ナテ	横筋	鉄流	底) 2割	
16	陶器 磁鉢	E5	SK03	-	(10.8)	(8.7)	ロウの成形 外) 回転ナテ 縁起こし底 内) 回転ナテ	横筋	鉄流	器目 28cm幅10高	
17	土師質 土師	甕	F1	SK04	10.0	-	-	惣成形 (口) 戻しナテ 外) ナテ 底) 横目黒	-	10YR8-2/6白	J3a類
18	土師質 土師	甕	F1	SK04	10.1	-	1.5	惣成形 (口) 戻しナテ 見込) 一方内側のナテ 外) ナテ 底) 横目黒	(口) 横筋	10YR8-2/6灰青	J3a類
19	土師質 土師	甕	F1	SK04	(11.1)	-	1.7	惣成形 (口) 戻しナテ 見込) 一方内側のナテ 外) ナテ 底) 不明	-	10YR8-2/6白	J3a類
20	土師質 土師	甕	F1	SK04	10.1	-	1.5	惣成形 (口) 不明 外) ナテ 底) 横目黒	-	7.5YR7-4/1.5+6焼	J3a類
21	土師質 土師	甕	F1	SK04	(11.7)	-	-	惣成形 (口) 戻しナテ 外) ナテ 底) 横目黒	(口) 見込) 外) 横・油流	10YR8-4/6灰青	J3a類
22	陶器 天目皿	D1	SK13	(11.5)	4.0	3.5	ロウの成形 瓶底内面 密付無釉	横口・赤濃	鉄流	大横目黒(陶磁手一 割4割)	
23	陶器 天目皿	D3-4	SK15	(12.0)	-	(3.5)	ロウの成形 密付無釉	横口・赤濃	鉄流	大横目黒(陶磁手一 割4割)	
24	陶器 天目皿	D1	SK15	(11.4)	-	(2.2)	ロウの成形	横口・赤濃	鉄流	大横目黒(陶磁 手割)により横筋がはせる	
25	陶器 磁鉢	D1-1 D1-2	SK15 P5	-	-	(8.6)	ロウの成形 外) 回転ナテ 内) 回転ナテ	横筋	鉄流	器目 23cm幅10高 V.3割	
26	土製品 土師	D1	SK15	幅10	幅3.1	厚2.8	手づくね 底面凹凸み	-	10YR8-2/6灰青		
27	陶器 甕	D3-4	SK15	-	-	(2.7)	外) 横ナテ 内) 横ナテ	横筋	鉄流	片1割	
28	土師質 土師	甕	E6	SK21(横筋)	10.0	-	1.5	惣成形 (口) 戻しナテ 見込) 一方内側のナテ 底) ナテで横目黒を滑す	-	2.5YR8-2/6白	J3a類
29	土師質 土師	甕	E6	SK21	(11.2)	-	-	惣成形 (口) 戻しナテ 見込) 一方内側のナテ 外) 指捺痕 底) 横目黒	(口) 見込) 横・油流	10YR8-2/6白	J3a類 若干厚欠陥 底面あり
30	陶器 磁鉢	E6	SK21	-	-	(8.6)	ロウの成形 外) 回転ナテ 内) 回転ナテ	横筋	鉄流	器目 27cm幅8高 V.1割	
31	土師質 土師	甕	E6	SK23	(10.1)	-	-	手づくね (口) 戻しナテ 外) 指捺痕ナテ	(口) 横筋	7.5YR8-2/6灰青	E類
32	土師質 土師	甕	E6	SK25	(10.6)	-	-	手づくね (口) 戻しナテ 外) 指捺痕ナテ	-	7.5YR7-4/1.5+6焼	E類
33	土師質 土師	甕	E6	SK25	10.8	-	1.6	惣成形 (口) 戻しナテナテ抜く? 外) 指捺痕	(口) 横筋	7.5YR7-4/1.5+6焼	H1a類
34	土師質 土師	甕	E6	SK25	10.9	-	1.6	手づくね (口) 見込) 戻しナテ 外) 指捺痕と工具によるナテ	-	7.5YR8-4/6灰青	E類
35	土師質 土師	甕	E.5	SK27	(10.0)	-	1.3	手づくね (口) 見込) 戻しナテ 底) 草や亀いナテ	(口) 横筋	7.5YR8-4/6灰青	E類
36	土師質 土師	甕	E.5	SK27	8.7	-	1.8	手づくね (口) 戻しナテ 見込) ナテ 外) 戻) ナテ	(口) かすかに横筋	7.5YR8-6/6灰青	G類
37	土師質 土師	甕	E.5	SK27	8.3	-	1.7	手づくね (口) 戻しナテ 見込) 不明 外) 戻) 不明	(口) 横筋	7.5YR8-6/6灰青	G類
38	土師質 土師	甕	E.5	SK27	(9.0)	-	-	惣成形 (口) 戻しナテ 外) 指捺痕 底) 横目黒?	(口) 横筋	7.5YR7-4/1.5+6焼	H1a類
39	土師質 土師	甕	E.5	SK27	(10.2)	-	1.4	惣成形 (口) 戻しナテ 見込) 不明 外) 不明 底) 横目黒	(口) 横筋	10YR8-2/6灰青	H1a類
40	土師質 土師	甕	E.5	SK27	(10.0)	-	-	惣成形 (口) 戻しナテ 外) 指捺痕 底) 横目黒	(口) 横筋	5YR7-6焼	瓶口のため分類不明

第3章 小野道跡の調査

No.	種別	出土地点		流量 (cm)		成 形・調 整・その他	陶器群・産地 土師器(打止土器)	陶器群・産地 土師器・色調	備 考		
		区	区	口径	底径						
41	土師器 土器	Ⅲ	SK27	10(0)	-	1.1	惣成形 (I) 回しナゲ 内) 撥磨 底) 板目直	(I) 雑流	JYV38-25灰青	H1a期	
42	土師器 土器	Ⅲ	SK27	11(12)	-	-	惣成形 (I) 回しナゲ 見込) 一方筒のナゲ? 内) 撥磨 底) 板目直	(I) 雑流	JYV37-11に5-10	H1a期	
43	土師器 土器	Ⅲ	PS	SK27	0(0)	-	1.6	惣成形 (I)-見込) 回しナゲ 内) 不明	-	JYV38-25灰青	J2a期
44	土師器 土器	Ⅲ	SK27	102	-	1.5	惣成形 (I) 回しナゲ 見込) 輪門のナゲ 内) 撥磨 底) ナゲ	(I) ナゲ小に巻	JYV38-66灰青	J2a期	
45	土師器 土器	Ⅲ	SK27	10(0)	-	1.4	惣成形 (I) 不明 底) 板目直	-	JYV38-25白	J2a期	
46	土師器 土器	Ⅲ	SK27	10.8	-	2.2	惣成形 (I) 回しナゲ 見込) 一方筒のナゲ 内) ナゲで板目直を削す	(I) 雑流	JYV38-25白	J2a期 底) 下平なナゲ	
47	土師器 土器	Ⅲ	SK27	11.7	-	2.0	惣成形 (I) 回しナゲをナゲ抜く 見込) 一方筒のナゲ 内) 撥磨 底) 板目直	(I) 雑流	JYV38-66灰青	J2a期	
48	土師器 土器	Ⅲ	SK27	10(0)	(21)	-	惣成形? (I) 回しナゲ 見込) 不明 底) 不明	見込) 雑流	JYV37-09	J2a期 粘土層(打止 土器)直	
49	陶器	Ⅲ	SK27	10(0)	(42)	0.8	ロケの成形 撥磨高台 巻付・高台内無輪	板目・赤漉	不明	管巻2段 板目により輪筋	
50	磁器	Ⅲ	SK27	0(2)	(36)	0.8	ロケの成形 撥磨高台 高台無輪 鉄粒 内) 粗末	板目	不明	不明	
51	陶器	Ⅲ	SK27	12(0)	5.8	5.1	ロケの成形 撥磨高台 巻付・高台内無輪 巻付?	管巻	板目により、輪・巻 付は不明	管巻2段 鉄粒により輪筋	
52	磁器	Ⅲ	SK27	12(0)	(21)	2.5	ロケの成形 撥磨高台 打中 鉄粒 内) 粗末 内) 高台を巻付で盛く	伊万里	透明釉	大塚早期	
53	陶器	Ⅲ	SK27	-	(10)	(18)	ロケの成形 撥磨高台 高台無輪 見込) 板ノ目輪筋	管巻	内) 板目 外) 輪筋	大塚早期	
54	陶器	Ⅲ	SK27	-	(35)	(25)	ロケの成形 内) 胎土目直 底) 差板直	管巻	板目	大塚 1-2期	
55	陶器	Ⅲ	SK27	-	-	(33)	ロケの成形 内) 回転ナゲ 内) 回転ナゲ	板目	板目	管2期	
56	陶器	Ⅲ	SK28	-	-	(0)	ロケの成形 内) 回転ナゲ 内) 回転ナゲ	板目	板目	管期	
57	磁器	Ⅲ	SK32	-	(30)	(20)	ロケの成形 撥磨高台 高台内輪筋状 見込) 支脚不明	中国	青磁釉		
58	陶器	磁器	D6	SK30	-	-	(0.5)	粘土練積み上げ 内) 回転ナゲ 内) 回転ナゲ 練起こし 底) 未調整	板目	無輪	管目 33a期(12巻)
59	磁器	Ⅲ	SK37	11(20)	37	3.4	ロケの成形 撥磨高台 見込) 板ノ目輪筋 巻付 内) 差板?	伊万里	透明釉	大塚早期	
60	土師器 土器	Ⅲ	D6	SK40	10(0)	-	-	手づくね (I) 回しナゲをナゲ抜く 内) 撥磨底と土底によるナゲ	-	JYV38-25灰青	F1期
61	陶器	丸瓶	D6	SK40	-	(5.0)	(21)	ロケの成形 胎土高台 底) 輪ナゲ直	板目・赤漉	板目	大塚期
62	土師器 土器	Ⅲ	D6	SK41	10(0)	-	2.2	手づくね (I) 回しナゲ 内) 撥磨 底) 板目直	-	JYV38-25灰青	F1期
63	土師器 土器	Ⅲ	D6	SK41	0(0)	-	1.8	手づくね (I) 回しナゲをナゲ抜く? 内) 撥磨 底) 板目直	-	JYV37-51に5-10	F2期
64	陶器	磁器	D6	SK42	-	-	(0.2)	粘土練積み上げ 内) 回転ナゲ 内) 回転ナゲ	板目	無輪	管目 8巻以上 管1期
65	陶器	丸瓶	D-45	SK44	-	(0.0)	(0.0)	ロケの成形 撥磨高台 見込) 輪ナゲ直 底) 輪ナゲ直	板目・赤漉	板目	37a期 大塚期(4段)
66	土師器 土器	Ⅲ	D6	SK45	10(0)	-	1.7	惣成形 (I) 回しナゲをナゲ抜く 内) ナゲ 底) 板目直	(I) 雑流	JYV38-66灰青	H1a期
67	土師器 土器	Ⅲ	D6	SK45	0(0)	-	1.2	惣成形 (I)-見込) 回しナゲ 内) 撥磨 底) 板目直	-	JYV38-25灰青	H1a期
68	陶器	Ⅲ	D6	SK45	-	3.0	(1.7)	ロケの成形 撥磨高台 高台無輪	板目	板目	
69	陶器	Ⅲ	D6	SK45	(22.0)	(15.0)	7.9	ロケの成形 内) 回転ナゲ 内) 回転ナゲ 底) 未調整 板目 粘土層(打止)	板目	底) 板目以内泥 自然釉	管目(小形存在 管2期)
70	陶器	Ⅲ	D6	SK45	-	-	(4.7)	ロケの成形 内) 回転ナゲ 内) 回転ナゲ	板目	板目	管2期
71	土師器 土器	Ⅲ	L10	SK74	1(20)	-	-	手づくね 不明	-	JYV37-66	A13期
72	土師器 土器	Ⅲ	H13	SK28	9.8	-	1.6	惣成形 (I) 回しナゲをナゲ抜く 内) 撥磨 底) 板目直	(I)-板・赤漉	管目(2段に 粘土層)	F2期
73	陶器	丸瓶	H13	SK28	11.2	0.8	0.8	ロケの成形 撥磨高台 高台無輪	板目・赤漉	板目	管巻2段 板目により板目直
74	陶器	Ⅲ	H13	SK28	-	-	-	ナゲ	板目	自然釉	管目
75	陶器	Ⅲ	G11	SK29	-	-	-	粘土練積み上げ 内) 輪ナゲ 内) 輪ナゲ	板目	板目	管2期
76	陶器	Ⅲ	G11	SK29	-	-	(0.1)	粘土練積み上げ 内) 輪ナゲ 内) 輪ナゲ	板目	無輪	管目(管)
77	陶器	Ⅲ	F10	SK00	1(10)	-	(0.5)	ロケの成形	板目・赤漉	無輪・線輪	管巻12段
78	陶器	Ⅲ	F10-L1	SK00	(5.0)	(7.0)	8.5	粘土練積み上げ 内) 回転ナゲ へう抜き 内) 輪ナゲ・撥磨 底) 板目直	板目	板目	へう抜き一部残存
79	磁器	紅彩	F10	SK00	(5.0)	(1.0)	1.5	惣成形 竜巻形	伊万里	白磁釉	大塚早期
80	陶器	茶入	F10	SK00	(2.0)	(2.0)	(0.0)	ロケの成形 底) 輪筋形 底) 下底-底筋無輪	板目・赤漉	板目	管巻 底筋(線筋)

第3節 遺物

No.	種別	出土地点		法 量 (g)		成 形・調 整・その他	陶器部：産地 土師器（打土師器）	陶器部：輪文・瓦類 土師器：色調	備 考	
		区	区	口 径	高 径					部 高
81	陶器 煎餅釜	F30 E11	SK01 I	(130)	(74)	30	ロウロ成形 高台無縁 内) 同転ナゲナズリ 内) 同転ナゲ 見込) 煎竹文? 底) 同転へろ知り 煎竹高内	瀬戸-赤漉	瓦輪-煎餅	管仲第12段階 煎餅に土師器付着
82	陶器 煎 煎	F11	SK01	-	45	139	ロウロ成形 煎出高内 磨付無縁 磨付 見込) 煎竹	伊万葉	透明釉	大溝遺跡
83	陶器 煎鉢	F30	SK01	-	-	(74)	ロウロ成形 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ	瀬戸	無縁	
84	陶器 鉢	F30	SK01	(250)	(260)	18.6	ロウロ成形 内) 同転ナゲナズリ 内) 同転ナゲ 底) 未調整	瀬戸	赤褐色以外赤流	5-3期
85	陶器 鉢	F30	SK01	(80.0)	(147)	23.0	ロウロ成形 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ 底) 未調整	瀬戸	赤褐色以外赤流	煎餅底あり 5-3期
86	陶器 大鉢	F30	SK01	(360)	-	(50)	ロウロ成形 内) 同転ナゲナズリ 内) 兼蓋(蓋文・草花)	吉津	白化粧土-透明釉	三高寺 大溝遺跡
87	土師器 土師 煎	F11	SK03	(105)	-	(16)	手づくね 内) 同転ナゲ 見込) 煎餅底 内) 煎餅底と土師によるナゲ	-	UV照-3色表	5期
88	土師器 土師 煎	F11	SK01	(80)	-	22	手づくね 内) 同転ナゲナズリ(底) 外-底) 煎餅底	内) 内) 煎餅 内) 内) 煎餅	UV照-3色表	5期
89	陶器 煎鉢	F11	SK01	(260)	-	(50)	粘土練積み上げ 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ	瀬戸	無縁	管目 1.6cm(約)条 V-3期
90	陶器 丸煎	F11 F30	SK02 SK01	(10.0)	5.3	6.6	ロウロ成形 煎出高内 高台無縁	瀬戸-赤漉	瓦輪	管仲第2段階 煎餅に土師器付着
91	煎器 煎	F11	SK02	(8.0)	1.6	6.4	ロウロ成形 煎出高内 磨付無縁	伊万葉	透明釉	大溝遺跡
92	陶器 煎	F11	SK02	(8.0)	-	(57)	ロウロ成形	吉津	瓦輪-緑釉流し	大溝遺跡
93	陶器 煎鉢	F11	SK02	(124)	(80)	27	ロウロ成形 煎出高内 高台無縁 内) 同転ナゲナズリ	瀬戸-赤漉	瓦輪	管仲第12段階
94	煎器 煎	F11	SK02	-	-	(22)	ロウロ成形 煎出高内 高台内無縁 磨付 見込) 二重磨削 外) 煎餅-煎竹文	中沢	透明釉	
95	陶器 煎鉢	F11	SK02 SK01	-	-	(53)	ロウロ成形 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ	瀬戸	無縁	管目 2.5cm(約)条 V-3期
96	陶器 煎	F11	SK02	-	-	(60)	内) 磨ナゲ 内) 磨ナゲ	瀬戸	鉄流-自然釉	5-3期
97	陶器 煎	F11	SK02	-	-	(31)	内) 磨ナゲ 内) 磨ナゲ	瀬戸	鉄流-自然釉	5-3期
98	陶器 陶片	F11	SK02	管径 5.9	管径 5.2	厚 1.2	煎餅を研ぎ出し、内面状とする	瀬戸	鉄流	管仲第12段階 煎餅に土師器付着
99	煎器 煎	F30	SK07	-	(76)	(23)	ロウロ成形 煎出高内 高台磨付無縁 磨付 見込) 煎餅-玉粒磨ナズリ 外) 草花文	中沢	透明釉	管仲第 煎餅底
100	陶器 鉢	F12 E12	SK09 I	(36.0)	-	(53)	ロウロ成形 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ	瀬戸	鉄流	5期以降
101	陶器 煎鉢	E11	SK02	(11.8)	(30)	(35)	ロウロ成形 煎出高内 高台無縁 煎餅底あり	吉津	瓦輪	大溝遺跡 煎餅に土師器付着
102	陶器 天目煎	E11	SK01	(120)	-	(29)	ロウロ成形	瀬戸-赤漉	無縁	管仲第12段階
103	土師器 土師 煎	F13	SK06	95	-	19	惣成形 内) 見込) 同転ナゲナズリ(底) 外) 煎餅底	内) 煎餅 内) 煎餅	UV照-25白	F2期
104	土師器 土師 煎	F13	SK06	103	-	21	惣成形 内) 同転ナゲ 見込) 一方内ナゲ 外) 煎餅底 底) 煎餅底	内) 内) 煎餅 内) 内) 煎餅	不明	F3期
105	土師器 土師 煎	F13	SK06	108	-	19	惣成形 内) 同転ナゲ 見込) 一方内ナゲ 外) 煎餅底 底) 煎餅底	内) 煎餅 内) 煎餅	UV照-25白	F3期
106	土師器 土師 煎	F13	SK06	116	-	21	惣成形 内) 同転ナゲ 見込) 一方内ナゲ 底) 煎餅底	内) 見込) 煎餅 内) 煎餅	UV照-25白	F3期
107	陶器 煎	F13	SK06	-	-	(42)	内) 磨ナゲ 内) 磨ナゲ	瀬戸	鉄流-自然釉	5-3期
108	陶器 煎	G16	SK105	-	-	(56)	内) 磨ナゲ 内) 磨ナゲ	瀬戸	鉄流	5-3期
109	陶器 煎	G16	SK105	-	4.1	(23)	ロウロ成形 煎出高内 高台無縁	瀬戸-赤漉	瓦輪	管仲第 煎餅底
110	陶器 煎鉢	D12	SK09	-	-	(60)	ロウロ成形 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ	瀬戸	無縁	管目1.5cm(約)条 V-3期
111	陶器 煎鉢	F12	SK101	(300)	-	(65)	ロウロ成形 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ	瀬戸	自然釉	管目 2.5cm(約)条 煎餅底あり 5期
112	陶器 鉢	F12	SK101	(350)	-	(113)	ロウロ成形 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ	瀬戸	内) 鉄流	5期
113	陶器 鉢	F12	SK101	-	(21.2)	14.3	ロウロ成形 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ 底) 未調整	瀬戸	無縁	5期
114	陶器 煎	F12	SK101	(172)	-	(79)	ロウロ成形 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ	瀬戸	鉄流	管目1.0cm(約)条 煎餅底あり
115	陶器 煎	F12	SK101	(160)	-	(85)	ロウロ成形 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ	瀬戸	鉄流	5-2期煎餅-5期
116	陶器 煎	F12	SK101	-	(118)	(168)	ロウロ成形 内) 同転ナゲ 内) 同転ナゲ	瀬戸	鉄流	5-3期
117	陶器 煎鉢	G10	SK106	274	15.0	125	ロウロ成形 内) 内) 内) 同転ナゲ 煎餅こし底 内) 同転ナゲ	瀬戸	無縁	管目 3.1cm(約)10条 煎餅底あり
118	陶器 煎	G10	SK106	-	-	(47)	内) 磨ナゲ 内) 磨ナゲ	瀬戸	無縁	5-3期
119	陶器 煎	G10 G10	SK106 II	-	-	(133)	粘土練積み上げ 内) 磨ナゲ 内) 磨ナゲ-煎餅底	瀬戸	無縁	管仲第12段階

第3章 小野道跡の調査

No.	種別	出土地点	遺 量 (g)			成 形・遺 望・その他	陶器部・産地 土質質・打込痕	陶器部・産地 土質質・色調	備 考		
			口 径	底 径	口 径 差					口 径 差	
120	陶器 甕	G10	SK106	86.0	4.2	5.6	ワラの成形 瓶蓋高台 高台無縁	瀬戸-美濃	3576	笠形第2段階	
121	土師器 土器	甕	G10	SK106	92.0	-	(14)	手づくね 口 戻しナデ 内 趣脚ナデ	(1) 瀬原	2507-3575	土器
122	陶器 甕鉢	F11	SK107 I	100.0	(14.0)	10.5	口ワラの成形 内 趣脚ナデ 縁起こし底 内 趣脚ナデ	瀬原	無縁	器口・25cm幅8条 底14cm	
123	陶器 甕鉢	F11	SK107	-	-	9.2	口ワラの成形 内 趣脚ナデ 内 趣脚ナデ	瀬原	無縁	器口・25cm幅8条 底14cm	
124	陶器 甕	E11 F11	SK02 SK107	(122)	(70)	24	口ワラの成形 瓶蓋高台 高台内面-器付無縁	瀬戸-美濃	底有縁	笠形第1段階 器口より幅が広がる	
125	土師器 土器	甕	F2	SD02 1	100	-	1.7	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 板目底	-	75Y8-7575	土器
126	土師器 土器	甕	F3	SD02 1	94	-	1.7	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 内 ナデ 底 板目底	-	10Y18-256白	土器
127	土師器 土器	甕	F2	SD02	102	-	1.6	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 土肌で板目底をナデ滑す	(1) 瀬原	75Y8-7575	土器
128	土師器 土器	甕	F-G2	SD02 SD07	101	-	1.9	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 内 ナデ 底 板目底	(1) 全平かに瀬原	25Y8-256白	土器
129	土師器 土器	甕	F3	SD02 2	103	-	1.9	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 内 ナデ 底 板目底	(1) 瀬原	10Y18-256白	土器
130	土師器 土器	甕	F2	SD02	100.0	-	-	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 ナデ	見込・面底	5Y37-60	土器 器口幅は計け
131	磁器 甕	F3	SD02 上	5.8	-	2.3	ワラの成形 内 ナデ 内面のみ施縁	伊予置	透明釉	縁内面は施縁 大體あり-古型	
132	磁器 甕	F3	SD02 下	1.3	20	7.9	ワラの成形 全面施縁 瓶蓋高台 器付 内 板目-器	伊予置	透明釉	板付の器付 大體V型	
133	磁器 甕	F3	SD02	(74)	-	(49)	ワラの成形 器付 内 四方無縁	伊予置	内：青磁釉 外：透明釉	大體V型	
134	磁器 甕	F3	SD02	8(3)	(42)	6.7	ワラの成形 瓶蓋高台 器付 内 板目-器付文 内 四方-二重施縁-5条文 底 板目あり	伊予置	透明釉	大體V型	
135	磁器 甕	F3	SD02 I	(132)	7.6	34	ワラの成形 瓶蓋高台 全面施縁 器付 内 器付文 高台内 器付-縁(?)あり 内 二重施縁 5条文文 (コシニヤコ白磁)・扇形-器付	伊予置	透明釉	高台器付器付 高台 器付あり 板目あり 大體V型	
136	磁器 甕	F3	SD02	(11.8)	-	(24)	ワラの成形 器付 内 二重施縁 二重施縁	伊予置	透明釉	大體V型	
137	陶器 甕	F2-3	SD02	120.0	-	(10.8)	粘土練積み上げ 内 横ナデ 内 横ナデ-趣脚底	瀬原	底足-自然釉	内面器付ナデ 器口幅	
138	陶器 甕	F3 F3 I	SD02	114	-	(91)	粘土練積み上げ 内 趣脚ナデ 内 趣脚ナデ-趣脚底	瀬原	内面-内面器付ナデ 器口幅	ナデ器付 器口幅	
139	陶器 甕鉢	F3	SD02 1	119(2)	11.6	6.7	口ワラの成形 内 趣脚ナデ 内 趣脚ナデ 底 未調整	瀬原	無縁	口ワラナデ 器口幅	
140	土師器 土器	甕	F3	SD0 3 9	101	-	1.7	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 板目底	(1) 全平かに瀬原	10Y18-7575	土器
141	土師器 土器	甕	F3	SD0 3 5	90.0	-	(1.6)	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 板目底	(1) 瀬原	75Y12-41にふく	土器
142	土師器 土器	甕	F3	SD0 3 13	100	-	1.8	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 板目底	(1) 瀬原	10Y18-7575	土器
143	土師器 土器	甕	F3	SD0 3 15	102	-	1.8	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 不明 底 不明	(1) 全平かに瀬原	75Y18-6075	土器
144	土師器 土器	甕	F3	SD0 3 9	103	-	1.9	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 板目底	(1) 瀬原	10Y18-7575	土器
145	土師器 土器	甕	F3	SD0 3 16	102	-	1.9	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 板目底	(1) 瀬原	10Y18-7575	土器
146	土師器 土器	甕	F3	SD0 3 12	108	-	1.7	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 板目底	(1) 瀬原	10Y18-7575	土器
147	土師器 土器	甕	F3	SD0 3 14	110	110	2.3	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 板目底	(1) 瀬原	75Y18-7575	土器
148	土師器 土器	甕	F-G2	SD03	100.0	-	(26)	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 板目底	底・面底	10Y18-7575	土器
149	磁器 甕	F3	SD03 P-2 I	(112)	44	3.3	ワラの成形 瓶蓋高台 見込 板ノ目縁器付 器付 内 器付文	伊予置	器付-透明釉	大體V型	
150	陶器 甕	F3	SD03 G2 I	88.0	3.6	5.3	ワラの成形 瓶蓋高台 高台無縁 包足 内 器付文	京・伊賀	底有縁	器口より包足色	
151	甕土ナ	F3	SD07 7-8	器 78.1	80(2)	器 3	ナデ	-	-	5Y18-60	
152	土師器 土器	甕	F2	SD04	100	-	1.5	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 板目底	(1) 全平かに瀬原	10Y18-7575	土器
153	陶器 甕	F2	SD04	-	-	(9.2)	口ワラの成形 内 趣脚ナデ 内 趣脚ナデ	瀬原	底足	器口幅	
154	陶器 甕	F6	SD05	-	5.2	(19)	ワラの成形 器付高台 底ノナデ	瀬戸-美濃	底有縁	大體V型	
155	土師器 土器	甕	F2-3	SD06	103	-	1.8	惣成形 (1) 戻しナデ 見込 一方内ナデ 底 板目底	(1) 瀬原	10Y18-256白	土器
156	陶器 甕	F2-3	SD06	-	-	(10.7)	粘土練積み上げ 内 横ナデ 内 横ナデ	瀬原	底足-自然釉	器口幅	
157	陶器 甕	G2	SD08上	(180)	-	(60)	口ワラの成形 内 趣脚ナデ 内 趣脚ナデ	瀬原	底足-自然釉	内面器付ナデより板目底	
158	陶器 甕	G2	SD08上	-	18.8	(53)	口ワラの成形 内 趣脚ナデ 内 趣脚ナデ 底 高台器付趣脚ナデ	瀬原	無縁	器口は器付 板目より板目底 器口幅	

第3節 遺物

No.	種別	出土地点		法量 (g)				成形・調整その他	陶器部・産地 土師器 (打止土器)	陶器部・輪文・刻線 土師器・色調	備考
		区	区外 遺跡	口徑	底徑	器高	器底				
139	磁器 瓶	G2	SD06上	-	-	660		ワケの成形 染付 外 底文?	伊万里	透明釉	大塚V期
140	土製品 土師	G2	SD06上	高140	幅32	厚33		手づくね 切込込みあり	-		
141	陶器 蓋	G3	SD1099利	160	横み径 22	20		口に底筋 横み上彫り 外 十字形・輪筋等 (口) 刻線ナダ	不明	外・黒釉 内・黄緑釉	在地の磁器か?
142	土師器 土師	Ⅲ	SD1099利	86	-	1.6		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 隠い一方筒のナダ 底 板目焼	(口) 赤土に染焼		Ⅱa期
143	陶器 瓶	D6	SD15	123	82	25		口ナド成形 飯沼西倉 見込 目取あり 底 目取あり 底筋 内 黒文	瀬戸・赤濁	赤黒・白釉	笠原第1-2期半
144	陶器 瓶	D6	SD15 上・下	102	42	68		ワケの成形 飯沼西倉 染付輪筋	瀬戸・赤濁	白釉	笠原第2期後
145	磁器 瓶	D6	SD15	80	-	430		ワケの成形 染付 外 底筋	伊万里	透明釉 赤底	くらわん中環 大塚V期
146	土師器 土師	D6	SD15	28	-	18		手づくね (口) 刻しナダ 見込 ナダ 外・底 板目焼	-		ⅡV期-Ⅱa白
147	土師器 土師	D6	SD15	1060	-	15		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 不明 底 板目焼	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa白
148	土師器 土師	D6	SD15	1060	-	17		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 外 板目焼 底 板目焼	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
149	土師器 土師	D6	SD15	86	-	1.6		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 外 板目焼 底 板目焼ナダ無し	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
170	土師器 土師	D6	SD15	100	-	1.6		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 外 板目焼 底 板目焼	-		ⅡV期-Ⅱa白
171	土師器 土師	D6	SD15	114.0	-	15		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 ナダ 底 板目焼	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
172	土師器 土師	D6	SD15	10.1	-	1.6		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
173	土師器 土師	D6	SD15	95	-	1.6		惣成形 (口) 見込 刻しナダ 外 板目焼 底 板目焼	(口) 赤土に染焼		ⅡV期-Ⅱa赤
174	土師器 土師	D6	SD15	100	-	1.4		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 外 板目焼 底 板目焼	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
175	土師器 土師	D6	SD15	102	-	1.7		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 底 板目焼ナダ無し?	見込 油焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
176	土師器 土師	D6	SD15	105	-	1.9		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 底 板目焼	(口) 赤土に染焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
177	土師器 土師	D6	SD15上	10.1	83	1.6		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 隠い一方筒のナダ 底 板目焼	油焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
178	土師器 土師	D6	SD15	98	-	1.9		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 底 板目焼	(口) 赤土に染焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
179	土師器 土師	D6	SD15	120	-	2.1		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 不明 底 板目焼	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
180	土師器 土師	D6	SD15	10.4	-	1.8		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 底 板目焼ナダ無し	(口) 見込 板・油焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
181	土師器 土師	D6	SD15	10.4	-	1.8		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 底 板目焼	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa白
182	土師器 土師	D6	SD15	11.0	-	2.0		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 底 板目焼ナダ無し	(口) 見込 板・油焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
183	土師器 土師	D6	SD15	11.8	-	2.1		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 底 板目焼	-		ⅡV期-Ⅱa白
184	土師器 土師	D6	SD15	93	-	1.8		惣成形 (口) 刻しナダをナダ取く 見込 ナダ 底 板目焼ナダ無し	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄 Ⅱa期 板底長身丸付low
185	土師器 土師	受埴	SD15	90 総手倉む 1140	1160	1.8		惣成形 (口) 刻しナダ 見込 不明 底 板目焼ナダ無し 底筋 板目焼ナダ	内・外 黄・油焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
186	土師器 土師	受埴	SD15	1065 総手倉む 1338	22			惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 外 ナダ 底 板目焼ナダ無し 総手 匙引けナダ	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
187	土師器 土師	受埴	SD15	804 総手倉む 1227	230			惣成形 (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ 外 板目焼 底 板目焼 総手 匙引けナダ	見込 油焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
188	土師器 土師	Ⅲa	SD40	87	-	22		手づくね (口) 刻しナダをナダ取く 外 板目焼	(口) 見込 板・油焼		ⅡV期2 に属し黄
189	土師器 土師	Ⅲa	SD40	88	-	19		手づくね (口) 刻しナダをナダ取く 外 板目焼	-		ⅡV期2 に属し黄
190	土師器 土師	Ⅲa	SD40	88	-	21		手づくね (口) 見込 刻しナダをナダ取く 外・底 板筋と土具に2点ナダ	(口) 板焼		ⅡV期2 に属し黄
191	土師器 土師	Ⅲa	SD40	93	-	20		手づくね (口) 見込 刻しナダをナダ取く 外・底 板筋	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
192	土師器 土師	Ⅲa	SD40	98	-	22		手づくね (口) 見込 刻しナダをナダ取く 外 板筋 底 ナダ	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa赤黄
193	土師器 土師	Ⅲa	SD40	102	-	20		手づくね (口) 刻しナダ 見込 ナダ 外 板筋 底 ナダ	(口) 板焼		ⅡV期-Ⅱa赤
194	土師器 土師	Ⅲa	SD40	92	-	1.8		手づくね (口) 刻しナダ 見込 不明 外 板筋 底 ナダ	(口) 板焼		ⅡV期2に属し黄
195	土師器 土師	Ⅲa	SD40	96	-	2.1		手づくね (口) 刻しナダ 見込 一方筒のナダ? 外 板筋 底 ナダ	(口) 赤土に染焼		ⅡV期2 に属し黄
196	土師器 土師	Ⅲa	SD40	10.1	-	2.4		手づくね (口) 刻しナダをナダ取く 外・底 板筋	(口) 見込 板・油焼		ⅡV期-Ⅱa
197	土師器 土師	Ⅲa	SD40	88	-	2.1		手づくね (口) 刻しナダ 見込 ナダ 底 板筋	(口) 赤土に染焼		ⅡV期2-Ⅱa
198	土師器 土師	Ⅲa	SD40	86	-	1.7		手づくね (口) 見込 刻しナダ 外 板筋	-		ⅡV期-Ⅱaに属し黄

第3章 小野道跡の調査

No.	種別	出土地点		法 量 (g)		成 形・調整・その他	陶器群・産地 土師器(打止土器)	陶器群・産地・陶質・色調	備 考		
		区	区名 区番	口径	高さ					器 高	
199	土師器 土師	H3	SD40上	95	-	1.9	惣成形 不明	IT 産地	IVY38-25白	IT産	
200	土師器 土師	H14	SD40	M4 肥字含む (120)		(27)	惣成形 IT 具シナテ 見込 ナテ 内 陶器 底 板目板ナテ。肥字 胎付板ナテ	IT 産地	IVY37-2に白・黄	IT産	
201	陶器	H3	SD40 IT	(118)	(82)	2.8	ワロ成形 惣成形 見込 胎付板ナテ 見込 胎付板ナテ 胎付板ナテ	瀬戸・美濃	灰白釉	伊勢第一-2胎手 見込 ナテ産あり	
202	陶器	H10	SD40	(100)	(60)	2.2	ワロ成形 惣成形 胎付板ナテ	瀬戸・美濃	灰釉	伊勢第一-2胎手 胎付により胎はせる	
203	陶器	H14	SD40	(118)	(78)	2.3	ワロ成形 惣成形 胎付板内胎	瀬戸・美濃	灰釉・見込みに陶 胎あり	伊勢第一-2胎手 胎付により胎はせる	
204	陶器	H14	SD40	(80)	(50)	1.3	ワロ成形 胎付板内胎	瀬戸・美濃	灰釉	伊勢第一-2胎手 胎付により胎はせる	
205	磁器	H14 H3	SD40 I	(120)	4.2	3.4	ワロ成形 惣成形 胎付板 胎付 見込 胎付	伊万里	透明釉	大塚古窯 片澤古台	
206	磁器	H14	SD40	-	4.3	(27)	ワロ成形 惣成形 胎付板 見込 胎付 胎付 文様不明	伊万里	透明釉	大塚古窯 胎付により胎はせる	
207	陶器	H14	SD40	-	(42)	(21)	ワロ成形 惣成形 胎付板 見込 胎付板ナテ 胎付	香津	灰釉	大塚古窯	
208	磁器	H14	SD40	-	(62)	(16)	底面に青花 胎付板内胎	中国	白釉	尾山窯 京徳窯	
209	磁器	H10	SD40	(134)	3.4	4.9	ワロ成形 惣成形 胎付板 胎付 見込 胎付	中国	透明釉	津田窯 梅田10窯 四谷古台	
210	陶器	H14	SD40	-	4.5	(30)	ワロ成形 惣成形 内 胎付板ナテ 内 胎付板ナテ 胎付板ナテ	瀬戸・美濃	灰釉	伊勢第一-2胎手 胎付	
211	陶器	天目焼	H14	SD40	(120)	-	(59)	ワロ成形 惣成形 胎付板	瀬戸・美濃	灰釉	大塚古窯胎付 一穴焼
212	陶器	丸瓦	H14	SD40	100	4.4	6.4	ワロ成形 惣成形 内 胎付板 内 胎付板 胎付	香津	白化粧土・透明釉	大塚古窯
213	磁器	黄	H14 H3	SD40 SD40上層	82	(36)	4.8	ワロ成形 惣成形 胎付板 胎付 内 胎付板ナテ	伊万里	透明釉	大塚古窯
214	陶器	鉄	H14 H3	SD40 I	(200)	-	(154)	ワロ成形 内 胎付板ナテ 内 胎付板ナテ	瀬戸	内面に灰泥	宇治や中津七 瓦3個あり
215	陶器	鉄	H13	SD40	-	-	(85)	ワロ成形 内 胎付板ナテ 内 胎付板ナテ	瀬戸	無釉	宇・1期
216	陶器	磁鉄	H14	SD40	-	-	(60)	ワロ成形 内 胎付板ナテ 内 胎付板ナテ	瀬戸	自然釉	標目 25x60mm 厚2mm
217	陶器	磁鉄	H14 H3	SD40 I	35.8	15.8	16.0	ワロ成形 内 胎付板ナテ 内 胎付板ナテ 胎付	瀬戸	自然釉	標目 25x60mm 厚1.5mm
218	陶器	黄	H14	SD40	-	-	(154)	胎付板ナテ 胎付 胎付	瀬戸	内・底面(胎付)	標目 記号文 瓦1個
219	陶器	鉄	F11	SD40	(230)	-	(87)	ワロ成形 内 胎付板ナテ 内 胎付板ナテ	瀬戸	鉄泥	標2期
220	陶器	鉄	F11	SD40	(134)	-	(45)	ワロ成形 内 胎付板ナテ 内 胎付板ナテ	香津か?	灰釉・黄灰釉	片付か?
221	土師器 土師	H6	SD16	(102)	-	1.4	手づくね IT 具シナテ 見込 不明 内 陶器 底 不明	IT 産地	IVY37-6産	IT産	
222	土師器 土師	H6	SD16	90	-	2.1	惣成形 IT 具シナテ ナテ 内 陶器 底 胎付板	-	IVY37-4に白・黄	IT産	
223	土師器 土師	H6	SD16	100	-	1.6	惣成形 IT 具シナテ 見込 一方内ナテ 底 胎付板ナテ	IT 産地	IVY38-3灰黄産	IT産	
224	土師器 土師	H6	SD16	102	-	1.8	惣成形 IT 具シナテ 見込 一方内ナテ 底 胎付板	IT 産地	IVY38-25白	IT産	
225	土師器 土師	H6	SD16	99	-	1.5	惣成形 IT 具シナテ 見込 一方内ナテ 底 胎付板	IT 産地	IVY38-3灰黄産	IT産	
226	土師器 土師	H6	SD16	(105)	-	1.6	惣成形 IT 具シナテ 見込 一方内ナテ 底 胎付板	IT 産地	IVY38-3灰黄産	IT産	
227	陶器	黄	D6	SD16	(100)	(50)	6.7	ワロ成形 惣成形 胎付板	瀬戸・美濃	灰釉	胎付板あり 伊勢第2胎
228	磁器	黄	E5	SD20	-	-	(28)	内 黄文	中国	青釉	
229	土師器 土師	H6	SD21	(94)	-	-	惣成形 IT 具シナテ 見込 不明 内 陶器 底 ナテ	見込 産地	IVY37-6産	IT産	
230	土師器 土師	H8	SD21	101	-	1.8	惣成形 IT 具シナテ 見込 一方内ナテ 底 胎付板	IT 産地	IVY38-6灰黄産	IT産 胎付板あり	
231	土師器 土師	H8	SD21	(115)	-	1.5	惣成形 IT 具シナテ 見込 一方内ナテ 底 胎付板	見込 産地	IVY38-3灰黄産	IT産	
232	陶器	磁鉄	M5	SD25	-	-	(60)	ワロ成形 内 胎付板ナテ 内 胎付板ナテ	瀬戸	無釉	標目 25x60mm 厚1mm
233	土師器 土師	H13	SD28	(100)	-	-	惣成形 IT 具シナテ 内 胎付板	見込・内 産地	IVY38-25白	IT産	
234	土師器 土師	H13	SD28	109	-	1.9	惣成形 IT 具シナテ 見込 一方内ナテ 底 胎付板	見込 産地	IVY38-3灰黄産	IT産	
235	土師器 土師	H13	SD28	101	-	1.5	惣成形 IT 具シナテ 内 胎付板 見込 胎付	IT 産地	IVY38-25白	IT産	
236	土師器 土師	F13	SD41	(84)	-	-	手づくね IT 具シナテ 内 胎付板	IT 産地	IVY37-6産	IT産	
237	土師器 土師	F13	SD41	(104)	-	1.6	手づくね IT 具シナテ 内 胎付板 底 不明	-	IVY38-3灰黄産	IT産	

第3節 遺物

No.	種別	出土地点		法量 (g)		成形・調整その他	陶器部・土師器 土師器(打石土器)	陶器部・銅器・鉄器 土師器(色土)	備考		
		区	区外 遺跡	口径	高さ					器内	
228	土師器 土師器	Ⅲ	SD43	87	-	惣成形? (I) 両シナギナナを置く 内) 陶器部	-	IVY38-35表裏	Ⅲ期		
229	土師器 土師器	Ⅲ	SD43	100	- 1.3	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 外) ナナ 底) 板目底	(I) 陶器	IVY38-35表裏	Ⅲ期		
240	土師器 土師器	Ⅲ	SD43	118	- 1.4	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 外) 陶器部	-	IVY38-35表裏	Ⅲ期		
241	土師器 土師器	Ⅲ	SD43	100	- 1.6	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 外) ナナ 底) 板目底	(I) 陶器	IVY38-28白	Ⅲ期		
242	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	100	-	手づくね (I) 両シナギ 外) 陶器部	(I) 陶器	IVY38-28白	Ⅲ期		
243	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	88	-	手づくね (I) 両シナギ 外) 陶器部	(I) 陶器	IVY38-28白	Ⅲ期		
244	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	100	- 1.5	惣成形 (I) 両シナギをナナ置く 内) 陶器部	(I) 陶器	IVY38-28白	Ⅲa期		
245	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	102	- 1.7	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 底) 板目底	(I) 陶器	IVY38-28白	Ⅲ期		
246	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	89	- 1.8	惣成形 (I) 両シナギ 外) 陶器部 底) 板目底	(I) 陶器	ZY38-66表裏	Ⅲ期		
247	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	102	- 1.7	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 外) 陶器部	(I) 陶器	IVY38-35表裏	Ⅲ期		
248	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	100	- 1.5	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 底) 板目底	-	IVY38-28白	Ⅲ期		
249	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	89	- 1.7	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 外) 陶器部	(I) 陶器	ZY38-66表裏	Ⅲ期		
250	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	102	- 1.4	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 底) 板目底	(I) かなりかに陶器	IVY38-28白	Ⅲ期		
251	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	101	- 1.5	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 底) 板目底	(I) 陶器	ZY37-41c-f白	Ⅲ期		
252	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	100	- 1.6	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 外) ナナ 底) 板目底	(I) 陶器	ZY38-74表裏	Ⅲ期		
253	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	101	- 1.9	惣成形 (I) 両シナギ 外) 陶器部 底) 板目底	(I) 陶器	IVY38-35表裏	Ⅲ期 見込) 人前跡多い		
254	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	100	- 1.6	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 底) 板目底	(I) 陶 底) 油	ZY38-74表裏	Ⅲ期		
255	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	101	- 1.8	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 底) 板目底	(I) 陶器	ZY37-41c-f白	Ⅲ期		
256	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	106	- 2.0	惣成形 (I) 両シナギ 外) ナナ 底) 板目底	(I) 陶器	IVY38-35表裏	Ⅲ期		
257	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	102	- 2.0	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 底) 板目底	(I) 陶器	IVY38-35表裏	Ⅲ期		
258	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	104	- 1.7	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 底) 板目底	(I) 陶器	IVY38-35表裏	Ⅲ期		
259	土師器 土師器	Ⅲ	SD42	102	- 1.7	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 底) 板目底	(I) 陶器	IVY38-28白	Ⅲ期		
260	土師器 土師器	受皿	P13	102	- (20)	惣成形 (I) 不明 見込) 不明 底) 板目底ナナ置く 手づくね目付	(I) 見込) 陶・油	ZY37 20	Ⅲ期		
261	土師器 土師器	受皿	P13	SD42	110 総手づくね (135)	23)	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 底) 板目底 底) 板目付	(I) 見込) 内) 油	ZY38-74表裏	Ⅲ期	
262	土師器 土師器	Ⅲ	SD41	88	-	手づくね (I) 両シナギ 外) 陶器部	(I) 陶器	IVY38-28白	Ⅲ期		
263	土師器 土師器	Ⅲ	SD41	80	-	手づくね (I) 両シナギをナナ置く 内) 陶器部	見込) 陶・油	IVY36-3 5c-f白	Ⅲ期		
264	磁器	Ⅲ	SD41	-	- (49)	ロクロ成形 輪付 外) 輪	伊万里	漆器類	内面は無縁		
265	土師器 土師器	Ⅲ	P-G1	SD45	-	23)	手づくね (I) 両シナギ 見込) ナナ 底) 陶器部ナナ	-	IVY32-3 c-f白	Ⅲ期	
266	土師器 土師器	Ⅲ	G10	SD45	82	- 1.3	手づくね (I) 見込) 両シナギ 外) 陶器部	-	IVY37-9 c-f白	Ⅲ期	
267	土師器 土師器	Ⅲ	P-G1	SD45	83	-	手づくね (I) 両シナギ 外) 陶器部	-	IVY37-3 c-f白	Ⅲ期	
268	土師器 土師器	Ⅲ	G10	SD45	82	-	手づくね (I) 両シナギ 外) 陶器部	(I) 陶器	ZY38-74表裏	Ⅲ期	
269	土師器 土師器	Ⅲ	P10	SD45	86	-	手づくね (I) 両シナギ 外) 陶器部	-	ZY38-74表裏	Ⅲ期	
270	土師器 土師器	Ⅲ	P-G1	SD45	80	-	手づくね (I) 両シナギ 外) 不明	(I) 陶器	IVY38-35表裏	Ⅲ期	
271	陶器	磁器	P10	SD45	-	79)	ロクロ成形 外) 回転ナナ 内) 回転ナナ	磁器	無縁	器口・1層が14以上 有	
272	土師器 土師器	Ⅲ	H4	SD45	120	- 2.6	手づくね (I) 両シナギ 見込) ナナ 底) 陶器部	-	IVY38-28白	Ⅲ期	
273	陶器	天目焼	P12	SD45	110	- (47)	ロクロ成形 高脚部陶器	瀬戸・美濃	鉄類	天目焼2段	
274	陶器	磁	P12	SD45	-	(74) 84)	粘土練り込み上 内) ナナ 下) ナナ 底) 未調整	磁器	自然焼	お倉田 記号文あり	
275	陶器	磁	P12	SD45	-	(42)	ロクロ成形 外) 回転ナナ 内) 回転ナナ	磁器	無縁	器口	
276	陶器	磁器	P12	SD45	122	(128)	83	ロクロ成形 外) 回転ナナ 内) 回転ナナ 底) 未調整	磁器	無縁	器口・幅29x10 見込
277	陶器	不明	P12	SD45	-	-	ナナ	磁器	無縁	器口	
278	土師器 土師器	Ⅲ	P12	SD45	82	-	手づくね (I) 両シナギ 見込) 不明 外) ナナ	(I) 陶器	IVY38-28白	Ⅲ期	
279	土師器 土師器	Ⅲ	P12	SD45	89	- 1.8	惣成形 (I) 両シナギ 見込) 一方内ナナ 底) 板目底	(I) 陶器	ZY38-35表裏	Ⅲ期	

第3章 小野道跡の調査

No.	種別	出土地点		流量 (cm)			成 形・調 整・その他	陶器部：地味 土師質：打込油灰	陶器部：釉薬・灰釉 土師質：色調	備 考
		区	区	区	区	区				
280	土師質土器	F12	SE01	(10.0)	-	-	惣成形 (口) 押しナメナテ抜く? 内) ナテ	内) 内) 黒油灰	10Y15/7 にぶい黄緑	U3期
281	陶器 模様	F12	SE01	0	-	(12)	口ワの成形 内) 回転ナテ 内) 回転ナテ	模範	無釉	器口：1層目赤土以上 白土質
282	陶器 模様	F12	SE04	-	-	(37)	口ワの成形 内) 回転ナテ 内) 回転ナテ	模範	自然釉	器口：1層目赤土以上 白土質
283	陶器 模様	F12	SE04	-	-	(11)	口ワの成形 内) 回転ナテ 内) 回転ナテ	模範	無釉	器口：1層目赤土以上 白土質
284	磁器 小杯	G16	SE05	0.61	(32)	2.5	口ワの成形 器底両面 染付無釉 内) 洗滌 見込) 印花土	龍江・赤土	灰釉	器口：砂目付付着 大塚赤土陶質
285	陶器 模様	G16	SE05	0.270	-	(10)	口ワの成形 内) 回転ナテ 内) 回転ナテ	模範	無釉	器口：幅口2層赤 白土質
286	磁器 小杯	G16	SE05	0.80	-	(32)	口ワの成形 染付 内) 洗滌の意文・樂文 (コンコッタ印刷)	伊方窯	透明釉	大塚方窯
287	陶器 鉢	G16	SE05	0.21	4.0	5.8	口ワの成形 器底両面 高台無釉	京・伊東	透明釉	見込) ビン割口・刷出し
288	土師質土器	H13	SX01	-	-	(1.6)	手づくね (口) 押しナテ 内) 磨面	鏡熱赤あり	10Y15-1陶灰	U2期
289	土師質土器	H13	SX01	(10.0)	-	(21)	手づくね (口) 押しナテ 見込) ナテ 内) 磨面赤ナテ	-	10Y12/2 にぶい黄緑	白釉
290	土師質土器	H13	SX01	-	-	(21)	手づくね (口) 押しナテ 見込) ナテ 内) 磨面赤ナテ	-	10Y18/4-6灰黄	白釉
291	土師質土器	H13	SX01	(11.0)	-	(28)	手づくね (口) 押しナテ 見込) ナテ 内) ナテ	-	10Y18/4-6灰黄	白釉
292	陶器 陶鉢	H13	SX01	0.88 (1)	0.87 (1)	1.04	手づくね ナテ	模範	無釉	木田式江刺窯
293	陶器 鉢	H13	SX01	(22.8)	(92)	95	口ワの成形 内) 回転ナテ 下手ナズリ 高台回転ナテ 内) 回転ナテ	模範	無釉	器口：高台 白土質
294	陶器 白口鉢	H13	SX01	-	-	(11)	口ワの成形 内) 回転ナテ 内) 回転ナテ	模範	無釉	黒土質
295	磁器 瓶	E5	SP130	-	-	(21)	口ワの成形 高台内無釉 器口 内) 磨面土 見込) 灰文・磨面	中国	透明釉	陶瓦黄
296	磁器 瓶	E5	SP130	-	(1.6)	(1.6)	口ワの成形 器底両面 高台付付無釉 染付 内) 磨面土 見込) 十字灰文・磨面	中国	透明釉	器底赤黒 刷出し灰
297	磁器 瓶	E4	SP123	-	-	(1.5)	口ワの成形 染付 内) 磨面 内) ねじ灰文・磨面	中国	透明釉	無釉
298	陶器 内丸瓶	D1	SP109	(0.6)	(6.2)	2.3	口ワの成形 器底両面 高台ナテ	龍江・赤土	灰釉	大塚赤土陶質
299	陶器 軒唐皿	D-35	SP145	(11.2)	-	(21)	口ワの成形	龍江・赤土	灰釉	大塚赤土陶質 内) 磨面土質
300	陶器 皿	D6	SP286	12.0	6.2	2.7	口ワの成形 内) ナテ・磨り 内) ナテ ピン割土	龍江・赤土	灰釉	器底赤土陶質
301	陶器 輪花皿	E-F11	SP528	(13.6)	-	(26)	口ワの成形 器底両面 内) 内) ヘラ磨り	龍江・赤土	灰釉	器底赤土陶質 器口：磨面赤土
302	陶器 天目鉢	F12	SP195	(12.0)	-	(32)	口ワの成形 器底無釉	龍江・赤土	灰釉	大塚赤土陶質
303	陶器 天目鉢	F12	SP193	-	4.0	(25)	口ワの成形 器底両面 高台部無釉	龍江・赤土	灰釉	大塚赤土陶質
304	陶器 瓶	F12	SP196	(11.0)	(6.0)	2.0	口ワの成形 器底両面 全面無釉	龍江・赤土	灰釉	器底赤土陶質
305	陶器 小杯	F12	SP193	(6.0)	(2.6)	4.5	口ワの成形 器底両面 見込) ナズリ 全面無釉	香津	灰釉	大塚白土陶質
306	磁器 瓶	G11	SP386	-	6.0	(3.9)	口ワの成形 器底両面 高台付付内無釉 見込) 印花土・磨面	中国	香釉	無釉
307	陶器 壺	F12	SP194	-	-	(28)	内) 磨ナテ 内) 磨ナテ	模範	無釉	黒土質
308	陶器 壺	F12	SP52	-	-	(5.3)	内) 磨ナテ 内) 磨ナテ	模範	無釉	黒土質
309	陶器 壺	F10	SP507	-	-	(7.7)	粘土練積み上げ 内) ナテ 内) ナテ・磨ナテ	模範	無釉	白土質
310	陶器 壺	F12	SP576	-	-	-	内) ナテ 内) ナテ	模範	自然釉	灰文(一ヤ(1)ま(1)口)
311	陶器 壺	E12	SP570	-	-	-	粘土練積み上げ 内) ナテ ハラ磨り 内) ナテ	模範	無釉	無釉
312	陶器 壺	G11	SP144	-	-	(12)	口ワの成形 内) 回転ナテ 内) 磨ナテ	模範	自然釉	無釉
313	陶器 鉢	F13	SP545	-	-	(8.3)	口ワの成形 内) 回転ナテ ナズリ 内) 回転ナテ	模範	無釉	黒土質
314	陶器 模様	F6	SP163	-	-	(7.3)	口ワの成形 内) 回転ナテ 内) 回転ナテ	模範	無釉	ナズリに磨面付着 赤土質
315	陶器 模様	H13	SP386	-	-	(5.3)	口ワの成形 内) 回転ナテ 内) 回転ナテ	模範	無釉	器口：1層目赤土以上 白土質
316	陶器 模様	D3	SP104	(23.0)	(10.1)	8.2	口ワの成形 内) 回転ナテ 内) 回転ナテ 内) 未調整	模範	無釉	器口：幅口2層赤 白土質
317	陶器 模様	F14	SP574	-	(3.0)	(4.8)	口ワの成形 内) 回転ナテ 縁起こし磨り 内) 回転ナテ	模範	無釉	器口：幅口2層赤 白土質
318	陶器 模様	G11	SP145 SP146	-	(15.0)	(10.1)	口ワの成形 内) 回転ナテ 縁起こし磨り ナズリ 内) 回転ナテ	模範	無釉	器口：幅口2層赤 白土質
319	丸型土器	皿	L10	SP100	-	-	内) (口) 磨ナテ ハラ磨り・磨面 内) ハテ 内) (口) ハテ 磨ナテ	-	2.5YR/28白	特製御朱書
320	土師質土器	皿	F13	SP546	(12.1)	-	手づくね (口) 押しナテ 見込) ナテ 内) 磨面	-	10Y18/28白	C1期
321	土師質土器	皿	F12	SP521	(8.0)	-	手づくね (口) 押しナテ 見込) ナテ 内) 磨面赤ナテ	-	2.5YR/3.5灰黄	白釉

第3節 遺物

No.	種別	出土地点		度量 (cm)			成形・調整その他	陶器部・産地 土師質・打土師質	陶器部・輪文・瓦類 土師質・色塗	備考	
		区	区	口径	高さ	器高					
322	土師質土器	Ⅱ	F12	SP502	87	-	17	字づくね 口内 刻しナゲモノナゲ 作・底 敷線状ノ工具痕	口内 横線	257N-326具	F1類
323	土師質土器	Ⅱ	G12	SP588	-	-	(18)	字づくね 口内 刻しナゲ 底ノ 敷線状・ナゲ	内・外 横・底線	不明	F1類
324	土師質土器	変換	F10	SP508	(94) 総 手巻7 (129)	-	24	惣底形 口内 刻しナゲ 見込 ナゲ 敷線状 作手ノ 刻しナゲナゲ・敷線状	見込 横・底線	10Y108-204白	H10類
325	磁器	Ⅱ	G12	I	(146)	(54)	60	ワケロ成形 間部両面 高台内輪状 見込 横線	中国	青磁輪	
326	磁器	Ⅱ	E33	I	-	-	(44)	見込 縦線	中国	青磁輪	
327	磁器	Ⅱ	H34	Ⅱ	(124)	-	(37)	ワケロ成形	中国	青磁輪	
328	磁器	Ⅱ	G12	I	-	-	(25)	内 横・底線	中国	青磁輪	
329	磁器	Ⅱ	G12	Ⅱ	(136)	-	(46)	内 縦線・底線 見込 横線	中国	青磁輪	
330	磁器	Ⅱ	H13	I	-	(46)	(21)	ワケロ成形 間部両面 高台型口内輪状 見込 印瓦文?	中国	青磁輪	
331	磁器	Ⅱ	G12	I	-	(66)	(18)	ワケロ成形 間部両面 高台内輪状ノ輪紋取り	中国	青磁輪	
332	磁器	Ⅱ	G12	Ⅱ	(118)	-	(19)	内 縦線	中国	青磁輪	龍泉原系
333	磁器	小皿	H4	I	-	(46)	(25)	間部両面 見込 縦線 高台内輪状取り	中国	青磁輪	
334	磁器	Ⅱ	F11	I	-	(46)	(30)	間部両面 高台内輪状ノ輪紋取り	中国	青磁輪	
335	陶器	Ⅱ	D6		(166)	4.6	6.6	ワケロ成形 間部両面 惣付無輪 内 横・底線	伊予型	透明輪	陶師委託 大塚吉則
336	陶器	天目碗	F11	Ⅱ	(120)	-	(48)	ワケロ成形 高脚部無輪	瀬戸・瀬濃	鉄輪	大塚第32期
337	陶器	天目碗	H13	Ⅱ	(120)	-	(56)	ワケロ成形 高脚部無輪	瀬戸・瀬濃	鉄輪	大塚第32期
338	陶器	天目碗	H4	I	(110)	-	(34)	ワケロ成形	瀬戸・瀬濃	鉄輪	大塚第12期
339	磁器	Ⅱ	F10	I	-	28	(18)	間部両面 見込 輪文輪状ノ刻取り 内面露出ノ高脚 底線 底線	中国	白磁輪	
340	陶器	平碗	G11	I	-	(52)	(11)	ワケロ成形 間部両面	瀬戸・瀬濃	鉄輪	大塚期前半
341	磁器	Ⅱ	G10	Ⅱ	(88)	-	(23)	ワケロ成形 内 縦線・底線 見込 印瓦文 見込 輪文 横線・底線	中国	透明輪	
342	陶器	Ⅱ	G12	Ⅱ	-	4.8	(24)	ワケロ成形 間部両面 高台無輪	伊予	鉄輪	粘土目取あり 大塚1期
343	陶器	丸皿	D5	Ⅱ	(106)	(6.4)	2.6	ワケロ成形 間部両面	瀬戸・瀬濃	鉄輪	大塚第32期
344	陶器	内丸皿	D5	I	(100)	(5.6)	2.2	ワケロ成形 底部両面 内ノ 輪ノナゲ	瀬戸・瀬濃	鉄輪	大塚第22期後半半 32期
345	陶器	Ⅱ	G10	I	-	6.6	(12)	ワケロ成形 間部両面 見込 印瓦文	瀬戸・瀬濃	鉄輪	大塚12期
346	陶器	野皿	H3	トレンテ	-	(50)	(13)	ワケロ成形 内ノ 縦線	瀬戸・瀬濃	鉄輪?	吉原口
347	陶器	内丸皿	G11	I	-	4.8	(6)	ワケロ成形 見込 輪紋 輪ノナゲ 高ノナゲ 内ノ 輪ノナゲ	瀬戸・瀬濃	鉄輪	大塚期
348	陶器	輪文皿	D6		13.4	7.8	2.1	惣底形 刻し 刻線へノ取り 高台型口内ナゲ 高台無輪	瀬戸・瀬濃	鉄輪・鉄輪	伊勢第2期
349	磁器	Ⅱ	E-F14	I	12.4	4.6	3.5	ワケロ成形 間部両面 惣付無輪 見込 輪ノナゲ 内ノ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 内ノ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ	伊予型	透明輪	見込ノ底線地ノ地あり 大塚1期
350	陶器	唐磁器	E5	Ⅱ	(13.0)	(5.6)	3.1	ワケロ成形 底部両面 高台無輪	伊予	鉄輪	見込ノ底線内ノ砂目 地あり 大塚吉則
351	磁器	磁器	M1-5	I	(166)	輪4.1	3.5	ワケロ成形 間部両面 惣付無輪 見込 輪ノナゲ 内ノ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ	伊予型	透明輪	大塚1期
352	陶器	打明 受輪	D6	Ⅱ	(132)	-	17	ワケロ成形 内面ノみ無輪ノ内面ノ無輪 内ノ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ	伊予	鉄輪	口内刻し印文取付者 見込ノ底線あり
353	陶器	打明 受輪	L5	Ⅱ	8.6	3.4	1.6	ワケロ成形 内ノ 縦線 内ノ 縦線 内ノ 縦線	伊予	透明輪	輪底径5.6cm 切り欠きあり
354	磁器	小杯	E13	I	6.4	2.5	2.5	ワケロ成形 間部両面 惣付無輪 輪ノナゲ 内ノ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ	伊予型	透明輪	長瀬口 大塚吉則
355	磁器	丸底皿	D6	Ⅱ	8(2)	-	(76)	ワケロ成形 内面ノみ無輪ノ内面ノ無輪 内ノ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ	伊予型	透明輪	V形?
356	陶器	香炉	G11	I	(11.0)	5.2	6.2	ワケロ成形 間部両面 底部ノ高脚ノ 内ノ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ	伊予	鉄輪	見込ノトナゲ地あり 大塚吉則
357	陶器	香炉	D6	Ⅱ	(7.4)	(4.0)	5.3	ワケロ成形 間部両面 高台無輪	伊予	鉄輪	見込ノ白磁地 大塚吉則
358	磁器	Ⅱ	F15	I	(56)	-	(34)	ワケロ成形	伊予型	透明輪	
359	磁器	Ⅱ	D5	Ⅱ	-	(38)	(62)	ワケロ成形 間部両面 惣付無輪 輪ノナゲ 内面ノ無輪	伊予型	透明輪	底線?
360	磁器	Ⅱ	長土師子		-	-	(92)	ワケロ成形 惣付 内面ノ無輪	伊予	透明輪	
361	陶器	飯器	H13	Ⅱ	残高 (2.0)	残高 (3.2)	輪 -	ナゲノ成形 内ノ ナゲノ成形 内ノ 輪ノナゲ 輪ノナゲ 輪ノナゲ	瀬戸・瀬濃	鉄輪・鉄輪	伊勢第22期後半半 32期
362	陶器	底丸皿	G3	Ⅱ	(92)	-	(88)	ワケロ成形 惣付 粘土師胎取付	瀬戸・瀬濃	鉄輪・底丸輪	伊勢第22期後半半 32期

第3章 小野道跡の調査

No.	種別	出土地点 区	法量 (g)			成形・調整その他	陶器部・産地 土師器(打止遺物)	陶器部・輪文・瓦類 土師器・色土	備考	
			口徑	底徑	器高					
263	磁器	本流	G14	1	85.2 103 (32)	33	惣付ら成形 内) ナメ+春日旗 底) 春日旗 保存 内) 敷け底し 底) 春日旗	伊方窯	透明釉	一帯内のみ無縁 大塚V3期
264	陶器	土溝	D5	2	(156)	72	ロタロ成形 底) 回転ヘリ取り 手取下半から底面無縁 底) 手取上げ	伊方窯	無釉	
265	土師器 土師	溝	F12	1	74	-	手づくね 内) 回転ナメ 見込) ナメ 底) 指頭底+ナメ	-	25YR/2R白	D期
266	土師器 土師	溝	H13	2	-	(26)	手づくね 内) 回転ナメ 見込) ナメ 底) ナメ	-	7.5YR/6(Y)白い硝	D期
267	土師器 土師	溝	F10	1	84	-	手づくね 内) 回転ナメ 見込) 一方内のみナメ 内) 指頭底 底) ナメ	(内)見込) 指底	7.5YR/6(Y)黄褐色	E期
268	土師器 土師	溝	G12	1	84	-	手づくね 内) 回転ナメ 見込) ナメ 内) 指頭底	(内) 無釉	10YR/8-3(Y)黄褐色	E期
269	土師器 土師	溝	H14	1	104	-	手づくね 内) 回転ナメ 見込) ナメ 内) 指頭底 底) 土器によるナメ	(内) 無釉	10YR/8-2(Y)白	F1期
270	土師器 土師	溝	F12	2	(88)	-	惣成形 内) 回転ナメ 見込) 不明 内) 指頭底 底) 敷底	(内) 黄い硝	7.5YR/7-6(Y)	III期
271	土師器 土師	溝	G10	1	(82)	-	惣成形 内) 回転ナメ 見込) 一方内のみナメ 内) 指頭底 底) 敷底	(内) 無釉	10YR/8-3(Y)黄褐色	III期
272	土師器 土師	溝	G11	1	(110)	(49)	ロタロ 内) 回転ナメ 内) 回転ナメ 底) 回転赤取り	(内)見込) 黄い硝	10YR/7-2 に白い黄褐色	L期
273	土師器 土師	溝	I12	1	98	55	ロタロ 内) 回転ナメ 内) 回転ナメ 底) 回転赤取り	(内)内) 黄い硝	10YR/7-4 に白い黄褐色	L期
274	瓦器 土師	溝	H13	2下	-	-	内) ナメ+指頭底 内) ナメ	-	2.5YR/1R白	内面黄白帯
275	土製品 土人形	S8	1				惣成形 内) 指頭底	-	10YR/8-3(Y)黄褐色	黄白色
276	土製品 土人形	F2	2		87.6	86.5	惣成形 心線あり 彩色?	-	7.5YR/6(Y)白い硝	女性形像 形制により履行層
277	陶器	溝	F12	1	-	(19)	内) 横ナメ 内) 横ナメ	横底	無釉	E2期
278	陶器	溝	H14	溝	-	(65)	内) 横ナメ 内) 横ナメ	横底	無釉	E2期
279	陶器	溝	F11	1	-	(55)	内) 横ナメ 内) 横ナメ	横底	無釉	F1期
280	陶器	溝	F12	1	-	(53)	内) 横ナメ 内) 横ナメ	横底	無釉	E2期
281	陶器	溝	H5	2	-	(63)	内) 横ナメ 内) 横ナメ	横底	無釉	F1期
282	陶器	溝	E12	1	-	(40)	内) 横ナメ 内) 横ナメ	横底	無釉	F2期
283	陶器	溝	G14	1	-	(42)	内) 横ナメ 内) 横ナメ	横底	自然釉	F2期
284	陶器	溝	H12	1	-	(49)	内) 横ナメ 内) 横ナメ	横底	自然釉	F2期
285	陶器	溝	E16	1	-	(51)	内) 横ナメ 内) 横ナメ	横底	無釉	V2期
286	陶器	溝	E13	1	-	(54)	内) 横ナメ 内) 横ナメ	横底	無釉	V3期
287	陶器	溝	F12	1	-	(32)	粘土線積み上げ 内) ナメ、ヘラによる線き上げ 内) ナメ+指頭底	横底	自然釉	ヘラ記号 V3期
288	陶器	溝	F2	2	(164)	(96)	粘土線積み上げ 内) ナメ 内) 横ナメ	横底	自然釉	V2-3期
289	陶器	溝	H14	1	(150)	-	ロタロ成形 内) 回転ナメ 内) 回転ナメ	横底	黄泥・自然釉	V2-3期
290	陶器	溝	D6	2	(270)	-	粘土線積み上げ 内) ナメ 内) ナメ+指頭底	横底	黄泥	E2期
291	陶器	溝	S6	2	(80)	(122)	粘土線積み上げ 内) ナメ 内) ナメ+指頭底 底) 本調査	横底	内)内) 黄泥・自然釉	ヘラ記号
292	陶器	溝	E3	1	(56)	-	内) ナメ 内) ナメ	横底	自然釉	内面(少量あり) 表面黄
293	陶器	溝	I13	1	-	(86)	粘土線積み上げ 内) ナメ 内) ナメ+指頭底 底) 本調査	横底	内)内)内)下手に 黄泥	お茶天台
294	陶器	溝	F5	1	(138)	-	ロタロ成形 内) 回転ナメ 底) 粘土線き上げ 内) 回転ナメ+指頭底	横底	黄泥	E2期
295	陶器	溝	E14	1	(134)	-	ロタロ成形 内) 回転ナメ 内) 回転ナメ	横底	黄泥	外縁または穴入れ
296	陶器	溝	H13	2	-	-	内) ナメ 内) ナメ	横底	無釉	ヘラ記号
297	陶器	溝	D10	2	-	-	内) ナメ 内) ナメ	横底	無釉	底辺 凹字「冪」
298	陶器	溝	H14	1	-	-	内) ナメ 内) ナメ	横底	無釉	底辺
299	陶器	溝	I12	1	-	-	内) ナメ 内) ナメ	横底	無釉	底辺
300	陶器	溝	H13	2下	-	(58)	ロタロ成形 内) 回転ナメ 内) 回転ナメ	横底	無釉	E2期
301	陶器	溝	H13	2下	-	(76)	ロタロ成形 内) 回転ナメ 内) 回転ナメ	横底	無釉	E1-2期
302	陶器	溝	G12	1	-	(65)	ロタロ成形 内) 回転ナメ 内) 回転ナメ	横底	無釉	底) 粘土質の厚みあり
303	陶器	溝	G12	1	-	(72)	ロタロ成形 内) 回転ナメ 内) 回転ナメ	横底	無釉	F1期
304	陶器	溝	G12	1	-	(47)	ロタロ成形 内) 回転ナメ 内) 回転ナメ	横底	無釉	F1期

第3節 遺物

No.	種別	出土地点		法量 (cm)		成形調査-その他	陶器部・産地 土師質(打志焼)	陶器部・産地 土師質・色調	備考	
		区	区外層 遺構	口径	高さ					器底
405	陶器 甕鉢	F12	Ⅰ	-	-	(7.2)	ワタロ成形 内) 同軸ナゲ	横前	無釉	標目：1層位10cm以上 存在
406	陶器 鉢	H13	Ⅱ	-	-	(9.5)	ワタロ成形 内) 同軸ナゲ	横前	渋泥	見3期
407	陶器 甕鉢	H11	Ⅰ	1260	-	(7.7)	ワタロ成形 内) 同軸ナゲ	横前	無釉	標目：幅1.0cm 見3期
408	陶器 鉢	表土直上	-	(12.6)	(5.7)		ワタロ成形 内) カマシ 高台) 同軸ナゲ 底) 高台同軸ナゲ 表) 高台同軸ナゲ	横前	無釉	見3期
409	陶器 甕鉢	G10	Ⅱ	-	-	(7.4)	ワタロ成形 内) ヘラキキ上げ 底) 本調整 脚周付付 内) 同軸ナゲ	横前	無釉	標目あり 脚目周付存在
410	陶器 鉢	H4	Ⅱ上	1222	1130	10.5	ワタロ成形 内) 同軸ナゲ	横前	渋泥	見3期
411	陶器 甕鉢	H4	トレンチ	1320	1160	12.2	ワタロ成形 内) 同軸ナゲ	横前	無釉	標目：幅1.5cm 見3期
412	陶器 甕鉢	D6	Ⅱ	980	(12.2)	20.5	ワタロ成形 内) 同軸ナゲ	横前	無釉	標目：幅2.0cm 見3期
413	陶器 甕鉢	G13	Ⅰ	1360	-	(10.0)	ワタロ成形 内) 同軸ナゲ	横前	無釉	標目：幅2.0cm 見3期
414	陶器 片鉢	H13	Ⅰ	(190)	(11.4)	-	ワタロ成形 内) 同軸ナゲ 底) 無釉 底面) 敷瓦直 底) 脚周付付 内) 同軸ナゲ	横前	木灰釉	破片を指定範囲
415	陶器 甕鉢	D5	Ⅰ	(120)	(11.0)	6.4	ワタロ成形 内) 同軸ナゲ	横前?	渋泥	底面焼結する
416	陶器 甕鉢	D6	Ⅰ	(160)	(11.6)	6.7	ワタロ成形 内) 同軸ナゲ	横前?	渋泥・自然釉	
417	陶器 円縁 ビン	G10	Ⅰ	長193.7 幅193.3 器高138			上面扁平部) 転倒付 脚周) ナゲ 先周縁部付付 手取り後軌) 面取り	不明	無付着	
418	陶器 円縁 ビン	F10	Ⅰ	長193.5 幅193.2 器高130			上面扁平部) 転倒付 脚周) ナゲ 先周縁部付付 手取り後軌) 面取り	不明	無付着	先周縁部付
419	陶器 広口鉢	H13	Ⅱ下	-	-	-	転土縁部み上げ 内) ナゲ	内) 器ナゲ-器底面	楽透	自然釉

第3表 行火観察表 (第44図)

() は残存値

No.	種別	出土地点		法量 (cm)			石材	調査・備考
		区	区外層 遺構	幅	奥行	高さ		
1	蓋	F14	Ⅰ	(17.8)	(20.7)	(6.0)	凝灰岩	前面形は横四形を呈す
2	蓋	G2	SD08土層	(15.2)	(17.2)	(4.1)	凝灰岩	前面形は横四形を呈す
3	蓋	E11	Ⅰ	(11.3)	(12.1)	(3.1)	凝灰岩	前面形は隅丸方形を呈す
4	蓋	G10	Ⅱ	(15.9)	(11.0)	(3.1)	凝灰岩	前面形は隅丸方形を呈す
5	蓋	H12	SP309	(15.0)	(16.1)	(3.7)	凝灰岩	前面形は口形を呈す
6	蓋	D42	Ⅰ	(15.6)	(9.1)	(4.0)	凝灰岩	前面形は不明
7	蓋	F11	SK81	(12.3)	(11.0)	(3.7)	凝灰岩	前面形は不明
8	身	D3	Ⅰ	(14.9)	(3.3)	(6.6)	凝灰岩	前面形は横四形を呈す
9	身	F12	Ⅰ	(14.0)	(16.8)	(3.5)	凝灰岩	前面形は横四形を呈す
10	身	G2	SD08	(16.2)	(21.8)	(5.1)	凝灰岩	前面形は横四形を呈す
11	身	D4	SK13	(13.2)	(18.3)	16.2	凝灰岩	前面形は口形を呈す
12	身	F11	SP502	-	(10.0)	(9.9)	凝灰岩	前面形は口形を呈す
13	身	G10	SK106	18.9	12.9	(13.5)	凝灰岩	前面形は台形を呈す 手取り形

第4表 石臼観察表 (第45・46図)

() は残存値

No.	種別	出土地点		法量 (cm)			石材	調査・備考
		区	区外層 遺構	径	厚	総高		
1	上 石	F14	SP505	37.8	8.9	1.6	凝灰岩	標面分画数不明 距離6-10cm 後手手取あり
2	上 石	F10	SK07	(30.0)	(8.5)	2.6	花崗岩	標面分画数不明 距離6-10cm 焼結する
3	上 石	H13	Ⅱ上	-	(10.6)	2.5	凝灰岩	標面分画数不明 焼結する
4	上 石	E5	SP107	(26.0)	(7.3)	2.5	緑色凝灰岩	標面分画のため分画数不明 焼結する
5	上 石	D42	SK09	(31.2)	(8.6)	1.8	花崗岩	標面分画数不明 距離6-10cm
6	上 石	F11	Ⅰ	(28.2)	(9.3)	1.5	花崗岩	標面分画数不明 距離6-10cm 焼結する
7	上 石	F12	SK04	-	(9.1)	2.7	凝灰岩	標面分画のため分画数不明
8	下 石	H13	Ⅰ	(31.0)	(9.9)	-	凝灰岩	標面分画数不明 距離6-10cm 焼結する
9	下 石	E4	SP118	31.8	(9.3)	-	緑色凝灰岩	標面分画数不明 底面中央に溝付着
10	下 石	F10	SK07	(31.0)	(9.0)	-	緑色凝灰岩	標面分画数不明 焼結する

第3章 小野道跡の調査

第5表 砥石・視観察表 (第47図)

() は残存値

No.	種別	出土地点		法量 (cm)			石材	調査・備考
		区	法名/層位	幅	奥行/厚	高さ/厚		
1	砥石	D5	I	21.4	6.9	3.1	凝灰岩	中砥石 横切面2面 上下両面は12°半角の切込み 表面は粗い彫刻状 1面
2	砥石	K8	I	(12.1)	6.1	3.0	砂岩	縦砥石 横切面2面 1側面と上面は粗い彫刻状 1面
3	砥石	F11	SK03 層下層	(12.6)	4.2	1.8	粘板岩	仕上げ砥石 使用面2面 表面・側面は砥石により半角に彫刻される 2面
4	砥石	G11	I	13.9	3.8	1.1	粘板岩	仕上げ砥石 使用面2面2面 表面・側面は砥石により半角に彫刻される 2面
5	砥石	H3	II	10.3	4.7	2.3	凝灰岩	中砥石 横切面2面 径5.5cmの穿孔あり 表面あり 2面
6	砥石	E2	トレンチ	9.6	4.2	4.1	砂岩	縦砥石 横切面2面 表面・下面は粗い彫刻 上面は平滑に彫刻 2面
7	砥石	E16	I	(4.7)	3.9	0.9	泥岩	仕上げ砥石 使用面2面2面 表面は磨り切り痕と砥石痕 表面あり 2面
8	砥石	E5	SK27	5.8	4.1	1.9	砂岩	縦砥石 使用面2面 両面と1側面は粗い彫刻 2面
9	砥石	16	I	5.8	3.7	0.7	粘板岩	仕上げ砥石 使用面2面2面 欠損は砥石痕と平滑に彫刻 表面あり 2面
10	砥石	H13	Ⅱ下	(11.1)	2.9	2.3	粘板岩	仕上げ砥石 使用面1面 表面磨り切り痕 側面・後面は砥石により平滑に彫刻される 2面
11	砥石	H12	I	(8.0)	3.1	0.9	泥岩	仕上げ砥石 使用面1面 表面は彫刻のみ 表面は磨り切り痕あり 2面
12	砥石	H13	I	(7.0)	2.5	1.6	粘板岩	仕上げ砥石 使用面1面 縦を軸用 左側面に切削中の痕あり 左側面磨り切り痕 2面
13	砥石	F11	I	(8.2)	(2.6)	1.2	泥岩	仕上げ砥石 使用面2面2面 長軸方向に欠損 表面あり
14	砥石	F4	I	(3.5)	(2.4)	0.8	泥岩	仕上げ砥石 使用面2面2面 表面・後面は磨り切り痕と砥石痕 表面あり
15	砥	H14	I	(9.6)	(3.7)	1.5	泥岩	大きく欠損する 表面は欠けられる
16	砥	M1-5	I	15.4	7.3	2.2	粘板岩	平面形は長方形を呈す 表面は欠けられる
17	砥	G10	I	(13.7)	6.6	(1.6)	粘板岩	平面形は長方形を呈す 表面は平滑となる
18	砥	F15	I	(11.8)	7.7	(1.9)	泥岩	平面形は長方形を呈す 幅13cmの狭半角を呈す

第6表 その他の石製品観察表 (第46図)

() は残存値

No.	種別	出土地点		法量 (cm)			石材	調査・備考
		区	法名/層位	幅/径	奥行/径	高さ/厚		
11	盤	F11	I	—	—	12.1	凝灰岩	平面形は長方形を呈す 内面磨削する
12	盤	D3	I	(12.1)	(5.4)	7.7	緑色凝灰岩	平面形は長方形を呈す 内面に仕切りあり 赤印として使用小
13	盤	I3	I	(9.0)	(6.3)	5.6	緑色凝灰岩	平面形は長方形を呈す 赤印として使用小 断面扁平
14	容器	H12	I	(10.3)	(8.0)	(5.4)	凝灰岩	平面形は不明 内面は仕切りあり 開口部残存 縁部に並行沈線あり
15	陶土片	F10	SK27	—	—	(16.2)	凝灰岩	内面に丁字に、内面は粗い彫刻に彫刻する
16	不明石製品	H13	Ⅱ下	直径 5.4	直径 4.7	厚 1.2	凝灰岩	中央部分に径5mmの穿孔、表面・側面は平滑 重量28.0g
17	不明石製品	F1	SK03	直径 5.0	直径 4.4	厚 1.4	凝灰岩	中央部分に径5mmの穿孔、表面・側面は平滑 磨り切り痕あり 重量31.0g
18	支脚状製品	G2	SK08	幅 4.1	奥行 6.7	高 8.6	不明	全面に傷が付する 断面形は逆三角形を呈す
19	支脚状製品	F10	SK21	幅 3.9	奥行 (5.6)	高 (8.9)	凝灰岩	基部に傷が付する 断面形は逆三角形を呈す

第7表 漆器観察表 (第48図)

() は復元・残存値

No.	器種	出土地点		法量 (cm)				上 部			漆 粉			備 考
		区	法名/層位	径	底径	器高	高内径	内 面	外 面	位 置	文 様	色		
1	瓶	H13	SK79	—	(6.8)	(4.8)	0.7	赤	黒	外 面	不明	赤	計帳に相当	
2	瓶	H13	Ⅱ上	(39.1)	—	(3.1)	—	赤	黒	外 面	植物?	赤	高台を欠く 口縁部残	
3	瓶	E15	I	(12.2)	(6.4)	4.4	0.4	赤	黒	外 面	不明	赤	器付部残	
4	瓶	H12	I	(11.0)	—	(3.8)	—	赤	黒	外 面	—	—	高台を欠く	
5	瓶	G11	SK79	(11.8)	6.0	7.8	1.6	黒	黒	高内面	丸?	赤		
6	瓶	G10	Ⅱ	—	(5.8)	(5.1)	1.5	黒	黒	高内面	不明	赤		
7	陶器	G11	SK79	11.2	5.0	2.5	0.8	黒	黒	高内面	丸?	赤		

第8表 木製品観察表 (第48回)

() は復元・残存値

No.	部 種	出土地点		法 量 (cm)			備 考
		区	位置層 遺 物	径	内径	厚さ	
8	蓋	H13	SK76	長さ 21.6)	幅 0.8	厚 0.7	片口蓋
9	蓋	H13	SK78	長さ 19.2)	幅 0.7	厚 0.6	片口蓋に相当
10	蓋	H13	SK78	長さ 18.6)	幅 0.9	厚 0.6	片口蓋に相当
11	蓋	H13	SK78	長さ 17.5)	幅 0.6	厚 0.5	片口蓋
12	蓋	H13	SK78	長さ 16.0)	幅 0.6	厚 0.6	
13	蓋	H13	SK78	長さ 12.9)	幅 0.7	厚 0.5	
14	加工板材	不 明		長さ 35.7)	幅 4.5	厚 0.9	長径2.5cmのはたきあり
15	加工板材	F11	SK82	長さ 22.3)	幅 7.7	厚 1.7	面下方が傾斜となる 断面面取りされる
16	加工板材	F11	SK82	長さ 16.6)	幅 (4.0)	厚 0.8	片側と一端面に漆塗料 貫通孔2ヶ所、未貫通1ヶ所、穴径1.5mm
17	漆 塗	G10	SK106	径 16.6)	器高 17.0)		縦断により部分的に硬化 内面に漆状のもの塗布あり、断面に埋め込まれる 漆入穴
18	底 板	H13	下 下	径 15.0)		厚 1.0	木釘1ヶ所埋設
19	底 板	M7	SK52	径 12.5)		厚 1.6	断面は丁字状採取
20	加工板材	H13	SK78	長さ 32.9	径 1.1~1.2		断面から約2cmの位置に長径3mmの貫通孔を2ヶ所穿つ
21	加工板材	G8	SD1	長さ 17.9	幅 5.8)	厚 1.1	三角形 両端面に径10~13.5mmの木釘穴が穿つてある 約長の傾斜
22	加工板材	G8	SD1	残存部幅 13.9	高 (11.8)	厚 1.1	木釘穴4ヶ所残存 片側2所は穿孔孔のみ 約長の傾斜
23	加工板材	G8	SD1	幅 16.2	奥行 (11.1)	厚 1.2	一辺2cmの方形の木釘穴4ヶ所残存 幅約1cmの板との組み合わせあり 約長の傾斜
24	下 板	F11	SK107	長さ 21.9)	幅 8.5	厚 2.0	下 下板 白漆に加工跡

第9表 金属製品観察表 (第49回)

No.	部 種	出土地点		法 量 (cm)			備 考				
		区	位置層 遺 物	径	幅	厚					
1	底 丁	F12	SD1(痕跡)	長 30.4	幅 19.9	厚 5.5	厚部厚 0.15	傾斜 2.8	納厚 2.1	鉄 表面外周 丹こぼれあり	
2	底 丁	F10	SK01	高 33.5	幅 15.6	厚部厚 0.4				鉄 丹こぼれあり	
3	底 丁	F10	SK81	残長 10.4	幅 5.4	厚部厚 0.35				鉄 欠損	
4	鍍金・銅口	E.3	SD3	長 5.7	幅 1.0	厚 0.5				銅	
5	鍍金・銅口	H3	SD30	残長 3.8	幅 1.2					銅 鍍金片残存	
6	底 丁	H13	SD38	長 8.15	幅 0.7	厚部厚 0.4				厚 0.4	銅
7	底 丁	H13	1	長 33.3	幅 12.7	厚 11.9				厚 0.1	銅

第10表 銭貨・貨幣観察表 (第50回)

() は残存値

No.	銭 文	出土地点		法 量 (mm-g)					年 代	備 考	出 所
		区	位置層 遺 物	径	内径	方孔径	厚さ	重量			
一	唐元通寶	H12	1	2.69	2.00	0.70	0.12	2.83	唐 62		銅
1	唐元通寶	H13	SK01	2.43	1.96	0.67	0.09	2.23	唐 621		銅
2	唐元通寶	H13	SD40上層	2.40	1.95	0.69	0.10	2.81	唐 621		銅
3	唐元通寶	H13	SD40上層	2.46	2.03	0.66	0.13	3.61	唐 621		銅
4	唐開元通寶	G11	SK02	2.39	1.96	0.59	0.10	2.13	唐 唐 959		銅
5	唐乾元通寶	G11	SK02	2.46	1.81	0.59	0.13	3.16	北 宋 990		行 表
6	天聖元通寶	H13	SD40上層	2.53	2.07	0.68	0.10	3.38	北 宋 1023		真 表
7	明道元通寶	H13	SD40上層	2.68	2.06	0.70	0.11	3.74	北 宋 1032		真 表
8	景德元通寶	H13	SD40上層	2.68	2.19	0.65	0.11	3.49	北 宋 1034		真 表
9	皇祐元通寶	H13	SD40上層	2.50	2.00	0.64	0.11	3.72	北 宋 1038		真 表
10	皇祐元通寶	H13	SD40上層	2.48	1.97	0.66	0.13	3.62	北 宋 1038		真 表
11	皇祐元通寶	H13	SD40上層	2.58	2.00	0.73	0.11	3.02	北 宋 1038		真 表

第3章 小野道路の調査

No.	観文	出土地点		法量 (mg)					出土時期	備考	备注
		区	区名称	径	内径	方孔径	厚さ	重量			
12	藤末遺篋	H13	SD10上層	250	200	077	030	328	北 宋 1038		銅
13	藤末遺篋	H13	SD10上層	214	200	069	011	291	北 宋 1066		銅
14	藤末遺篋	K7	I	225	186	066	030	188	北 宋 1068		銅
15	元龜遺篋	H13	ⅡF	249	195	079	012	333	北 宋 1078		銅
16	元龜遺篋	H13	SD10上層	245	201	069	030	262	北 宋 1079		行 書
17	元龜遺篋	G11	SM2	247	205	065	011	346	北 宋 1086		銅
18	元龜遺篋	H13	SD10上層	243	198	070	013	418	北 宋 1086		銅
19	元龜遺篋	H13	SD10上層	248	181	059	011	368	北 宋 1086		行 書
20	相野元篋	H13	SD10上層	245	188	068	012	373	北 宋 1094		行 書
21	相野遺篋	H13	SD10上層	246	211	066	030	240	北 宋 1111		分 明
22	水原遺篋	耕 土		252	214	056	031	(223)	明 1498		欠 損
23	粟水遺篋	F3	Ⅱ	242	198	059	009	292	日 本 1636		古 銭 水
24	粟水遺篋	F8	I	241	194	059	011	330	日 本 1636		古 銭 水
—	粟水遺篋	F36	I	(240)	(197)	(063)	012	351	日 本 1636	古 銭 水 凹れあり	銅
25	粟水遺篋	H11	I	240	202	060	011	244	日 本 1636		古 銭 水
26	粟水遺篋	J7	I	245	204	058	030	282	日 本 1636		古 銭 水
27	粟水遺篋	J8	I	246	200	057	011	344	日 本 1636		古 銭 水
28	粟水遺篋	M5	I	243	188	068	009	340	日 本 1636		古 銭 水
—	粟水遺篋	—	—	247	199	062	012	250	日 本 1636		古 銭 水
—	粟水遺篋	D4	I	—	—	059	013	(268)	日 本 1668	新 銭 水 背文字「元」	銅
29	粟水遺篋	D3	I	234	201	060	011	316	日 本 1668	新 銭 水 背文字「元」	銅
—	粟水遺篋	F7	I	253	206	062	013	338	日 本 1668	新 銭 水 背文字「元」	銅
30	粟水遺篋	D2	I	234	206	065	030	244	日 本 1668	新 銭 水 背文字「元」	銅
—	粟水遺篋	G4	I	232	199	065	012	289	日 本 1697-1767		新 銭 水
31	粟水遺篋	D4	I	224	183	071	030	211	日 本 1697-1767		新 銭 水
—	粟水遺篋	D5	I	236	190	063	011	211	日 本 1697-1767		新 銭 水
—	粟水遺篋	D3	I	240	193	064	030	275	日 本 1697-1767		新 銭 水
32	粟水遺篋	E5	SP13	236	189	062	030	204	日 本 1697-1767		新 銭 水
33	粟水遺篋	E6	I	224	182	076	030	171	日 本 1697-1767		新 銭 水
—	粟水遺篋	E12	I	229	190	069	011	241	日 本 1697-1767		新 銭 水
34	粟水遺篋	F3	Ⅱ	229	188	067	012	395	日 本 1697-1767		新 銭 水
—	粟水遺篋	F4	SK14	—	—	063	011	—	日 本 1697-1767	新 銭 水 欠 損	銅
—	粟水遺篋	F10	I	233	193	064	030	201	日 本 1697-1767		新 銭 水
35	粟水遺篋	F11	I	243	197	063	030	268	日 本 1697-1767		新 銭 水
36	粟水遺篋	F11	Ⅱ	241	206	073	011	(194)	日 本 1697-1767	粟 水 遺 篋 新 銭 水	銅
37	粟水遺篋	F17	I	233	188	068	030	218	日 本 1697-1767		新 銭 水
38	粟水遺篋	G9	I	227	192	070	030	252	日 本 1697-1767		新 銭 水
—	粟水遺篋	G9	I	232	194	063	030	231	日 本 1697-1767	粟 水 遺 篋 新 銭 水	銅
39	粟水遺篋	G10	I	247	179	068	008	192	日 本 1697-1767		新 銭 水
—	粟水遺篋	H2	I	245	199	059	013	(280)	日 本 1697-1767	粟 水 遺 篋 新 銭 水	銅
—	粟水遺篋	H3	I	229	184	064	030	237	日 本 1697-1767		新 銭 水
—	粟水遺篋	K7	I	234	192	063	030	230	日 本 1697-1767		新 銭 水
—	粟水遺篋	K8	I	245	196	059	012	349	日 本 1697-1767		新 銭 水
40	粟水遺篋	E4	I	227	177	063	030	211	日 本 1739	新 銭 水 背文字「元」	銅

第3節 遺物

No.	観文	出土地点		法量 (log g)					出 土 年 代	編 号	備 考
		区	区名	径	内径	方孔径	厚さ	重量			
—	東水通	G2	I	225	—	066	030	157	日 本 1720	東水通管 新製水 背文字「元」	鉄
41	東水通管	H13	II	228	173	065	032	295	日 本 1097-1207	新製水 背文字「元」	銅
42	東水通管	G59	I	237	138	064	030	189	日 本 1720	新製水	鉄
—	東水通管	H13	I	233	—	065	030	277	日 本 一	不 明	銅
—	東水通口	M6	I	246	136	060	009	(136)	日 本 一	東水通管 新古不明	銅
43	丈入水宝	G10	I	252	206	066	030	(195)	日 本 1863	玉 文 西文銭 13枚	銅
44	丈入水寶	G10	I	256	196	070	008	201	日 本 1863	真 文 西文銭 11枚	銅
45	丈入水宝	K7	I	257	210	069	009	279	日 本 1863	玉 文 西文銭 11枚	銅
46	一分利金	F13	SK10	3160	861.00	厚0.18	—	612	日 本 1714	正徳一分利金?	金
—	新説不徳	D4	SK15	232	—	066	031	(209)	—	—	銅
—	新説不徳	D5	I	—	—	—	—	—	—	—	銅
—	新説不徳	F3	II	251	—	059	—	304	—	鑄のふみ不明	鉄
—	山口元寶	G11	SK02	—	—	—	032	(123)	—	—	銅

第11表 古代の遺物観察表 (第51図)

() は復元・残存値

No.	種 別	出土地点		法 量 (log)			調 査	地 域	期 土	色 調	編 号
		区	区名	径	内径	厚さ					
1	銅部器	坪倉	K3	I	(14.4)	—	2.0	外) 同形ヘラ型ナメ 内) 同形ナメ	真	②	N7-09(白)
2	銅部器	坪倉	K4	■	—	—	(1.4)	外) 同形ヘラ型ナメ 内) 同形ナメ	真	③	2336-28(青)
3	銅部器	坪倉	E8	SP251	—	—	(1.1)	外) 不明 内) 同形ナメ	真	③	N7-09(白)
4	銅部器	坪倉	F11	I	—	—	(2.4)	外) 同形ヘラ型ナメ 内) 同形ナメ	真	④	36-08
5	銅部器	坪倉	H13	II	—	—	(2.4)	外) 同形ヘラ型ナメ 内) 同形ナメ	真	④	36-08
6	銅部器	坪倉	K3	I	(14.0)	—	(1.9)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	⑤	N7-09(白)
7	銅部器	坪倉	K3	I	(13.0)	—	(1.8)	外) 同形ヘラ型ナメ 内) 同形ナメ	真	④	377-19(白)
8	銅部器	坪倉	G11	SP461	—	—	(1.7)	外) 同形ヘラ型ナメ 内) 同形ナメ	真	④	36-08
9	銅部器	無存時	D8	I	(14.0)	(10.4)	3.4	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	不真	③	2338-28(白)
10	銅部器	無存時	E8	■	—	(10.4)	(2.2)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	7336-18
11	銅部器	無存時	E8	SP250	—	(7.4)	(1.1)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	36-08
12	銅部器	無	K4	■	—	(10.0)	(3.6)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	1077-19(白)
13	銅部器	無存時	H13	SK01	—	(9.0)	(2.9)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	やや不真	④	377-19(白)
14	銅部器	無存時	E8	SK21	—	(8.2)	(2.0)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	やや不真	④	377-19(白)
15	銅部器	無存時	G10	I	—	(9.4)	(2.0)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	7336-18
16	銅部器	口縁部	L3	SP411	—	—	(2.5)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	7336-18
17	銅部器	無存時	L3	■	—	—	(3.9)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	375-28
18	銅部器	無存時	L4	■	—	(9.0)	(3.7)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	N7-09(白)
19	銅部器	無存時	F10	■	—	(9.0)	(2.6)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	34-08
20	銅部器	無存時	K3	I	—	(11.0)	(2.4)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	36-08
21	銅部器	無存時	K4	■	—	(9.0)	(1.8)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	36-08
22	銅部器	無存時	G10	■	—	—	(1.8)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	不真	④	376-18
23	銅部器	無存時	H13	■	—	(8.0)	(3.9)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	36-08
24	銅部器	無存時	H13	SD38-39	—	(8.2)	(2.2)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	36-08
25	銅部器	無存時	H4	■	—	(7.8)	(1.4)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	377-19(白)
26	銅部器	無	F10	■	—	—	(2.4)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	7336-18
27	銅部器	無	L3	I	(16.0)	(12.2)	1.8	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	⑤	36-08
28	銅部器	無	F5	SP285	—	—	(2.6)	外) 同形ナメ 内) 同形ナメ	真	④	2336-1 E11-7(青)

第3章 小野道跡の調査

No.	類別	出土地点		経 度 (m)		調査	構成	動土	色 調	備 考			
		区	五右衛門 堀	口径	径長						器高		
29	甌形器	Ⅲ	L19	SP400	-	-	29	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテⅣ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	①	37-09白		
30	甌形器	Ⅲ	G10	SP567	-	-	29	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテⅣ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	①	37-18		
31	甌形器	Ⅲ	G10	SD45	-	-	(14)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテⅣ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	③	37-18		
32	甌形器	Ⅲ	G10	SP566	-	-	(22)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテⅣ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	③	306-100		
33	甌形器	Ⅲ	H2	I	-	-	(12)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテⅣ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	①	36-08		
34	甌形器	Ⅲ	K9	トロンテ	-	-	(17)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテⅣ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	不良	①	378-250白		
35	甌形器	Ⅲ	L9	Ⅱ	-	-	96	(25)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	③	37-09白	
36	甌形器	Ⅲ	K9	トロンテ	-	-	(80)	(24)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテⅣ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	①	37-09白	
37	甌形器	Ⅲ	H1	Ⅲ	-	-	(15)	(32)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテⅣ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	①	739/13	
38	甌形器	Ⅲ	L4	Ⅲ	-	-	(23)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	①	739/7-18白	自然無付着	
39	甌形器	Ⅲ	G10	I	-	-	(17)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	①	36-08		
40	甌形器	Ⅲ	L10	I	-	-	(11)	(22)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	②	737/13	
41	甌形器	Ⅲ	L4	H1	Ⅲ	-	(11)	(30)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテ(無縁)	Ⅲ	③	36-08	
42	甌形器	Ⅲ	J1	Ⅱ	-	-	(10)	(41)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	②	34-08	
43	甌形器	Ⅲ	L4	Ⅲ	-	-	(14)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテⅣ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	③	306-100		
44	甌形器	Ⅲ	D6	Ⅱ	-	-	(30)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	やや 不良	①	737/5-00		
45	甌形器	Ⅲ	表土 前芝		-	-	(13)	(00)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテⅣ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	Ⅲ	①	107/5-18	
46	甌形器	Ⅲ	F11	SK82	-	-	(10)	(43)	Ⅳ) 同取ナテ (内) 同取ナテⅣ) 同取ナテ (内) 同取ナテ	やや 不良	①	377-18白	
47	甌形器	Ⅲ	F11	I	-	-	-	Ⅳ) オナキ残ナテ カキ目 Ⅳ) 同取ナテ 穴て具残	Ⅲ	③	36-08		
48	甌形器	Ⅲ	L4	Ⅲ	-	-	-	Ⅳ) カキ目 (内) 同取ナテ	Ⅲ	①	37-09白		
49	甌形器	Ⅲ	J3	Ⅲ	-	-	-	Ⅳ) オナキ (内) 穴て具残	やや 不良	①	257/7-18白		
50	甌形器	Ⅲ	K4	Ⅱ	-	-	-	Ⅳ) オナキ (内) 穴て具残	Ⅲ	③	737/4-13		
51	甌形器	Ⅲ	J3	I	-	-	-	Ⅳ) オナキ残ナテ (内) 穴て具残	Ⅲ	①	36-08		
52	土師器	Ⅲ	K9	SK76	-	-	(22)	Ⅳ) 不明 (内) 不明	Ⅲ	③-④	107/8-250白		
53	土師器	Ⅲ	F5	SP285	-	-	(27)	Ⅳ) 不明 (内) 同取ナテ	Ⅲ	②	107/8-3穴具残		
54	土師器	Ⅲ	E6	SK24	-	-	(33)	Ⅳ) 同取ナテ(カキ目) Ⅳ) 同取ナテ(カキ目)	Ⅲ	③	107/8-250白		
55	土師器	Ⅲ	F10	SD45	-	-	(24)	Ⅳ) 不明 (内) 同取ナテ	Ⅲ	③	107/8-250白		
56	土師器	Ⅲ	H13	Ⅱ下	-	-	(27)	Ⅳ) 不明 (内) 不明	Ⅲ	①	107/8-3 にひい遺物		
57	土師器	Ⅲ	F4	Ⅲ	-	-	(14)	Ⅳ) 不明 (内) 不明	やや 不良	③	107/8-250白		

六代の遺物観察表中の出土記

甌形器

① 筒形 (H1m以下) を少量含む

② 筒形 (H1m以下) と鉢形 (H1~2m) を少量含む

③ 鉢形 (H1~2m) を少量含む

④ 鉢形 (H1~2m) を少量含む

⑤ 鉢形 (H1~2m) と小石 (H2m以上) を含む

土師器

① 筒形 (H1m以下) を少量含む

② 筒形 (H1m以下) を少量含む

③ 筒形 (H1~2m) を含む

④ 小石 (H2m以上) を含む

第12表 縄文土器観察表 (第52図)

No.	器 材	出土地点		調査	構成	動 土	色 調	備 考
		区	五右衛門 堀					
1	漆 鉢	G12	Ⅱ	無文 非軟竹管	Ⅲ	3m以下の小石を含む	107/8-41.5-100	中期
2	漆 鉢	H3	Ⅱ	有文 沈積	Ⅲ	1~2mの砂粒を含む	107/7-3にひい遺物	前期
3	漆 鉢	G2	SD08	無文	Ⅲ	3m以下の小石を含む	107/7-2にひい遺物	前期
4	漆 鉢	K3	Ⅱ上段	無文 漆痕	Ⅲ	3m以下の小石を含む	257/7-3穴部	前期 純熟

第4章 小野平等遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

1 調査の経緯

今回の調査地は地元では通称「大竹藪」と呼ばれ、調査前はその名の通り竹が密生していた状態であった。第1章で述べたように平成19年度の分布調査において、石積みの塚を2基確認した。これは『白山村史』の記述にある石塚のことでありと推察されたが、1基の頂部には五輪塔の水輪が人為的に積上げられ、周囲には空風輪、火輪が各1点、宝篋印塔片2点が散在していた。この塚の性格、構造や築造時期の問題、他の遺物の有無などを確認するため、そして五輪塔など石塔類の露出から中世墓の存否を確認することを合わせて、平成22年度に試掘調査を行い、新たに北側の山際斜面にて、礫の集積と五輪塔の一部が露出しているのを確認し、次年度に発掘調査を行った。調査面積は750m²である。

2 調査区の地形と層序

調査区は鬼ヶ岳南麓、吉野瀬川によって舌状に形成された小規模な段丘上に位置する(第2図)。その立地から、吉野瀬川が増水する度に水につかったであろうことが窺われる。標高は約91～95mを測る。この小段丘は吉野瀬川を境に、小野遺跡が位置する小段丘と一続きである。小段丘と鬼ヶ岳南麓との傾斜の変換は、北から北東方側は急傾斜をなしており、山肌には岩盤が露出している箇所もあるが、僅かに狭小な段が確認できる箇所でも石塔の露出を確認した。対して北西から西方へは比較的緩やかに傾斜する。西側には約50年前に植林された杉林が広がっており、植林以前は河岸段丘の地形を利用した水田跡が確認でき、不整形な平坦面が段状をなしていた。西北方は標高100mを過ぎた辺りから旧集落の畑地や墓地などに利用された平坦地があり、その平坦地に接するさらに北側の山際には近代以降と考えられる炭窯跡が数基残存する。

小野平等遺跡の層位は大きく三層に分けられる。第Ⅰ層は表土で、黒色土である。第Ⅱ層はにぶい黄褐色～暗褐色を呈し、小礫を含む砂質土である。第Ⅲ層は地山層であるが、山際ではⅡ層の下層に崩落と考える10cm前後の角礫を主体とする層が存在し、ⅢⅠ層とした。ⅢⅡ層は黄色土層で砂質を呈する。

3 遺構と遺物の分布

人為的に礫を積み上げた塚状遺構が2基(SX1・2)、および北側山裾の狭小な平坦面の礫群(SX)を遺構として扱う。SX1・2は近接して存在している。ともに南東方向に面した段上の縁辺に位置している。なお、土坑や溝などの掘り込みは確認していない。

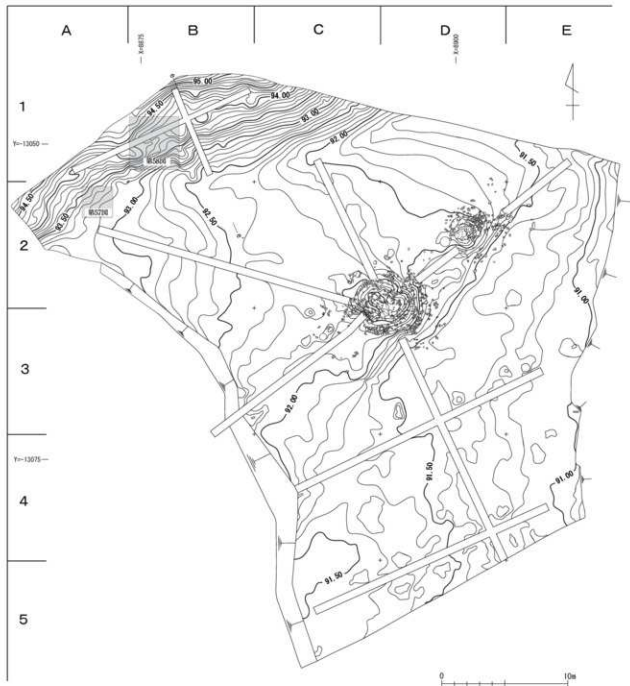
遺物には、石塔として五輪塔の空風輪3点、火輪3点、水輪5点があり、宝篋印塔の笠と基礎の破片各1点がある。その内、平成19・22年度の分布調査と試掘調査で確認したものは計8点である。発掘調査で新たに出土した石塔は5点であり、それらは狭小な平坦面上や礫群(SX)から出土した。その他には越前焼、土師質皿、須恵器などの土器、陶磁器や銭貨がある。中世の越前焼は、各層および礫群中から小破片が出土したが、出土状況としては散漫な印象を受ける。また、少量の須恵器が調査区東側を中心に出土した。

参考文献

白山村史刊行会 1978 『白山村史』

第2節 遺構

SX1(第54図) D2区に位置する。標高91.5~91.8mを測る辺りには北東~南西方向に延びる段状部が存在し、その上段縁辺部にあたり、約7m南西側には**SX2**が位置している。中央には巨大な岩が露出しており、この中央の岩の周囲に拳大から人頭大の角礫を人為的に積み上げたものである。積み方に規則性は見られない。**SX2**と比べると小規模で、少なからず礫が散逸している印象を受ける。礫の集中範囲は長軸約6.0m、短軸は約5.0mに広がり、頂部から段丘上段および下段までの高さは0.8~1.4mを計り、平面形は不整形円形を呈す。周囲の角礫を取り外していき、地上に露出している岩、礫を検出していったが、その過程で角礫および覆土中から遺物は出土していない。この遺構の性格は不明である。



第53図 小野平等遺跡全体図(縮尺1/300)

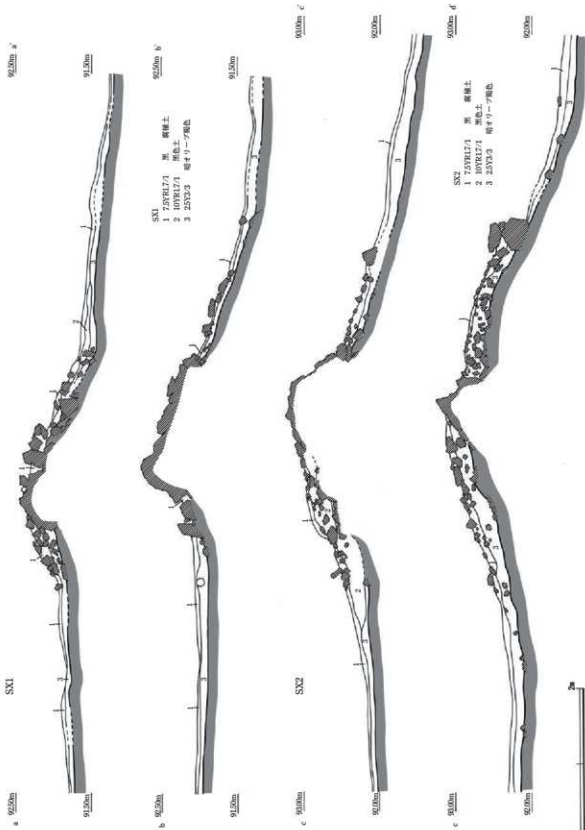
SX2(第54図) C・D 2・3区に位置する。SX1と同じく標高91.5～91.8mを測る北東～南西方向に延びる段状部の上段縁辺部にあたり、拳大～人頭大の角礫を人為的に積み上げた遺構である。掘削前は中央付近には巨大な岩が露出しているものの、多数の礫に覆われており、その一部が垣間見えるのみであった。積み方に規則性は見られない。SX2には角礫の他、少量の川原石が使用されており、五輪塔、宝篋印塔などの石塔片が表面に露出していた。礫の集中範囲は長軸約8.0m、短軸約6.0mに広がり、頂部から段丘上段および下段までの高さは1.1～1.6mを計り、平面形は不整形円形を呈す。掘削に伴い、地山中から突き出す巨大な岩が中央から現れ、本来は自然に露出していた岩を覆うように角礫が積み上げられたことが判明した。角礫および覆土中から石塔片、土師質皿片、磁器片の他、寛永通寶などが出土した。この遺構の性格は不明である。

SX3(第57図) A 2区に位置する。北側は急傾斜をなして尾根の斜面となる。長さ0.2～0.4m程度の礫を配し、長軸1.4m、短軸1.0mを測る集石である。平面形は不整形を呈す。周囲には0.1m大の礫が散漫に存在する。ほとんどの礫がⅠ～Ⅱ層中におさまる。礫の配置に規則性は認められず、礫を取り上げた後には、掘り込みなどの遺構は確認できなかった。性格は不明である。礫の近辺からは近世に属す越前焼の摺鉢片が出土した。

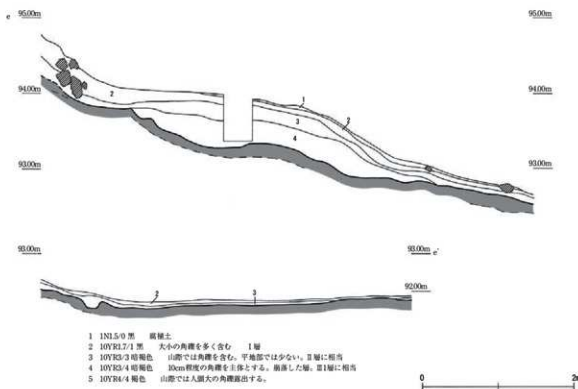
SX4(第58図) B 1区に位置する集石である。試掘時に確認した石塔の周囲を掘削していく過程で、礫の集中する部分を確認した。黒色土中からは五輪塔の火輪(第60図4)と水輪(第60図11)が重なった状態で出土し、近接して空風輪(第60図2)が出土した。水輪の下には地輪が存在しないこと、水輪の上下



第54図 SX1・2平面図(縮尺1/150)



第55図 SX1-2土層図 (縮尺1/50)



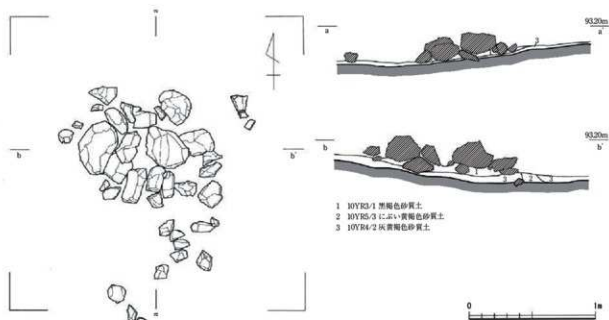
第56図 北側斜面土層図 (縮尺1/50)

が逆であったことなどから、この石塔は本来の位置にあるものではない。また、これらの礫も規則性は認められず、崩落や人為的な移動を受けていると考えられる。礫中から五輪塔の火輪(第60図5)が、礫の下からは欠損した空風輪(第60図3)が出土した。礫を取り上げた後には、掘り込みなどの遺構は確認できなかった。その他、礫および覆土中から越前焼片が出土した。

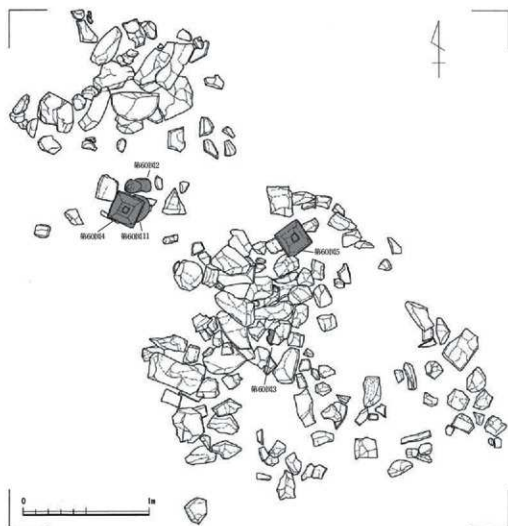
第3節 遺物

1 五輪塔(第60図1～11、第61図、図版第16、第13表)

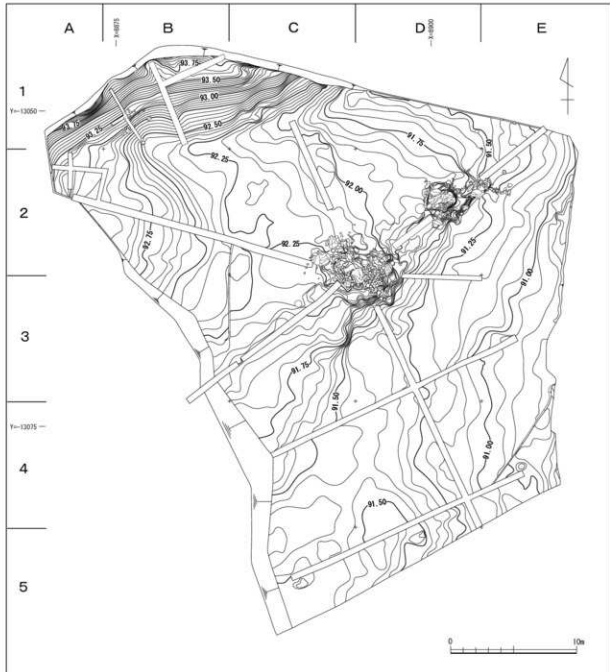
五輪塔は、組み合わせ五輪塔の空風輪が3点、火輪が3点、水輪が5点ある。これら各部位は全て凝灰岩製である。1～3は空風輪で、いずれも空輪と風輪の境は明瞭である。1は大型となるもので、柄部を欠損する。風輪は紡錘状を呈し、稜が下方に下がる。また、空輪と風輪の最大径は近似する。2・3の風輪は扁平な半球状を呈する。3は大部分が欠損しているが風輪の最大径はやや上位に位置する。4～6は火輪である。4と5の器高は低く扁平である。軒をほぼ直線的に作り軒先はやや反る。屋根の傾斜は緩やかである。軒の下面は、4はやや膨らみ、5は平坦となる。5には、後世に分割しようとしたためか擦り切り痕がある。6は器高が高く、屋根の傾斜は急である。軒の幅は広く軒先が曲線を描いて端部が反り上がり、4・5より後出のものとする。7～11は水輪である。7・8・10は最大径が中位に位置する。上面と下面の幅が近似し、正面形は扁平な樽状を呈す。9は最大径が中位よりやや上位に位置し、上面の窪みは深く下面は平坦となる。11は最大径が中位より上位に位置し、正面形は下面に向かってすぼまり、他よりも後出の形状を呈する。上下面の窪みは浅皿状を呈し、他の水輪よりも丁寧な加工が施されている。これら五輪塔の各部位の内、水輪には薬研彫りで梵字が刻まれる。欠損が激しく



第57図 SX3平面図・土層図 (縮尺1/30)



第58図 SX4石塔出土状況図 (縮尺1/30)

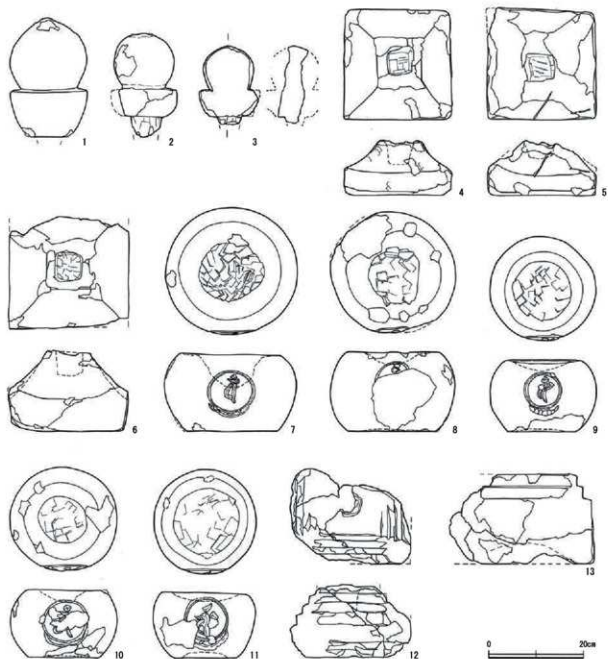


第59図 小野平等遺跡掘削後平面図（縮尺1/300）

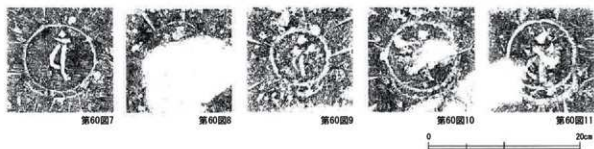
不明瞭なものもあるが、判読可能なものの月輪内には梵字の「パン」を、月輪の下部には簡略化された蓮華座を配する。これらの五輪塔の部材は、程度の差はあるがどれも欠損しており、特に3・5・8の残存状況から判断すると、意図的な破壊を受けた可能性がある。

2 宝篋印塔(第60図12・13、図版第16、第13表)

笠と基礎が各1点出土している。12は笠で、隅飾突起が欠く。13は基礎で、下面に丁寧な加工による窪みを設けている。2点とも破片を接合して形状がようやく把握出来る状態であることから、五輪塔と同じく意図的な破壊を受けたと考える。また、宝篋印塔の石材には五輪塔と違い、いわゆる笏谷石と呼ばれる緑色凝灰岩が使用されており、見た目にも色調の違いが明らかである。この2点は組み合わせざっていた可能性がある。



第60図 石塔実測図 (縮尺1/8)



第61図 水輪拓影 (縮尺1/5)

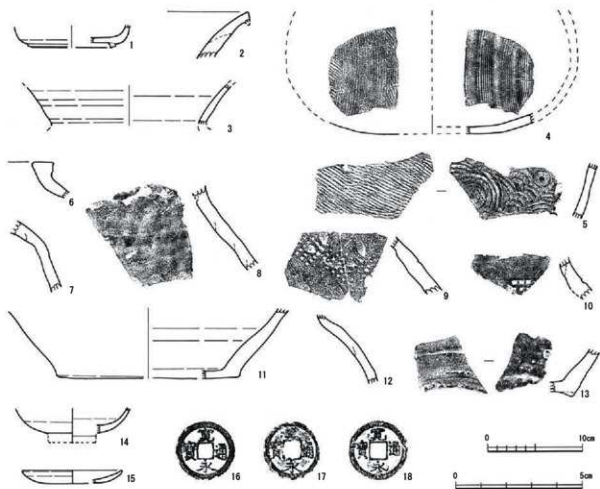
3 土器・陶磁器(第62図1~15、図版第16、第14表)

土器、陶磁器には須恵器、越前焼、青磁、肥前産陶磁器、土師質皿などがあるが、いずれも細片が多く、器形の復元は困難なものが多い。

1~5は須恵器である。1は有台坏で、高台の接地面が外方に開く形態となる。口縁は欠損するが、体部は直線的に立ち上がるものとなる。2・3・5は甕である。5には外面にタタキ痕が、内面には同心円状の当て具痕が残る。4は横瓶の底部と判断した。外面にはカキ目とタタキ痕があり、内面には自然釉が掛かる。6~13は越前焼である。6は甕の口縁部であるが、断面形状や器表面に鉄泥が塗布されていることから、近世初頭に位置づけられるものである。7~10は甕の肩部である。9・10は、正方形を基本とする格子目で構成された押印を施す。9にはさらに扇形状の押印を確認できる。11は甕の底部である。内面には自然釉が掛かる。12は壺の肩部である。13は鉢の底部である。外面にはケズリ調整が施され、断面形が三角形の低い高台が付く。6の甕口縁部以外の越前焼は、器表面の観察から中世に位置づけられると考える。14は青磁碗で、腰部のみの残存である。15は土師質皿で、型成形によるものであることから、近世に位置づけられる。

4 銭貨(第62図16~18、第15表)

銭貨は寛永通寶が3点出土している。銭面に鋳出された文字から判断すると、16は古寛永に、17・18は新寛永に相当する。



第62図 土器・陶磁器実測図、銭貨拓影(縮尺1~15:1/4、16~18:2/3)

第4章 小野平等遺跡の調査

第13表 石塔観察表 (第60図)

() は残存値または復元値

No.	種別	出土地点		法量 (cm)			備考	残存	石塔		
		区	包含層 遺層	幅	高さ	奥行					
1	五輪塔	空鳳輪	試掘	空輪径 16.2 風輪径 16.4	(25.3)	—		ほぼ全欠損する	緑色灰岩		
2	五輪塔	空鳳輪	B1	SK4	空輪径 12.6 風輪径 (13.5)	(22.0)	—	空輪の上縁部は磨耗している	一部欠損する	緑色灰岩	
3	五輪塔	空鳳輪	B1	SK4	(12.6)	(16.6)	—	破片	大きく欠損する	緑色灰岩	
4	五輪塔	六輪	B1	SK4	22.9	11.4	23.2	上面は平穴の深さ14.5cm	風化、部分的に欠損する	緑色灰岩	
5	五輪塔	六輪	B1	SK4	(23.1)	(11.3)	(23.5)	磨り切り痕あり	風化、上部を欠損する	緑色灰岩	
6	五輪塔	六輪	試掘	(25.0)	17.0	(23.8)	—	上面は平穴の深さ14.5cm	大きく欠損する	緑色灰岩	
7	五輪塔	六輪	SK2上部に集積	27.8	16.4	26.9	—	梵字「ハン」 蓮華痕あり	一部欠損する	緑色灰岩	
8	五輪塔	六輪	SK2上部に集積	26.4	16.7	(25.7)	—	梵字、不明	一部欠損する	緑色灰岩	
9	五輪塔	六輪	SK2上部に集積	22.2	15.2	21.9	—	梵字「ハン」 蓮華痕あり	一部欠損する	緑色灰岩	
10	五輪塔	六輪	SK2上部に集積	22.5	14.4	22.0	—	梵字「ハン」か? 蓮華痕あり	一部欠損する	緑色灰岩	
11	五輪塔	六輪	B1	SK4	23.5	14.0	22.0	—	梵字「ハン」 蓮華痕あり	風化、一部欠損する	緑色灰岩
12	宝篋印塔	笠	D3	SK2上面 試掘	(25.5)	(15.4)	(20.1)	—	風化欠損を欠損する	風化・磨耗し、大きく欠損する	緑色緑色灰岩
13	宝篋印塔	蓋	D3	SK2上面 試掘	(26.0)	18.1	(24.2)	—	下面に傷みがある	大きく欠損する	緑色緑色灰岩

第14表 土器・陶磁器観察表 (第62図)

() は残存値

No.	種別	出土地点		法量 (cm)			形状	胎土	色調	調査備考	
		区	包含層 遺層	口径	底径	器高					
1	灰土器	煮白坪	C1	Ⅱ	—	(9.4)	(2.4)	丸	胎土を含む	2.5Y6-1黄灰	内) 凹面ナデ 内) 凹面ナデ
2	灰土器	栗	C4	Ⅱ上	—	—	—	丸	1cm程度の砂粒を含む	2.5Y6-2黄赤	内) 凹面ナデ 内) 凹面ナデ
3	灰土器	栗	C1	Ⅱ	—	—	—	丸	胎土を含む	黄2.5Y7-1土黄 内) 2.5Y7-4土黄	内) 凹ナデ 内) 凹ナデ
4	灰土器	磨灰	試掘	—	—	—	—	丸	胎土を含む	黄2.5Y7-1土黄 内) 2.5Y7-1土黄	内) カキ目・ナデナ 内) カキ目 内面自然釉
5	灰土器	栗	C1	Ⅱ	—	—	—	丸	胎土を含む	2.5Y5-1黄灰	内) ナデナ 内) 穴て具底
6	磨面灰	栗	D2	Ⅱ	—	—	—	丸	胎土を含む	5YR4-2黄赤	丸輪
7	磨面灰	栗	B1	I	—	—	—	丸	1cm程度の砂粒を含む	2.5Y6-3 2.5Y6-1黄赤	
8	磨面灰	栗	試掘	—	—	—	—	丸	砂粒を多く含む	10YR6-3 12Y6-1黄赤	
9	磨面灰	栗	B2	I	—	—	—	丸	胎土を含む	7.5YR5-3(2.5)黄赤	押印文
10	磨面灰	栗	C1	Ⅱ	—	—	—	丸	胎土を含む	7.5YR5-4(1.5)黄赤	押印文
11	磨面灰	栗	B1	I	—	(9.4)	(7.4)	丸	胎	7.5YR4-3黄赤	内面自然釉
12	磨面灰	笠	B1	I	—	—	—	丸	1cm程度の砂粒を含む	10YR5-2(4)黄赤	
13	磨面灰	鉢	B1	I	—	—	—	丸	1cm程度の砂粒を含む	10YR5-1(4)黄赤	内) ナズリ 内) ナデ 内) 黄ナデ
14	青磁	飯	A1	Ⅱ上1層	—	—	(23.0)	丸	胎	2.5Y7-1 明オリーブグ	中間産
15	土師瓦 土師	瓦	C2	I	(10.0)	—	(1.4)	丸	胎	10YR8-3(4)黄赤	内) (内面) まわしナデ 内) ナデ

第15表 銭貨観察表 (第62図)

No.	銭文	出土地点		法量 (mm/g)					初鋳年	銭号	産地
		区	包含層 遺層	径	内径	方孔径	厚さ	重さ			
16	東水滄貨	C2	SK2層土面	23.7	1.86	0.55	0.12	3.00	日本336	古東水	銅
17	東水滄貨	C2	SK2層土面	23.1	1.91	0.60	0.10	2.10	日本340-357	新東水	銅
18	東水滄貨	D4	I	23.0	1.88	0.66	0.09	1.81	日本340-357	新東水	銅

第5章 まとめ

第1節 小野遺跡について

1 古代について

今回の調査の契機となったのは、古代の遺物である。調査でも遺物は出土したが、確実な遺構を把握し難く、遺跡の性格を明確にすることはできなかった。小野遺跡における遺物の出土については、府中(旧武生市)南部が古代以降に開発が進んだとの指摘⁽¹⁾を踏まえ、寺院的な要素が確認された越前市大垣向山遺跡をはじめとする府中南部の開発の波及と、当地から直線距離で5km以内に位置する大虫廃寺、山岳寺院であるマンダラ寺跡、須恵器が出土した鬼ヶ岳山頂などとの関連を考えたい。

2 中世・近世の遺構・遺物について

中世・近世の遺構についてであるが、中世の遺構に関しては、その後の開発による切り合いなどで個々の遺構の特定は困難なため、残念ながら具体像は不明である。建物は復元した以上に存在したはずであるが明確にはし得ず、出土遺物が限定的なため、全ての建物について時期を特定するまでには至らなかった。その内容であるが、小規模な側柱建物が多く、総柱建物は確認していない。1間×1間の建物は7棟、2間×1間は7棟、2×2間は1棟、3間×1間は3棟確認し、他に柱穴列として確認したものがある。主な建物構成を見てみると、1間×1間の建物では、床面積は3.3~8.9㎡に収まり、平均5.9㎡となる。南北棟・東西棟の両者が同程度あり、時期は判断できないものが多い。2間×1間の建物では、桁行の中間の柱穴が無いものもある。床面積は7.7~27.0㎡とやや幅があり、平均12.9㎡となる。長軸方向を南北とするものが多い。この中には近世に位置づけられる建物がある。3間×1間の建物では、床面積が9.9~40.8㎡とやや幅があり、平均22.2㎡となる。長軸方向を南北とするものが多い。時期は中世の可能性のあるもの、近世の可能性のあるものがある。また床面積について計測可能なものを見ると、40.8㎡のSB23が最大であり、井戸(SE02)を伴っている。当地での中規模と言えるのが15.9~27.0㎡の範囲に4棟(SB18・19・25・26)あり、その他は9.9㎡以下にまとまる。このような小規模の建物は、存在したであろう礎石建物をはじめ他の建物に付属するなど、使用目的の違いである可能性を考える。掘立柱建物以外の建物では、約1m間隔で柱穴が並び、礎石の根固め石である礎が残存する。礎石の形態・規模は不明だが、同様な構造の建物は福井城跡では16世紀末にはすでに表れている。平面積では100㎡超となり、掘立柱建物とは一線を画す。時期については、付属すると考えられる溝などの他の遺構と関連させると、18世紀後半~19世紀代の建物と言えよう。微量ながら18世紀代の赤瓦片が出土しており、このような建物に利用されたかもしれない。その他の遺構では、福井城跡で多く存在する廃棄土坑と言えるものは少なく、これは都市部と山間部の違い、言うなれば人口密度や物量の差異と言えそうである。

中世の遺物について見ると、越前焼、瓦質土器に13世紀代のものがあり、古代以降の空白期間において集落が形成される。遺物には12世紀後半の常滑焼の壺(419)も出土している。越前市安丸官人遺跡においても12世紀後半から13世紀に位置づけられる常滑焼の壺が散見される。両遺跡が位置する旧武生市西部は越前焼生産地に近接する立地ではあるが、越前焼生産が13世紀後半以降増加し、広く流通していく過渡期が集落形成期にあたるのであろう。越前焼は壺・播鉢が主となり13世紀から16世紀後半まで安定して出土する。その他、中世陶磁器を見てみると、輸入磁器では、青磁は15世紀前半から16世紀前半に、染付は15世紀後半から16世紀代の時期を主体とする。これらを合わせて考えると、ほぼ朝倉氏が一乗谷を拠点に越前を支配した時期と重なる。そして16世紀後半になると、組成の中に新たに瀬戸・美濃

産陶器が加わる。大窯期の第3段階以降の製品である。古瀬戸(346)や大窯期前半の皿(345)の遺物量が少量であることを考えると、その増加は急激と言える。大窯期の第3段階の製品が、畿内や西日本の城郭、城下町遺跡で増加することは知られており²⁾、その背景として、産地における匣鉢鉢めの改良による供給力の増大、瀬戸・美濃焼産地を掌握した織豊政権による産業、経済政策など、戦国期の動向と密接に関係すると考えられている。小野遺跡から出土した大窯第3段階の器種が、碗と皿が中心になることは通常の在り方で他地域と変わらないが、搦鉢などの調理具は在地の越前焼が占めており、少なからず瀬戸・美濃産が出土する福井城跡との需要、経済力の違いと言えよう。天目茶碗は、茶の湯に関連した器種であり、当地にも茶の湯が普及したと言える。同時期に営まれた福井市下筋生田畑田遺跡は沖積低地に位置し、北陸道に近接する。農村集落ながら、都市部でもてはやされた志野筒向付や、時期は少し下がる志野織部皿が出土しており、当地とは多少様相が異なる。しかし、茶の湯の普及は農村、山村とも変わりなく、その基礎となったのは西(馬借)街道をはじめとする朝倉氏の諸街道整備と言える。

近世の集落は、基本的に中世から途切れることなく継続する。遺物には伊万里焼、唐津焼などの肥前産陶磁器、瀬戸・美濃焼、京・信楽焼、越前焼、土師質皿などの陶磁器、土器の他、石製品、漆器、木製品、金属器、銭貨など多数ある。越前焼以外の陶磁器で中心となるのは伊万里焼、唐津焼などの肥前産陶磁器と瀬戸・美濃焼である。これらの導入時期と消長を簡単に見ていくと、肥前産陶磁器の内、唐津焼は17世紀前半の大橋Ⅰ期と考えるもの(342)が出土しており、当地における唐津焼の導入時期である。福井城跡や下筋生田畑田遺跡でも大橋Ⅰ期のものが出土しており、武家屋敷、平地の農村集落と比較しても導入時期は変わらないと言えるが量的には少ない。主要器種は碗、皿である。福井城跡では碗、皿以外に甕、壺、徳利や茶陶に関連するものなど多様であり、内容には大きな違いがある。当地での唐津焼は、18世紀前半以降になると出土量が減少する。伊万里焼は17世紀後半の大橋Ⅲ期のものが出土しており、これが当地における伊万里焼の導入時期である。主要器種は唐津焼と共通で碗、皿である。同様に福井城跡と比較すると、福井城跡では17世紀前半の大橋Ⅱ-Ⅰ期に相当するものがあり、大橋Ⅲ期にかけて出土量が増大していく。唐津焼とは違い、伊万里焼の導入には時間差がある。またその内容にも大きな違いがある。出土量を見ると、当地では伊万里焼導入後の17世紀後半以降は安定して出土する。18世紀中葉以降から19世紀前半にかけては碗、皿を中心に組成の上で大きな割合を占める。この頃には遺物の中に、食膳具では筒茶碗が出現し、仏具としてお神酒徳利(132)や文具として水滴(363)、化粧道具の紅皿(79)や喫煙具(355)など食器以外の器種が現れる。出土量が増加するこの時期は、生産地において焼成技術が向上し、大量生産化が進む大橋Ⅳ期に相当し、また大橋Ⅴ期にかけて、安価な大衆向けの製品が流通する時期だが、これと軌を一にし、当地では大橋Ⅳ・Ⅴ期に相当するものが多い。

瀬戸・美濃産陶器については中世から引き続き碗、皿を中心に一定量の出土量がある。しかし、皿について見ると、18世紀以降は肥前産陶磁器、中でも伊万里焼の導入後、皿は急激に出土量が減少する。先にも述べた伊万里焼の大量生産化、大衆化の影響を強く受けている。しかし、碗について見ると、必ずしも皿と同じように出土量が減少したわけではなく、18世紀を通じて一定量の需要があり、また18世紀以降、碗、皿以外に化粧道具である鬘壺(361)や仏具(210・362)など、食膳具以外の器種が現れる。

以上、主要な産地について概観したが、当地の特色を挙げると器種はほぼ食膳具に限定される。碗では口径が10cm程度のものが主体で、大振りのものは見られない。皿も口径が11~14cm程度の中皿が主体で、大皿と言えるのは象嵌文様を施した唐津焼の大皿(86)くらいである。福井城跡では一定量出土する輸入陶磁器は、中世と比較すると激減し、漳州窯産の鉢(209)があるのみだが、これは当地での数少な

い鉢でもある。言うなれば、盛ったものを取り分けるといったハレの場に関するものが希少と言える。また、中世から継続して導入される瀬戸・美濃焼であるが、これは生産地からの距離という地理的な要素が関係すると考える。しかし、いわゆる茶陶の商圏には該当しないもの、天目碗や丸碗などが入ってきており、都市圏とは違った茶の普及が窺われる。17世紀半ば以降、都市圏の上層階級には煎茶が広まり、庶民へと普及するのは18世紀後半だとされる。当地における筒碗(11・12など)の存在はその傍証となり、安価な磁器の普及と密接に関連したものである。18世紀後半以降、量の上では限定的ながらも、京・信楽産陶磁器が加わることや、食膳具以外の器種の登場は、当地が新たな流通圏に加わり、かつ生活様式が変化した表れと言える。しかし、各器種の組成については諸要素が複雑に関連しており、一般庶民が使用した陶磁器類についてはさらなる資料が必要である。

県内、特に越前地方で発掘調査が行われた近世の農村集落には、福井市下筋生田畑田遺跡、坂井市東太郎丸遺跡、越前町小倉石町遺跡などがある。下筋生田畑田遺跡は中世から続く集落で、志野などの茶陶や朝鮮製陶器が見られる。先述したが、北陸道に近接し、福井城下より5km以内に位置することで得られる情報と経済力を有する購買層が存在したと考える。東太郎丸遺跡からは、小杯、皿を中心に大橋Ⅱ～Ⅳ期に亘る肥前産陶磁器が出土している。小倉石町遺跡は山麓部に位置する13世紀から19世紀代までの集落である。これら農村集落とされる調査例はあるが、遺物自体の報告例が少なく現時点での比較は困難である。しかし、山間地に位置する小野遺跡においても、伊万里焼の導入には多少の時間差があるが、当時の陶磁器生産地の動向を反映し、且つ流通網の中に組み込まれていたと言える。

3 小野遺跡を取り巻く状況

小野遺跡を取り巻く周辺の状況について述べると、第2章の歴史的環境の節でも触れたが、旧武生市の伝統産業には鎌、庖丁、鉈、鋏などの製造販売があり、越前打刃物として知られている。福井藩内の動向を記した歴史書である『国事叢記』の寛文八年(1668)の項目には、絹糸、生漆、浄教寺砥石や笏谷石をはじめとする越前産物三十五品目の中に馬鋏、鎌、菜刀が挙げられ、文化十二年(1815)の『越前国名蹟考』には府中の産物六品目の中に鎌が挙げられている。今回の調査ではSE05から庖丁が、SK81から鎌が出土しており(第49図1・2)、この2点が府中産であるか否かの判断はできないが、鎌について考えてみると多少なりとも示唆を含む。まず、打刃物の生産地であるが、慶長六年(1601)、本多富正は府中に入った後、街道、用水路などを組み合わせて陣屋、武家屋敷、町屋、寺町、宿場、鍛冶屋町を整備した。鍛冶屋町は火災防止上の点から集団化させて府中城の南方に設置した。この位置は、ちょうど近世北陸道と西(馬借)街道が結節する辺りに該当する(第5図)。そして産業奨励策として、鍛冶職人たちには同業者が増えないよう、自らの組織の利益を守り製品の質を保持する、という仲間を組織する特別の権利を認めた。当時、打刃物の原料には、出雲、伯耆、石見など中国地方から産出する砂鉄が使われ、鉄・銅の状態で安来(出雲)、境(伯耆)、浜田(石見)などから日本海を北上する舟運で越前の三国湊や河野浦へ運ばれた。三国湊からは川船で九頭竜川、日野川を経て白鬼女の渡し(越前市家久町、鯖江市舟津町付近)で陸揚げされ、府中へ運ばれた。もう一つの経路である河野浦から府中へ運搬するのに利用されたのが、西(馬借)街道である。享保十四年(1729)の資料には、河野浦からの鉄が織田(越前町)経由で府中に入るところ、本来通るはずの中山や勾当原の馬借に差し押さえられた争論が起きたことが記される⁽³⁾。製品の出荷においても同様で、北陸道の他に河野浦からの舟運が利用され、河野村今泉の北野五右衛門家には、弘化二年(1845)の河野今泉浦から送られた打刃物の関税明細が残っている⁽⁴⁾。これらは府中と河野浦間の流通とその道筋の多様さの一例を示している。打刃物の中でも特に鎌は、越前

鎌として近世中期以降に隆盛を極め、生産量は増加する。その理由としては、平和な社会となり新田開発、品種改良、殖産興業が興ったこと、貨幣経済の発達で良品の流通を促し生産性が向上したこと、販売路が確立したことなどが挙げられ、中には鍛冶職人から鎌問屋商人となり、北陸から伊勢や甲府までも含む地域に販路を広げる者も現れる。小野遺跡において、近世を通じて幕末に至るまでの出土遺物から、集落が継続する源となったのは上記の打刃物製造の振興と販路拡大をはじめとする、府中における産業と北前船による海運の隆盛と無縁ではないと考える。西街道を通行する馬借たちは、株仲間を組織して領主の保護を受けた者たちであるが、西(馬借)街道以外にも流通路としての街道は存在し(第63図)、府中と河野浦間の集落を結び流通を担っていたのである。当地は山間に位置するが、府中の産業の発展と共に貨幣経済の中にあることは寛永通寶の出土からも明らかである。貨幣は交通路における支払いの手段として機能し、このことは府中と河野浦を結び重要な中継地であることを示す⁵⁾。そう考えると、一分判金の出土は流通の中継地点としての当地の役割を反映したものと言えよう。



第63図 府中と日本海を結ぶ主な街道(縮尺1/30万)

組織して領主の保護を受けた者たちであるが、西(馬借)街道以外にも流通路としての街道は存在し(第63図)、府中と河野浦間の集落を結び流通を担っていたのである。当地は山間に位置するが、府中の産業の発展と共に貨幣経済の中にあることは寛永通寶の出土からも明らかである。貨幣は交通路における支払いの手段として機能し、このことは府中と河野浦を結び重要な中継地であることを示す⁵⁾。そう考えると、一分判金の出土は流通の中継地点としての当地の役割を反映したものと言えよう。

第2節 小野平等遺跡について

今回の調査では、五輪塔の部材11点と宝篋印塔の部材2点が出土した。原位置を保つ可能性のある地輪は出土せず、残念ながら中世墓の存在を明確にすることは出来なかった。中世に位置づけられる越前焼の破片も出土しており、蔵骨器と考えるが、僅かな破片数からは蔵骨器は散逸してしまったという他ない。出土した越前焼では時期を中世としか判断できないため、第60図の五輪塔についてこれまでの県内の成果に基づき、組み合わせと時期を考える⁶⁾。

空風輪については1が他より大型で、これと組み合わせる火輪は無いと考えること、3は大きく欠損することから除く。水輪の7・8は、9・10と比べて幅、高さともに大きく、7・8と組み合わせる火輪は無いと考えるため、火輪4～6、水輪9～11で組み合わせの可能性を考える。火輪の新田関係を考えると、軒が直線的な4からやや反る5へ、そして大きく反る6への推移が考えられ、水輪では最大径が中位に近い10、やや上位になる9、上位に上がり下方がすぼまる11へ推移すると考える。これらを各々組み合わせると、A類：4と10、B類：5と9、C類：6と11となる。各部材の特徴から、A類は14世紀前半～末葉に、B類は14世紀末葉～15世紀中葉に、C類は15世紀後半～16世紀後半に位置づけられる。出土時に重なっていた4と11は時期が違うことになり、やはりSX4自体が破壊とその後の集積の結果と言える。考慮から外した中で、水輪の7は最大径がやや上位に位置しB類に、8は最大径が中位近くになりA類に該当しよう。空風輪の1是水輪との釣り合いから組み合わせるものは無いと考えると、五輪塔は最低でも6基が存在した可能性がある。宝篋印塔の2点については、五輪塔の存続した時期としか判断できず、この2点が組み合わせると考えるため、石塔は計7基以上が存在した可能性がある。

SX1・2については、構成する礫の一つとして破壊された石塔片が含まれており、石塔が構築された16世紀後半以降のもつと言えよう。遺構としては、露出した岩の周囲に人為的に礫を集積したものであり、その性格については不明と言わざるを得ない。

旧武生市域の石塔類について概観すると、発掘調査によって出土した石塔類は少ない。このような中で、当地から北東約7kmに位置する安丸官人遺跡では、3年度に亘る調査から石塔類が18点出土し、その内訳は五輪塔の部材が14点、多層塔の部材が4点である。石材には、福井市足羽山から産出する、いわゆる笏谷石製のものに多層塔があるものの、五輪塔には少なく、ほとんどの五輪塔の部材は産地不明の乳色～灰色に近い色調を呈する凝灰岩が使用されている。言うなれば、多層塔は笏谷石製、五輪塔は産地不明の凝灰岩製という使い分けがなされているようである。小野平等遺跡でも宝篋印塔はいわゆる笏谷石製であり、五輪塔とその他の石塔とで石材の使い分けが行われた可能性がある。安丸官人遺跡の報告では、石塔の需要が高まった中世後半に朝倉氏の統制の下で笏谷石を生産、流通する集団と、府中を中心に別の凝灰岩を生産、流通する集団の存在が指摘されている⁽⁷⁾。両遺跡の水輪を比較すると、月輪や簡略化した蓮華座の意匠が似通っており、石材の流通と製作集団に関して共通性が指摘できる。また、小野平等遺跡における笏谷石製宝篋印塔の存在は、朝倉氏統制下の集団から笏谷石を入手可能な層の存在を窺わせるが、当時の石材に対する価値観や石白など他の石製品の素材との関連など、府中を中心とする造塔活動、石材流通については資料不足であり、今後の調査例の増加が必要である。

以上に述べたような小野平等遺跡の類別について立地に着目すると、一乗谷朝倉氏遺跡から北東約800mに位置する福井市武者野遺跡を参考に挙げることができよう⁽⁸⁾。武者野遺跡は足羽川の左岸に位置し、対岸には北ノ庄(福井)と大野を結ぶ美濃街道が通じている。この地は、朝倉氏が一乗谷を拠点とした時代には刑場や三味などであったとされ、人の死に関わる地として利用されていた。これに関し、朝倉館を中心とする城戸の内に対して、武者野遺跡が位置する武者野や、美濃街道や朝倉街道沿いの安波賀・東郷を外接地区として、河川や街道が結節する地に生じる「無縁・公界の地」と位置づける小野正敏氏の論考がある⁽⁹⁾。そして、小野集落における人の死に関わる地が吉野瀬川を挟んだ対岸の小野平等遺跡に該当しよう。中世以前から、集落の周縁および山地や河原などには、墓城など人の死に関する場が設けられたことはよく知られているが、そのような視点から小野平等遺跡の立地について見ると、川を境界に生者の世界と切り離される地、死穢の対象という「無縁」の要素を内在しており、墓城として利用される契機となったと考える。そして石塔が存在したことは、第2章第2節でも触れたが、丹生・南条山地方への仏教の布教活動と、その浸透による死者に対する供養が行われたと言えるのだが、当地では近世以降になると墓城は移転し廃れてしまう。前述した安丸官人遺跡でも、近辺に中世墓の存在を指摘しているのだが、墓城の破壊が引き起こされる戦国期の混乱⁽¹⁰⁾が府中にも波及し、小野平等遺跡でも石塔や配石遺構などの破壊、散逸、移動などが起こったと考える。

註

- 1 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『大塚向山遺跡・山腰遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第96集
- 2 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006 『江戸時代のやきもの』 記念講演会・シンポジウム資料集
- 3 越前市武生公会堂記念館 2010 『檀の響 越前打刀物語』 p16
- 4 前掲註3
- 5 類別として、石川県金沢市木越町^{木越町}に位置する木越光琳寺遺跡^{木越光琳寺遺跡}を挙げる。河北湖に近接する立地や出土遺物から、主に漁業と水運に従事した中世から近世の集落であり、調査面積を考えると銭貨の出土枚数は多いと言える。報告書では銭貨の考察において、寺院との係わりや、湖上交通における流通拠点という集落の役割を反映したものと指摘している。
- 6 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『坂ノ下遺跡群』 一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書第1集

- 7 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 『安丸官人遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第140集
- 8 武者野遺跡は、国道改良工事に伴い発掘調査が行われ、火葬場遺構と考えられる石積施設と、それに伴う石敷道構や階段状遺構と考えられる石列が確認された。遺物には朝倉氏遺跡と同様の土師質瓦、陶磁器、銅銭などの他、焼骨がある。
- 9 福井県 1986 『福井県史 資料編13 考古』
- 10 福井県大飯町山田に所在する山田中世墓群の考察では、墓の破壊行為を16世紀半ば以降の若狭国内の内乱の続発が背景にあると推定している。

参考文献

- 福井県立図書館・福井県郷土誌懇話会共編 1961 『国事叢記 上』 福井県郷土叢書第七集
- 武生市史編纂委員会 1976 『武生市史 概説編』
- 杉原丈夫編 1980 『新訂越前国名蹟考』 松見文庫
- 吉村亨・原英次 1984 『日本の茶 歴史と文化』 淡文社
- 小野正敏 1986 『一乗谷朝倉氏遺跡』 『福井県史 資料編13 考古』
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1986 『武者野遺跡 - 国道158号線改良工事に伴う事前調査報告 -』
- 稲の響 越前武生の打刀物刊行会 1986 『稲の響 越前武生の打刀物』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1987 『六条・和田地区遺跡群』 福井県埋蔵文化財調査報告第11集
- 小泉義博 1988 『西街道の変遷と蕨木浦』 『若越郷土研究』 第三十三巻 福井県郷土誌懇話会
- 水藤真 1991 『中世の葬送・墓制 - 石塔を造立すること -』 吉川弘文館
- 北陸中世土器研究会編 1997 『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1998 『木越光琳寺遺跡』 一般県道向粟崎安江町線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 - 九州近世陶磁学会10周年記念 -』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001 『小倉石町遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第52集
- 滋賀県立陶芸の森 2002 『研究集会「近世信楽焼をめぐる」報告書』 湖国21世紀記念事業・陶芸の森開設10周年記念
- 福井市文化財保護センター 2004 『福井城跡Ⅳ 福井駅付近近世立体的交差事業および市道宝水清川線改善事業に伴う発掘調査報告書』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『滝見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群』 福井県埋蔵文化財調査報告第75集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『大塚山遺跡・山腰遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第96集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『坂ノ下遺跡群』 一般国道8号敦賀バイパス関係係跡調査報告書第1集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『諏訪問興行寺遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第20集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『東太郎丸遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第39集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『福井城跡(福井駅西口地下駐車場地点)』 福井県埋蔵文化財調査報告第102集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『福井城跡(北陸新幹線福井駅部地点)』 福井県埋蔵文化財調査報告第109集
- 越前市武生公会堂記念館 2010 『稲の響 越前打刀物展』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『安丸官人遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第132集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 『安丸官人遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第140集
- 森謙二 2014 『墓と葬送の社会史』 吉川弘文館

写 真 图 版



(1) 遺跡全景 (東上空から)



(2) 平成22年度調査区中央部 (北から)



(3) 平成22年度調査区中央部 (西から)



(4) 平成22年度調査区東側 (北から)



(5) 平成22年度調査区西側 (南東上空から)



(1) 平成23年度調査区東側 (西から)



(2) 平成23年度調査区西側 (北から)



(3) K・L 9・10区遺構 (北東から)



(4) E・F 13・14区遺構 (北西から)



(5) SB18 (北から)



(6) SB09・10 (南から)



(7) SB23 (北から)



(1) SK02 (東から)



(2) SK03 (東から)



(3) SK05 (東から)



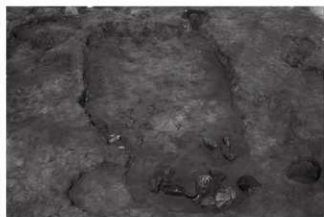
(4) SK05遺物出土状況 (西から)



(5) SK21 (西から)



(6) SK23 (南から)



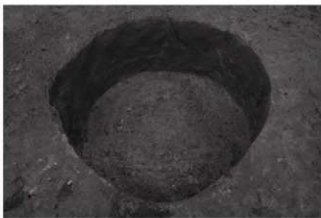
(7) SK25 (南から)



(8) SK40-42 (東から)



(1) SK52 (西から)



(2) SK60 (西から)



(3) SK78 (東から)



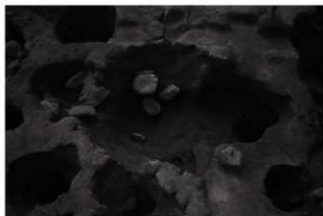
(4) SK80・87 (北から)



(5) SK81 (北から)



(6) SK82・83・84 (東から)



(7) SK107・SP582 (東から)



(8) SK105 (西から)



(1) SD03 (東から)



(3) SD45 (北から)



(2) SD03遺物出土状況 (東から)



(4) SD42遺物出土状況 (北から)



(6) SE03 (東から)



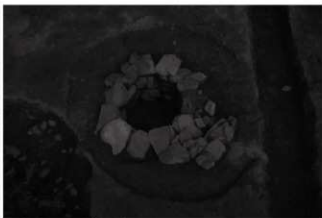
(5) SE01 (東から)



(7) SE03断面 (東から)



(1) SE04 (東から)



(4) SE05 (南から)



(2) SE04断面 (東から)



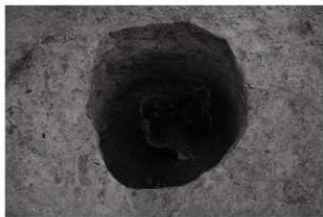
(5) SE05断面 (西から)



(3) SE04底面 (東から)



(6) SP332 (北から)



(7) SP343 (西から)

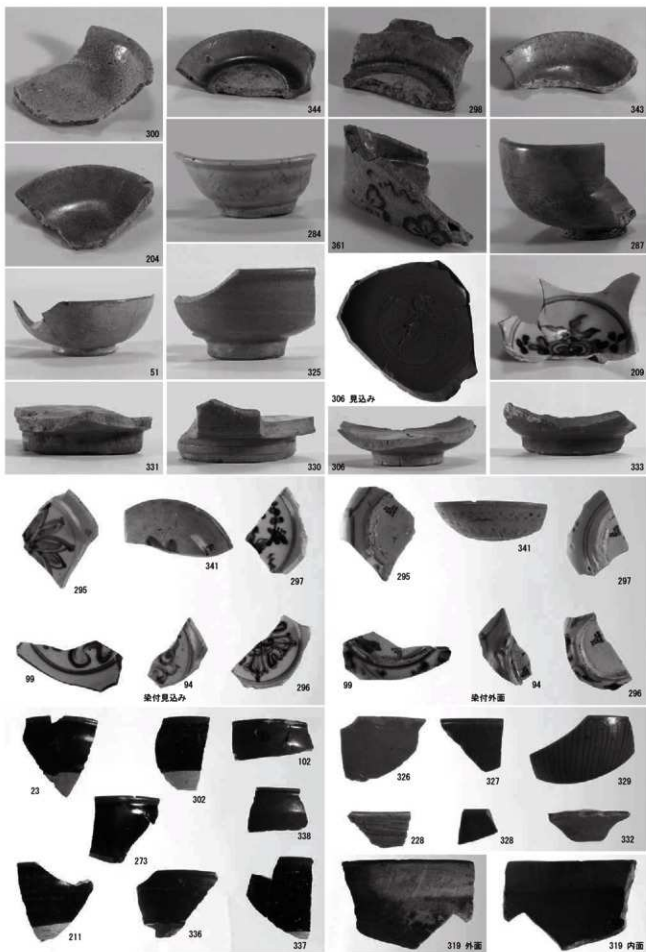


(8) SP565 (東から)

図版第七 小野遺跡 遺物



図版第八 小野遺跡 遺物

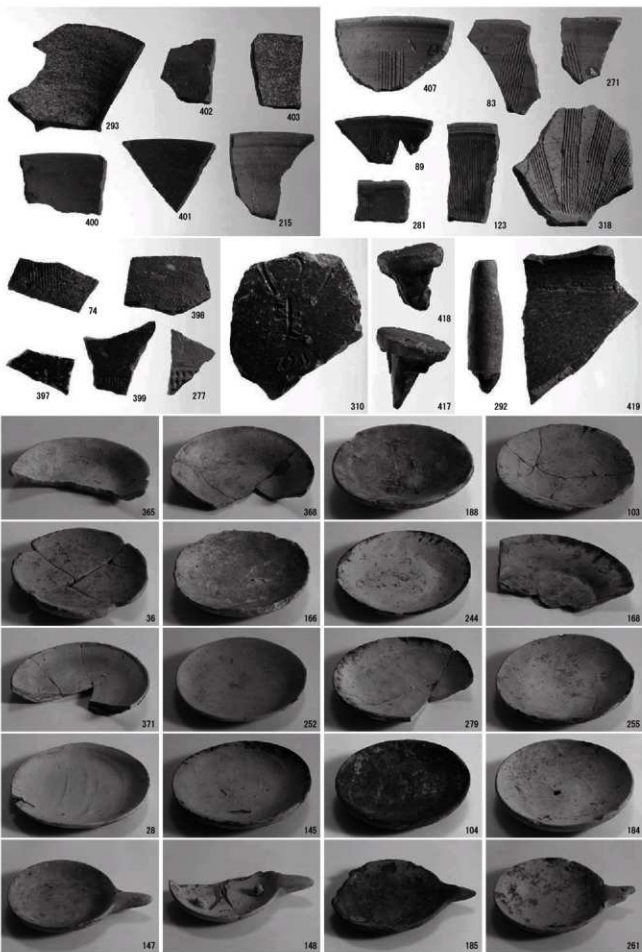


陶磁器・瓦質土器

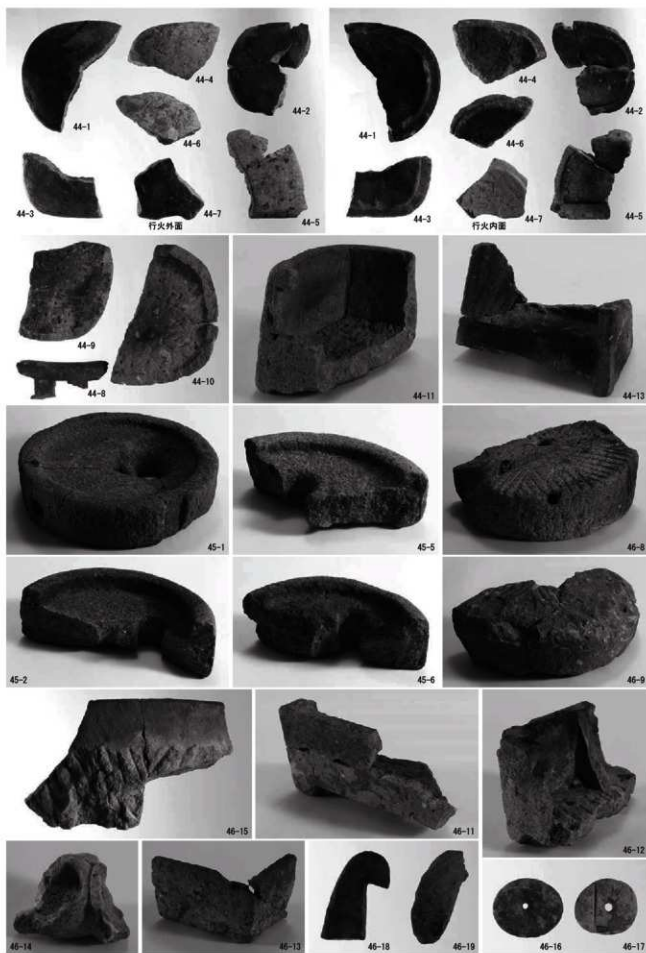
図版第九 小野遺跡 遺物



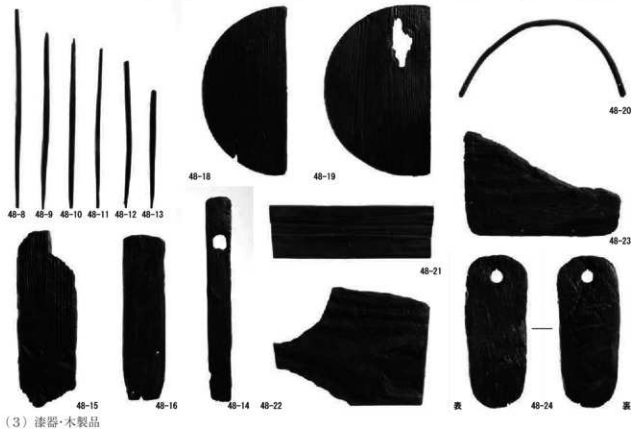
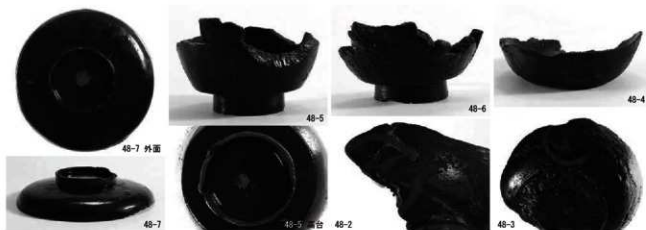
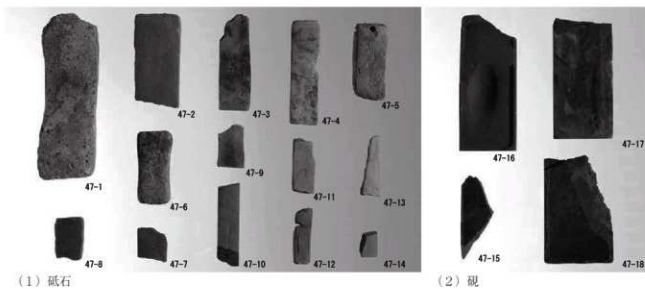
図版第一〇 小野遺跡 遺物



越前焼・常滑焼・土師質皿



図版第二二 小野遺跡 遺物





(1) 金属製品・貨幣



(2) 須恵器・縄文土器



(1) 調査前全景 (南から)



(2) 平坦面調査前 (西から)



(3) SX1・2調査前 (南から)



(4) SX1調査前近景 (南東から)



(5) SX2調査前近景 (南東から)



(6) SX1畦断面 (北東から)



(7) SX2畦断面 (北東から)



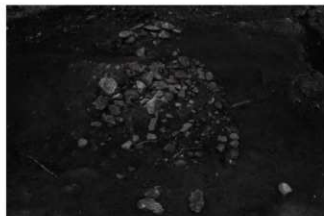
(8) SX1掘削後 (南東から)



(1) SX2掘削後 (北西から)



(2) 石塔露出状況 (南東から)



(3) SX4 (南から)



(4) 石塔出土状況 (東から)



(5) SX4火輪出土状況 (東から)



(6) 空風輪出土状況 (東から)

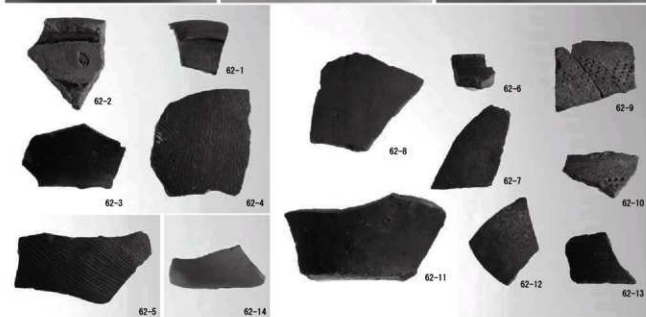
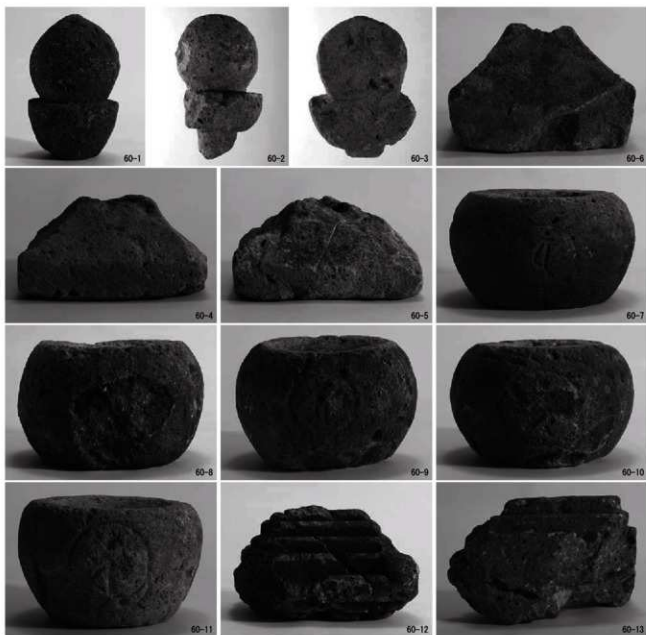


(7) SX3 (南から)



(8) 平坦面掘削後 (南から)

図版第一六 小野平等遺跡 遺物



石塔・須恵器・陶磁器

報告書抄録

ふりがな	このいせき・このだいらいせき							
書名	小野遺跡・小野平等遺跡							
副書名	日野川総合開発事業吉野瀬川ダムに伴う調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第156集							
編著者名	野路昌嗣 中島啓太							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2015年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
このいせき 小野遺跡	ふくいけん 福井県	182095	03183	35°	136°	20100506	12.600	記録保存 調査
	えちぜんし 越前市			52′	05′			
このだいらいせき 小野平等遺跡	このちやう 小野町		03184	53′	47′	~	750	
				35°	136°	20111130		
				52′	05′			
				55′	55′			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小野遺跡	集落	古代 中世 近世	建物・土坑・ 溝・柱穴・井戸	須恵器・土師質皿・ 陶磁器・石製品・ 漆器・木製品・ 金属器・銭貨など		中世から近世まで 継続した集落である。		
小野平等遺跡	その他の墓	中世	石積み遺構	石塔・陶磁器など		中世の小野集落の 墓域であった。		
要約	<p>小野遺跡は、ダム建設のために移転した旧小野集落の跡地であり、古代および中世から近世の集落である。古代については明確にし得ないが、中世以降は、府中と河野浦間の街道整備に伴って発展し、近世には交易の中継地という性格を持つと考える。</p> <p>小野平等遺跡は、吉野瀬川を挟み小野遺跡の対岸に位置する。中世には、小野集落の墓域として中世墓が存在したことが、石塔の出土から考えられる。近世以降は自然地形を利用した石積みが作られるが、その性格は明確にし得なかった。</p>							

福井県埋蔵文化財調査報告 第156集

小野遺跡
小野平等遺跡

— 日野川総合開発事業吉野瀬川ダムに伴う調査 —

平成27年3月13日 印刷

平成27年3月20日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 株式会社エクシート

〒919-0482 坂井市春江町中庄61-32
